

Socially

No. 29 March 2021

Sociology and Social Work



S o c i a l l y

第 29 号

March 2021

目 次

〈巻頭言〉

コロナ禍は、将来どのように語られるのか

.....大 瀧 敦 子

〈講演会〉

New normal時代の仕事を考える

～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～

.....柏 村 美 生…(1)

〈特集 コロナ禍における変化〉

コロナ禍における「監禁状態」を考える.....石 原 英 樹…(29)

コロナを経て「祭り」をとりもどすのか.....金 子 充…(31)

プレ座談会

石 岡 里佳子／石 川 真 衣

伊 藤 小 春／木 島 夏 海

池 田 希 帆／高 橋 美 衣

東 野 好 花

.....(33)

認知症家族介護者が抱える課題とポストコロナ時代への展望

.....金 圓 景…(41)

ささやかな「奇跡の年」のために.....

澤 野 雅 樹…(43)

第1回座談会

井 村 知 貴／栗 原 瑞 生

生 澤 美 結／明 角 優 花

伊 藤 小 春／高 橋 美 衣

.....(45)

学校とは何するところであったか

—コロナ禍における教育社会学オンデマンド講義から—

.....元 森 絵里子…(59)

第2回座談会

石川 さやね／鈴木 菜々

鈴木 穂乃花／山田 梨穂 … (65)

石岡 里佳子／東野 好花
澤野 雅樹

コロナ禍における医療ソーシャルワーカーの相談援助の変化

……………下田 尚子 … (73)

働きかた、働く場所の変容を考察する ……沼田 元明 … (77)

「フィルター X」とは何か

—身体性向としての社会的距離に関する一考察—

……………岩永 真治 … (81)

〈エッセイ〉

明治学院大学社会学部機関誌の歩み ……丸山 義王 … (93)

〈卒業生インタビュー〉

ITを活用して問題解決へ

—ICT (情報通信技術) アウトソーシング事業に従事する宇佐美果乃さん
にお話を伺う—

……………石川 真衣 … (103)
東野 好花

自分なりにコツコツと頑張り、ベストを尽くす

—東京オリンピック・パラリンピックに携わる小日向藍菜さんにお話を伺う—

……………石岡 里佳子 … (109)
伊藤 小春

言葉を人に届けるお仕事

—テレビ局員・アナウンサーとしてお仕事される重信友里さんにお話を伺う—

……………伊藤 小春 … (115)
石岡 里佳子

自分たちを通して社会全体を良くしていく

—障害を持つ当事者として勤務される白井誠一郎さんにお話を伺う—

……………木島 夏海 … (123)
石岡 里佳子

2020年度 社会学部 卒業論文 タイトル一覧

2019年度 社会学研究科 修士論文・博士論文 タイトル一覧

編集後記

コロナ禍は、将来どのように語られるのか

大 瀧 敦 子*

この原稿を執筆しているのは11月下旬ですから、2020年も終盤です。世界中のかなりの人達が、この2020年を「コロナの年」として記憶し、語るようになるのでしょうか。

2011年東日本大震災が起きた際、私は、大学で最も古い建物、ヘボン館10階の個人研究室で仕事をしていました。突然、今までにない大きな軋み音が聞こえたと思ったとたんビルの横揺れが始まり、収まる気配を見せません。揺れ続ける部屋から、本館までほぼ這うようにして逃げ出したことを覚えています。「自分が生きている間に、こんなとんでもない地震に遭遇するなんて」というのが、最初に頭に浮かんだこと。その後、揺れが収まりかけたころから、学内にいた人々が避難を兼ね、ヴォーリズ広場に集まりだしました。皆、情報を得ようとして当時のガラケーのワンセグ(!)で、ニュース映像を見だしたのもこの辺りでした。真っ黒な大量のうねりとなった海水が、家々、ビルを飲み込んでいく映像を目にしました。この世のものとは思えない、という表現しか浮かばない。当然、初めてみる光景ですし、衝撃が強すぎて、私などは、親戚の多くが福島県の海岸沿いに居住していることさえ、その時は思い至りませんでした。

当日は友人宅に泊めてもらい、翌日にはバスで自宅へ戻れたわけですが、自宅はガスが止まっていたくらいで特に変化もなく、拍子抜けしたことも覚えています。しかし、次第に、福島原発の報道が差し迫ってくる中、初めて、連絡の取れない親族や知己の行方を案じはじめ、夜通しテレビの前を離れられない日々を過ごしました。

この震災体験の記憶と比べようとしても、「コロナの年」は、私の中で将来何が、どのような記憶として残るのか、一向に見えてこないのです。これまでの経過の中、日本での緊張感が最も高まったのは、全国に出された緊急事態宣言を挟む3月から4月にかけてでしょう。未知のウイルス、感染症への恐怖が、人々をマスクや紙製品の買い占めに走らせたあの頃です。11月22日現在、1日の日本における陽性者数は軽く2000人を超えていますから、状況が悪化していることは間違

* 社会学部長 教授(社会福祉学科)
社会学・社会福祉学会会長

いないですが、人々は挙って紅葉を楽しんでいるようです。

専門領域である医療福祉の立場から常に気になっていたのは、日本におけるPCR検査数の少なさを巡って、甲論乙駁の様相を呈し報道が過熱していったことです。この議論も、感染の波がとりあえずの収まりを見せれば、声も小さくなり、「なぜ、先進国の中で日本だけが検査に消極的なのか」の疑問は、宙に浮いたままです。厚労省によれば、11月18日時点での日本における1日の最大検査能力は84,585件ですが、実施件数は約35,000件とあります⁽¹⁾。一方で、韓国に関する5月21日の報道では、民間大手検査会社1社で、1日の検査可能数は10,000件⁽²⁾、フランスでは7月時点で週に37万件という報道もあります⁽³⁾。

日本政府のPCR検査への消極的姿勢は、第3波襲来がほぼ確実な現在に至っても、濃厚接触者認定の基準などを見るとさほど変化があるとは思えません。曰く、検査による擬陽性率の問題、保健所検査体制の不備、無症状感染者の処遇の問題等々。確かに、検査数さえ増やせば感染拡大防御が可能という問題でないことは、ヨーロッパの例を見ても明らかでしょう。

しかし、それでもなお、疑問を感じるのは、感染症の専門家や官庁の技官という科学を専門とする人たちが、データ収集という議論のベースづくりに積極姿勢を示さない点です。限界はあるにせよ最大限可能な科学的データ収集を行い、現状分析に生かすのが科学の基本であり、擬陽性率などはその後の統計処理等で十分修正可能なはずです。感染拡大抑制の即効薬としては機能せずとも、この感染症がどんなエリアで、どんな速度で、どんな広まり方をしているのか、ウイルスの変異はどのような場所で生じているのかなどの分析や解釈は、将来の感染症対策にとっても欠かせないはずです。

大量の検査を行えば、そのための費用や無症状感染者の処遇といった直近の課題が容易に想定されます。そして、従来「感染症は克服済み」として1994年保健所法改正以降進められてきた保健所統廃合といった公衆衛生対策の読み違いについては、既に大きな齟齬が露わになっています。最終的にその責を問われるのは、政治家であるだけに、渦中にあっては出来るだけ楽観論を採用し、第一波の時のように「ファクターX」という「神風」が、理由は不明ながら解決してくれることを日夜祈っているのかとさえ思えます。しかし、そういった政治への「付度」から離れた立場にいることこそが、科学の重要な立ち位置なのでは。

福島第一原発を巡っては、1997年から指摘されていたという巨大津波の危険性について、土木学者、地震学者、そしてもちろん原子力発電の専門家が、幾度となく意見交換を続けていながら⁽⁴⁾、それらを被害防止に生かせなかったこと、科学的提言が政治・経済への「付度」でゆがめられることの怖さを、我々は十分学んだように思うのですが。

〈注〉

- (1) 厚生労働省HP <https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html> 2020.11.23閲覧
- (2) JNNニュース <https://note.com/tbsnews/n/nbf1652b5eda5> 2020.11.21閲覧
- (3) SankeiBiz <https://www.sankeibiz.jp/macro/news/200726/mcb2007260900002-n1.htm> 2020.11.23 閲覧
- (4) 福島原発刑事訴訟支援団HP <https://shien-dan.org/soeda-20181019/> 2020.11.23閲覧



講演会

New normal時代の仕事を考える

～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～

..... 柏村 美生

講演会

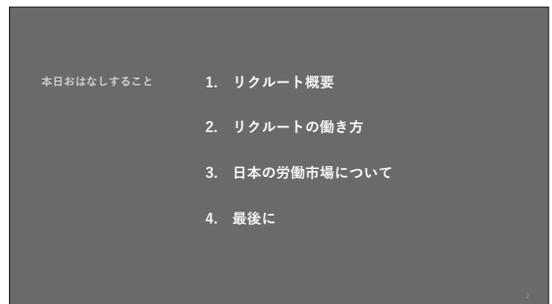
New normal時代の仕事を考える ～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～

日 時 2020年11月11日 (水)

16時半～18時

講演者 柏 村 美 生

会 場 Zoom会議室



柏村：みなさん、こんにちは。あらためましてよろしくお願いたします。社会学部の石川さんから、8月に「コロナ禍での働き方の変化についてお話をしてほしい」というご連絡をいただきました。今日は少し広げて、「働く」というテーマでみなさんに何か気づいていただけることがあればいいな、という形で、進めさせていただきます。

社についてのお話を少し、次に私たちは今どんな働き方をしているかというお話をし、3つ目に日本の労働市場のこれからのについてお話しします。そして、最後に、これらを通して、「働く」ということについて、みなさんと考えていけたらなと思っています。



今日は3つのポイントでお話ししようと思っています。まず私が働いているリクルートという会

はじめに

まずは、簡単に自己紹介をさせてください。柏村美生(かしまむら・みお)と申します。会社でも友人にも、ほとんど下の名前で「みおさん」と呼ばれております。東京生まれで、夫と犬と生活をしております。

仕事以外で少し携わっている活動は3つあります。ひとつは「World Employment Confederation (世界雇用連合)」という、世界の労働法制を決めるILOに政策提言をするような団体のアジア代表をやらせていただいています。2つ目は、東大のPHED (Platform of Higher Education and

Disability) という、障がいを持つ学生さんたちの「学び」や「働く」ことがスタンダードになるようなプラットフォームを創っていこうという活動を行っている団体で、社外員をさせていただいています。これは今年で4年目になります。3つ目は、最近、ホットな話題ですが、低炭素社会戦略センターで社外委員をさせていただいております。

実は母校で講演をさせていただくのはこれが初めてで、微妙に緊張しておりますが、よろしくお願いたします。

私は、98年に社会学部の社会福祉学科を卒業しました。社会福祉学科のなかでも、当時は分裂病と言われており、今は統合失調症と呼ばれる精神障がいの中に、大変興味を持ちました。大学に在学中は、村上先生のゼミを取っていました。振り返ると、大学時代の自宅の本棚は、精神障がいの本で埋まっていたような記憶があります。卒論は「精神障がい者の起訴前鑑定」という論文を書いていました。部活は体育会水泳部で、4年間、白泳会で水泳をやるような、そんな学生時代を過ごしておりました。

なぜリクルート社で働くことに?

そんな私は今、リクルートでなんと22年目になります。なぜリクルートで働くことになったのか、少しご紹介させていただきます。

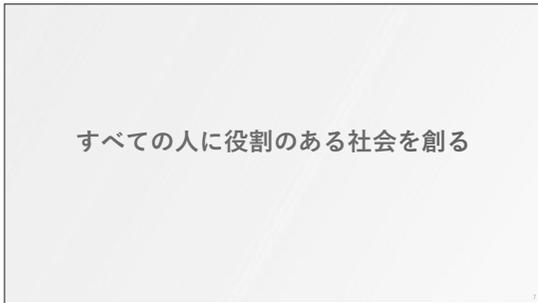
実は私はもともと、リクルートで働く気はありませんでした。むしろ社会福祉に関連する企業、もしくは社会福祉系のドキュメンタリーを作るような、情報発信ができるメディア関係の企業を考えていた学生でした。その他、いわゆる福祉系の病院や、作業所に勤めるという選択肢も、大学3年生になるときはあったと思います。

実はあることをきっかけに、リクルートに入ることを決めました。先ほども述べましたように、大学時代は水泳とゼミに力を入れていたわけですが、それと同時にボランティアにも力を入れていました。そんな中大学3年生のときに、筋ジストロフィーの方たちと一緒に仙台へ旅行に行くというボランティアをさせていただきました。福祉学科の方はご存知かもしれませんが、筋ジストロフィーとは、足から順番に筋肉が動かなくなり、徐々に全身が動かなくなって、呼吸ができなくなっていく病気です。その方たちのボランティアを大学時代はさせていただいたんですが、その仙台旅行のなかで、ある出来事がありました。

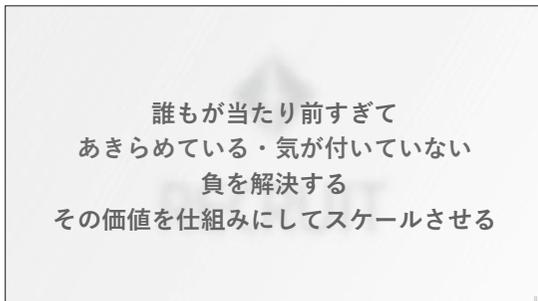
彼らは、作業所に勤めておられました。作業所は当時、家族から障がいをお持ちの方を、ある意味、お預かりして介護するという仕組みも持っていました。その作業所での彼らの月給は、いろいろなものを引かれてしまうと、月に3000円ぐらいでした。その方たちと一緒に仙台に行っただけです。観光施設には障がい者手帳を持っていると無料になるという制度がありますが、あるお寺では障がい者手帳が使えず、300円の拝観料が必要でした。私がボランティアを担当させていただいた方に、「どうされますか?」とお伺したら、彼は少し考えてから、「柏村さん、回ってください」とおっしゃったんですね。「回るってどういうことかな?」思って私がキョトンとしていると、「お寺の周りを回ってください」とおっしゃるのです。それはお寺の生け垣の周りを、当時は10kgくらいある電動車椅子で回るとのことでした。

私は生け垣をゆっくり20分くらいかけて回りながら、やはり福祉の世界は補助金の中で成り立っているだけだと、良くならないんだなとすごく痛感したんですね。筋ジストロフィーの方が、あんなに重たい電動車椅子で仙台まで来たのに、お寺の生け垣の周りを回る…。そのことが私の中ですごく違和感になりました。だから私はこのまま福祉の世界に入っても、きっとその世界を良くする活動なんて全くできないだろうな、と学生ながらに考えました。ちゃんと勉強しよう! ビジネスの勉強をしよう! と思って、リクルートの門に入

りました。



リクルートに入ったら、すべての人に役割のある社会を創るんだ、と決めていました。これは大学時代の経験や思いから、ずっと22年間変わらないと思います。さまざまな肉体的、精神的な障がいがある方も、健常者も、老若男女問わずいろいろな人とつながって、稼いで働くこともあれば、人に何かをして「ありがとう」と言ってもらうこともある。そうやってすべての人が、人とのつながりのなかで役割を持てる社会が創れたらいいなと思っていました。



仙台旅行では、このまま福祉の世界に入っても、私は全く役に立たないなと思いました。でもそんな風に、誰もが今まで当たり前だとあきらめている、当たり前だからこそ気付かないような社会の課題や、人の困り事を解決する仕組みを作りたい。仕組みにするから儲かって人が集まるし、その価値が継続されることができる。そんなビジネスをやれるようになりたい。そういうことを学んで、自分があのかき役に立てなかった福祉の場所に戻って行けたらいいなと思って、リク

ルートの門を叩きました。そしてまさかの22年、リクルートにいます(笑)。

98年リクルート社 入社	
98年	新規事業部門配属
00年	赤ちゃんのためにすぐ使う本
02年	ゼクシィ
04年	上海瑞利利広告有限公司
09年	新規事業部門(ちらしビジネス)
10年	人人網合弁企業設立・撤退
11年	ボンパレマーチャンダイジング
12年	リクルートライフスタイル執行役員 ホットペッパービューティ事業長
15年	リクルートホールディングス執行役員
16年	リクルートスタッフィング代表 World Employment Confederationアジア代表
19年	リクルートマーケティングパートナーズ代表 リクルートホールディングス PR執行役員

私がリクルートに入ったのは、98年の就職超氷河期の頃。実はかなり就職活動に苦戦しました。入社してからの22年間は、本当にさまざまな事業を経験しました。ご存知の方もいると思いますが、結婚情報の「ゼクシィ」、オンラインで授業が受けられる「スタディサプリ」、中古車情報の「カーセンサー」、美容院などが予約できる「ホットペッパービューティー」まで、さまざまな事業を経験して今に至ります。今はリクルートマーケティングパートナーズという、スタディサプリやカーセンサー、ゼクシィを運営している会社の代表をしています。また、リクルートホールディングスの方では、いわゆるPRの執行役員として兼務体制で日々、働いています。そのなかで、中国にも6年ほど駐在しました。まだWTO加盟前の中国でゼクシィを創刊し、そのまま6年ほど駐在していました。



みなさんの中に、ホットペッパービューティーを使っていただいている方はいらっしゃいます

か？ これはネットで美容院が予約できるサービスですが、その事業のトップをやりながら、同時に大学時代の思いを実現するような取り組みも始めました。それは名古屋周辺で「ふくりび」という寝たきりのご老人や、美容院に行くのが難しい障がい者の方の髪の毛をカットする福祉団体があるのですが、そのNPOと提携して、全国に訪問美容をマーケットとして創っていく活動です。

みなさんはもうあまり知らないと思いますが、私が大学生の頃に「カリスマ美容師ブーム」というのがありまして、人気の美容師さんに髪の毛を切ってもらおうという流行があったんです。そんな中、私がボランティアで担当していた方が、「青山の美容院に行きたい」とおっしゃったんですね。ですが当時は、なかなか電動車椅子の方を受け入れてくれる美容院がなくて。何軒も電話をして、ようやく受けていただき、青山のおしゃれな美容院で髪の毛を切ってもらったことがありました。その時にその方から「柏村さんと出会って一番嬉しかったことだよ」と言ってもらえて、こちらもすごく嬉しくて。美容室に行くことって、人が生活する上でとても大事な位置にあるんだな、特別なことなんだなとすごく印象に残ったんです。だからホットペッパービューティーを担当した際に、寝たきりのご老人や障がいを抱える方でも、身支度を整える、髪の毛を切る、綺麗になることのお手伝いができないかと思い、サービスをスタートしました。

今はスタートしてから約6年(2015年4月より)経ちます。始めた当初は全国で数十名ほどしか訪問美容ができる人はいませんでしたが、今では多くの人気サロンの店長さんが訪問美容の資格を取って、生涯にわたって髪の毛を切る人であろうとする、ということがマーケットの中で動き出しています。振り返ると、大学時代のあの経験がこのビジネスを生んだんだなと思ったりします。

先ほど仕組みにするというお話をしましたが、リクルートでは動画とリアルで訪問美容のワークショップを実施しています。先ほどご紹介したNPOさんと提携して、実際に訪問美容の経験がない美容師さんにノウハウを伝えていくことを進め

ています。また、できる人を増やすためには、もうかる仕組みを作らなくてははいけません。実際、寝たきりの方や障がいのある方だけではなく、その方たちを介護する家族の髪の毛も一緒に切れるような法律改正が行われました。これはあと5年から10年くらいすれば、大きなビジネスになるのではと思っています。

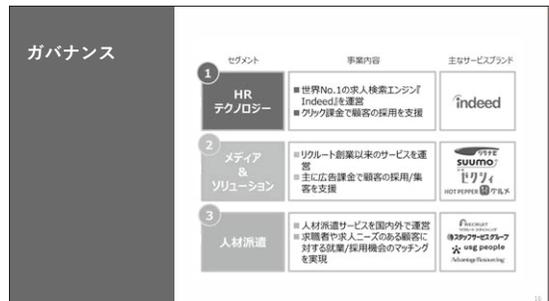


「すべての人に役割のある社会を創る」という言葉ですが、学生の時は、もうちょっとふわっとした感じのことを、なんとなく思っていただけでした。リクルートに入社して、いろいろなことを自覚化しながら社会人として働く中で、20代後半になるまでに、この言葉に消化することができたように思います。

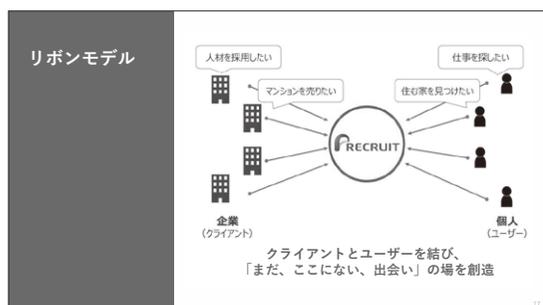
1. リクルート概要

リクルートがどんな会社なのか、その話を少しさせていただきます。売上は約2兆3000億の会社で、営業利益は約2000億円です。グループ従業員は、現在約5万人います。世界に1000の拠点を持っていて活動している会社です。

みなさん、この中で知っている会社があります



か？ あったら嬉しいです。3つの部隊に分かれていて、ひとつがIndeedです。CMが流れているので、もしかしたら見たことがある方がいらっしゃるかもしれません。こちらはオンラインで人材マッチングをするビジネスをやっている会社です。そして、私がいるところが、リクナビやSUUMO、ゼクシィなどを運営しているメディアソリューションという部隊です。そしてもうひとつが人材派遣ビジネスで、これもグローバルです。リクルートは大きく、この3つに分かれています。



リクルートは基本的にどんな会社なのか、説明するのはすごく難しいのですが、簡単に言うとリボンモデルというもので、個人のWantを叶える、企業のWantとつなぐ、ということをやっています。例えば「仕事を見つめたい」方と、求人している企業さんをつなぐ。「新しいお家を買いたい」方と、マンションを売りたい企業さんをつなぐ。簡単に言うと、そのようなビジネスです。私たちは「まだ、ここにはない、出会い」を創っていきこうと決めて、グループ全体で動いている会社です。

サービスで言うと、仕事を選ぶ、結婚をする、出産をする、転職をする、家を買うといった、人生の大きな分岐点に寄り添い、選択の連続である人生の選択のお手伝いするという、外食や旅行に行くなどの日々のエンジョイをお手伝いすること。この2本柱でビジネスを展開しています。

みなさんから見えるところと、ビジネス構造は少し違うかもしれませんので、それをご説明させていただきます。

ホットペッパービューティーと聞くと、サイト

でネット予約して美容院が選べる、ということがみなさんから見たときの見え方だと思います。ですが実は、私たちのビジネスでいうと、美容サロンのバックヤードの仕組みをどんどんクラウド化して、IT化していく、DX化していくことが、もうこの7～8年前からメインの仕事になっています。日々のスケジュールを紙で管理していたような美容師さんたちも、今はほとんどパソコンでスケジュール管理をされていると思います。あの仕組みは、ほとんどリクルートが全国的に提供しているビジネスです。たとえば、今から30分後に美容院が開いているか調べられるのは、それをクラウドで実現させるサービスを今、リクルートが展開しているからなんです。

また、最近、グッと力を入れているのが、Air ビジネスツールズです。これもオダギリジョーさんが出演されているAirペイのCMで、もしかしたら知っている方もいるかもしれません。このサービスでは、キャッシュレスによる非接触な決済手段を通して、コロナ禍で接触機会を低減するお手伝いをしています。

バリューズ
大切にする価値観

新しい価値の創造
WOW the World

個の尊重
Bet on Passion

社会への貢献
Prioritize Social Value

私たちの会社は、この3つに価値観を収斂させています。私が入社したときから、この言葉はずっと大事にされてきました。私も実は今でも、入社式やマネジャー研修など事あるごとにこの3つの話をしています。

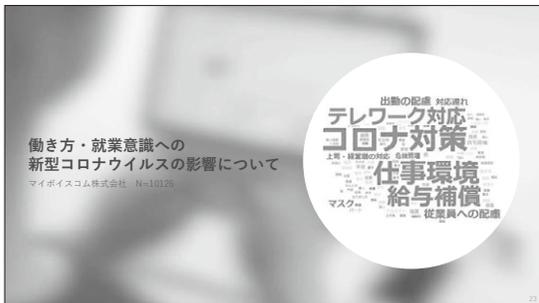
まずひとつ目は、「全く新しい価値を創造しよう」ということ。私たちの会社は何のために存在するのかというと、先ほど申し上げたように、何か世の中で困っていることを解決するため、テクノロジーで解決する仕組みを創っていくことを

決めています。

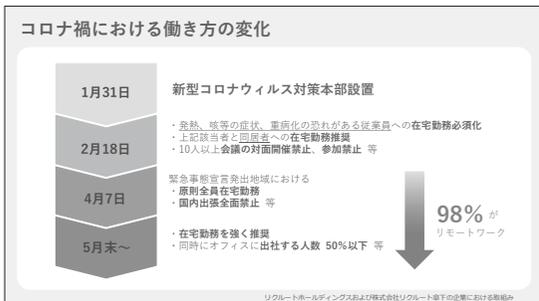
そして、2つ目ですが、その原点には「個の尊重」があります。そこにいる1人ひとりの困ったこと、気づいたことを深く掘り、尊重していくことで課題が見え、それを解決することで価値が生まれてきます。だからこそ、個人にフォーカスすることは重要です。

3つ目はその結果として、「社会への貢献をしよう」ということ。つまり、「個の尊重」をし、「価値を創造」し、「社会への貢献」をしよう、ということを決めています。

2. リクルートの働き方



今回のお題としていただいていた、私たちの働き方について少しお話をさせていただきます。今年には本当にコロナの影響がとても大きかったです。マイボイスコム株式会社の調査で、ちょうど7月に出たワードを可視化しました。やはり日本で「コロナ対策」、「テレワーク対応」、「仕事環境」、「給与補償」、「従業員への配慮」といったワードが一気に噴出したのがわかります。きっと大学の先生や大学の事務局の方も、みなさんこれにはすごく苦労されたと思います。



私たちの会社はこんな感じの対応を行いました。1月末に会社として、いわゆるコロナウイルス対策本部が立ち上がりました。2月に入ったときには、基本的には発熱のある方や、家族に持病のある方を抱える従業員は在宅勤務の必須化が行われました。10人以上の対面禁止が決まり、4月からは基本的に全員、在宅勤務になりました。今でも基本的には在宅を強く推奨していて、もし多くても50%以上は出勤できないと決められています。けれども実際としては、もう98%がリモートワークです。なので、今日も会社に来ていますが、オフィスにはほとんど人がいません。



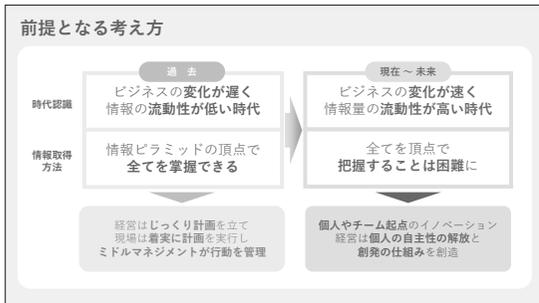
そのなかで私たちが苦労したり、工夫したりしていることは、「戦略の共有」です。私たちの会社は、実はいろいろなことを共有したい会社です。ですが、なかなかリアルで集まることができません。こちらの写真に写っているのはCEOの峰岸、グループ会社のトップです。ちょっとこの写真、顔が怖いですね(笑)。もうちょっと優しい人です。峰岸もこんな形で、オンラインで発信しています。右側は私の会社の写真ですが、現在はワイドショーのように動画映像をライブ配信しています。4月、5月はなかなか慣れないこともあったのですが、今はどんどん使いこなして、ライブや動画配信も行っています。今はこんな形で、従業員とコンタクトをしている形です。

私自身は今、週に1回ぐらいは出勤をしています。これは先々週に会社で撮った写真です。誰もいないので、まるで新品のオフィスのようです。ワンフロアで100人ぐらい入るオフィスですが、会社に行っても5～6人ぐらいの従業員に会う

か、合わないかという感じです。



このリモートワークや動画などのシステムは、いきなりコロナでスタートしたわけではありません。実は、10年以上前から取り組んできました。育児や介護を抱える従業員の働きやすさも含めて、2008年ぐらいから、フリーアドレスや在宅勤務、ビジネスチャットを導入する中で、離れていても働ける環境を整えてきた経緯があります。

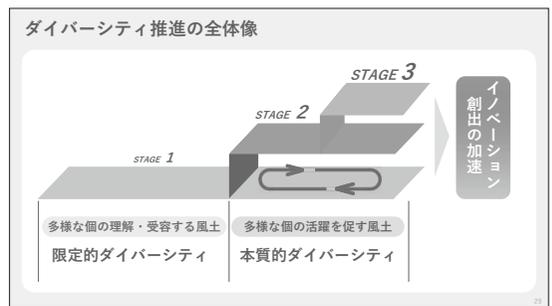


みなさんの中には、働いている方もいらっしゃいますし、来年、就職する学生さんもありますし、大学に入ったばかりの学生さんもいらっしゃいます。ここからは、社会の変化について少しお話をさせていただきます。

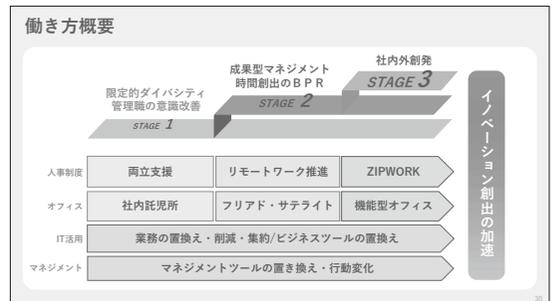
これは会社によっても違うと思いますが、10年前までのビジネスの変化は、今よりのんびりしていたように思います。情報の流動性も今よりは低かったと感じています。社長さんがいて、部長さんがいてという、ある意味、この縦の情報の中で経営ができていた時代がありました。その時代は、やはりちゃんと計画を立てて、マネジメントしてやっていたと思います。ですがこの5～6年

前ぐらいから、ビジネスの変化が劇的に速くなりました。そしてこれからはもっと加速していくと思います。

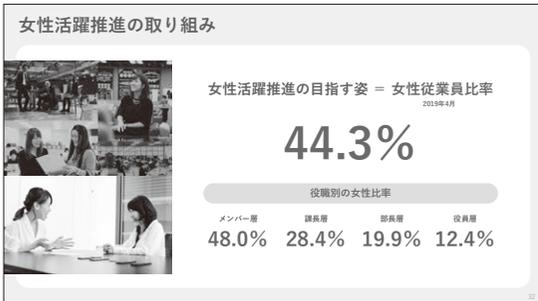
当たり前なのですが、私がそれを全部把握することはできません。得意分野が重なっていかないと、経営なんて全然できなくなってきます。今はどちらかという、個人やチームが勝手に起点となって、新しいものを生んでいくことをどう創れるかが、会社のテーマになっています。そのために、働き方を進化させてきたという感じです。



すでに働いている方もいらっしゃると思いますが、いろいろな会社や業態によって、働き方や働きやすさは、もしかしたら違うのかもしれませんが。実は私たちの会社も、10～15年前は本当にある限定された場でのみ、フリーな働き方ができるかなといった感じだったんです。ある意味、限定的なダイバーシティから、ようやく本質的にダイバーシティに入れたのが、8年くらい前からだと思っています。そのことによって働きやすくなり、より新しいイノベーションを生み出しやすくなりました。



みなさんからすると、少し先の未来のこともあるかもしれません。限定的というのは、制度や社内託児所、両立支援があるという時代から、今はフリーアドレス、サテライトなどで働く場所を自由に選べる。また、リクルートの中で閉じずに、社内外とつながることを仕組みとして大事にして、日本社会の働き方を進化させる、ということにも取り組んでいます。



私たちの会社は、50%弱が女性です。ただ、管理職になると、まだまだ男性の方が多いですね。課長職でも3割ぐらい、部長職は2割。役員になると10%ぐらいの会社です。でも、日本社会の中では割と進んでいるかなと思います。

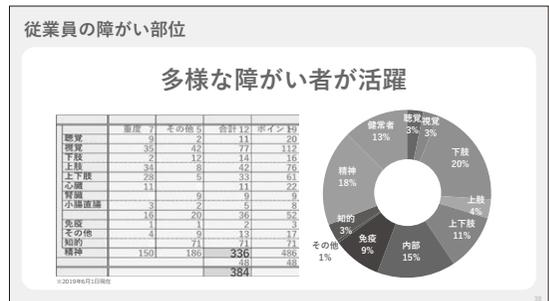


私は、制度では社会は変わらないと思っています。だから実際に相手の立場に立つ、相手のことを疑似体験することを会社の中では大事にしています。スライドの左側は「育ボスブートキャンプ」といって、子どものいないマネジメント職が、子どもを持っている家族の下で子育てや家事を体験します。また、VRの中で、ワーキングマザー・ファザーの疑似体験をすることも研修に取り入れ

ました。リアルに自分が何を感じるかでしか、人とのつながりや人との接し方は変わらない。そういう考えから、リクルートではこんなことをずっと続けています。結果、研修を受けた方の意識がすごく変わるということが、この数年間の取り組みでわかってきました。



ももとの私のベースにある、障がい者雇用についてもお話します。リクルートグループには障がい者の方が、1300人ほどいらっしゃいます。これは手帳を明らかにしていらっしゃる方だけなので、実際はもうちょっといると思います。いろいろな働き方がありますが、そのなかでも今日は特例子会社のご紹介をさせていただきます。これは私自身も関わっておりました。大学で学んだことをもって会社を経営するという点では、本当に、障がい者に関わらず、ダイバーシティに興味を持ち続けたことで、今の自分があるなと思っています。実際にこの特例子会社も、今はマネジメントラインに関係ないのですが、相談に来ていただくことがあるくらい大学時代の知見が生きています。



この特例子会社は、黒字経営であることと障が

いの種類が非常に多様なことが特徴です。実はこういった会社が黒字経営できているのは、非常に珍しいことだったりします。どんな仕事をしているかという、先ほど申し上げたりクルートグループ全体の事務代行業やオンライン媒体の細かい情報審査です。AIでやる部分もあるのですが、人が見なければいけない部分もあるので、その役目を担っていただいています。

障がいの種類は本当に非常に多様ですね。特例子会社の中でここまで多様な会社はなかなか無いかなと思います。精神疾患や身体障がいなど、さまざまな方たちが働いてくださっている会社です。さらに、いわゆるマネジャー職や部長職などの役員職の半分を、障がいをお持ちの方が実際にやられています。

人に対する考え方

自己ベストの発揮に期待する

「職能等級制」と「ミッショングレード制」

「職能等級制」は、提供するサービスに関連する知識やスキルを習得することにより能力UPを目指し、それに応じて給与や等級が上がっていく仕組み

「ミッショングレード制」は、目標(ミッション)の価値の大きさによりグレードが上下する仕組み

ちょっと面白いところで言うと、給与制度がいくつかあります。簡単にいうと、自分の障がいに合わせて給与制度が選べます。「変化することがすごくイヤだ」という精神疾患をお持ちの方は、職能等級制を選ぶ方が多いですし、変化が大好きな方はミッショングレード制を選ぶことが多いです。働く方がそれぞれ、自分でお給料の制度を選ぶシステムを取り入れています。

最近是完全在宅勤務がどんどん広がっています。そんな中、障がいを持つ方たちの雇用支援をしていて面白いことに気がつきました。実は、東京の企業は障がいをお持ちの方の採用難で「採りたくても採れない」ということが実際に起きています。なので、地方で働く場が足りないとおっしゃっている障がいを持つ方を、テレワークで採用できないか、というアプローチを2016年から

スタートしました。はじめは北海道でスタートして、今は77名の方が活躍してくださっています。精神の方が6割ぐらい、身体の方が4割ぐらいという形です。やはりテレワークということもあり、本当にさまざまな障がいの方が働いてくださっています。基本的には、朝テレビ会議を行なったら、その後はずっとお仕事をし、最後はテレビ会議で終わる感じです。

勤務の一日の流れ

- 9:30 ● テレビ電話会議システムにて全体朝会
※チャットにてPC立ち上げの報告
- 10:00 ● 審査業務
※不明点は全体グループチャットにて質問
- 12:00 ● お昼休み
- 13:00 ● 審査業務
※午後の業務開始時はチャットにて報告
- 16:00 ● 日報作成-共有ドライブにアップ
- 16:20 ● テレビ電話会議システムにて全体夕会
- 16:30 ● 業務終了

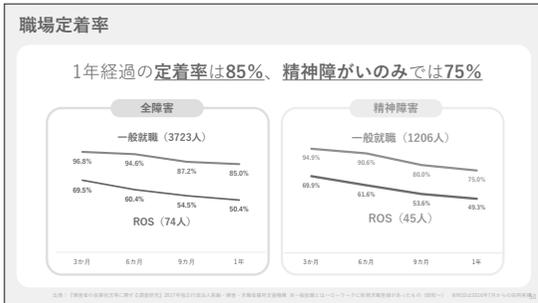
やっていることは、サイトの情報審査やいわゆる進捗管理、ビジネスのディレクションなど。コミュニケーションの仕方は、オンラインですね。朝と夕、みんなで会って「今日はどうだったの?」と振り返ったり、困ったことを相談したりすることを完全オンラインでやっています。

メンバーの声

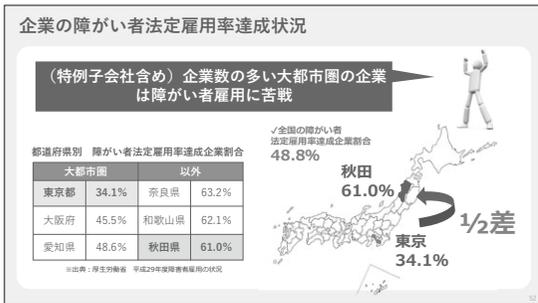
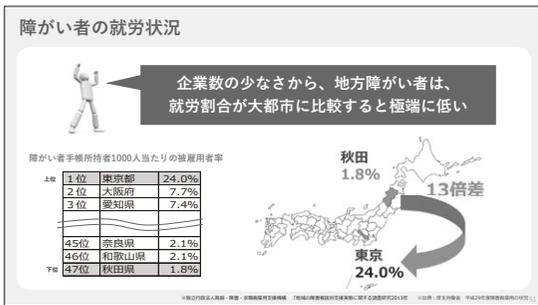
入社6か月面談時の在宅メンバーの声 (抜粋)

精神	日常的にメンバー同士のコミュニケーションがあり、みんなで一緒にやっている感じですが、誰か早くても朝会がスイッチが入る。在宅という働き方であれば、これは働けてなかったと思う
精神	前向きに発言することがやりやすかったが、緊張しやすい雰囲気は好印象を受けた。目標が持てない性格だが、周りのメンバーから励まされてもえこももなるようになった。イベントも多く、思った以上に楽しんで仕事をしている。
精神	収入が得られるようになったことがうれしい。もともと働けなかったため、それが良いになった。成長している実感がかかっている。
精神	入社してからグループのいろいろなサービスがあり、SUUMOその他のアプリを入れたりしている。グループの一員という気持ちがある。仕事に対しては、先輩社員やグループとして大気取って仕事をしているように思っている、やりがいがある。
身体	通勤がないという安心感は入社して改めてよかった。雪の中の通勤は本当に大変で、「在宅」で仕事ができる事はとても魅力的。
身体	普段はいい生活を送るようになって。自分自身でもスーツ、ワイシャツといった格好をすることで仕事として、向き合えるように意識しています。
身体	既、仕事に入らなかつたが、仲間の顔を見ることと仕事をする気持ちになれる。一時的に仕事はもたなかったと思うし、チームで仕事を作り上げていっているという実感を覚えている。

これは私自身も直接聞いてすごく嬉しかったのですが、やはり「働けないと思っていたのに働けるようになった」ということや、「通勤がない」ということが雪の中での移動が大変な北海道で生きたということ。働けるようになって嬉しいという声をたくさんいただけることが、私にとっても喜びでした。



もちろんまだまだ改善しなければなりません。障がいのある方たちにとって最も大事な定着支援に関しても、全体で見ると定着率85%。精神障がい者の方は75%となっています。雇用するだけではなくて、その会社の中で活躍していただくということの支援を今、一生懸命やっています。



障がい者の就労は、実は東京だけに偏っているんですね。地方は企業が少なくもあり、働く場がないというのが実態です。いわゆる法律で「障がい者の方を雇用してください」と言われているところかというと、東京は実は苦戦をしながら、地方の方がうまくいっています。当たり前ですよ。なので、東京にある企業が地方の方を採

用したいという率は、今はとても高いんですね。

これはリクルートで2016年から実験的にはじめたことで、今は100名弱の方が働いてくださっています。選考してみると、優秀な方がたくさんいらっしゃるんですね。これは本当に面接に行ってみてわかったことなんです。働く場がないだけで、優秀な方が全国にたくさんいるなど感じています。だからもっとリクルート内でも、この働き方を広めるということ。そして同時に、東京のさまざまな企業さんに、「こんな人事制度を作ったらどうですか」という提案を今、進めようとしています。

リクルートの働き方は、ざっとこんな形です。わかりやすく言うと、いろんな働き方を選べますということです。冒頭にお話ししたような、個の尊重、本人が何をやりたいのかということがすごく大事で、それに合わせて仕事のアサインされていく感じが、会社全体の雰囲気です。

3. 日本の労働市場について

さて、ここからのお話はみなさんの興味も高いと思われる、日本の労働市場のお話をさせていただきます。現在働いていらっしゃる方も、これから社会に出る方も、直面する問題だと思っています。私は2年前までオランダの中核会社で働いていたので、あえて世界と日本の対比で日本の「働く」を考えてみたいと思います。

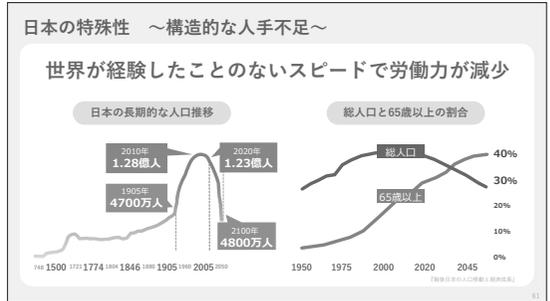
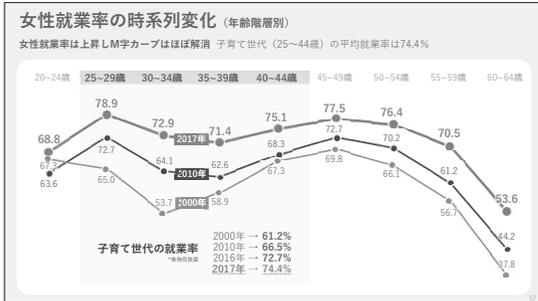


日本は先進国の中で、もっとも企業が「働く」インフラを担っている国です。「企業に勤める」ということがとても多いのが日本の社会。アメリカやヨーロッパだと、企業で働くことは実は6割ぐ

New normal 時代の仕事を考える ～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～

らいなんです。8割を超えて企業で働くのは日本独特の文化ですね。

は変わっていくと思いますが、現状、日本はこうなっています。



これはご存知の方もいらっしゃると思いますが、M字カーブと呼ばれています。女性が子育て期にいったん仕事を離れる、というのも日本の特徴だと思います。ただ、2019年度は80%ぐらいまで来たので、少しずつ子育て中に仕事を離れなければいけないという問題は、解決し始めてきているのかなと思っています。

これからの労働市場ですが、ちょっと引いてみると、日本は世界が経験したことのないスピードで労働力が減少しています。原因は人口推移や65歳以上の人口の増え方などいくつかありますが、それによって圧倒的な人手不足の国になっています。これは仕事を創出して、その仕事をやって、消費を増やして、経済が活性化するサイクルを作らないと、日本はやはり衰退のシナリオを辿ることになってしまいます。そうならないように現在、企業だけでなく政府も含めて、雇用機会を作るということ、働く人が生き生きと働けるようにすることを、今とても大事に考えています。

日本の特殊性
日本は仕事に求めるものが・・・

仕事をする上で大切だと思うもの

	高い賃金を得たい	自分の希望する仕事内容	豊かな環境の人間関係	安定した将来性	明確なキャリアパス	自分の希望する勤務時間	健康保険の充実	定年退職金	会社のステータス
日本	39.0%	51.3%	36.3%	58.0%	49.0%	10.5%	20.7%	7.0%	25.3%
韓国	75.1%	41.3%	46.1%	30.6%	50.2%	11.6%	18.0%	6.8%	13.3%
中国	79.0%	31.9%	31.3%	29.9%	30.3%	50.4%	18.3%	10.6%	5.6%
フランス	78.2%	34.2%	37.4%	25.2%	25.7%	28.1%	18.8%	21.7%	16.1%
インドネシア	83.1%	33.4%	23.3%	36.5%	21.1%	38.8%	14.0%	19.0%	12.8%
インド	58.8%	29.6%	37.9%	29.3%	23.6%	31.5%	20.3%	19.7%	22.4%
アメリカ	58.9%	52.8%	48.4%	25.8%	24.8%	19.8%	33.1%	16.3%	12.3%
オーストラリア	52.5%	48.3%	42.8%	32.5%	33.1%	24.5%	27.6%	18.0%	13.6%
ドイツ	58.5%	38.7%	45.2%	58.6%	37.4%	6.9%	20.0%	19.3%	11.6%

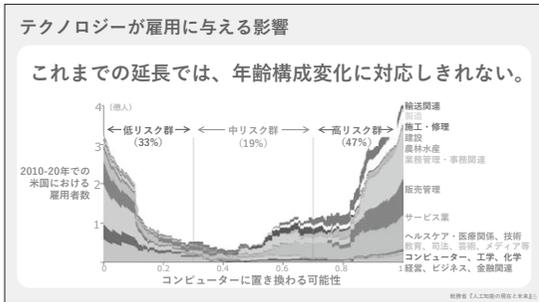
もうひとつの大きなポイントとしては、産業構造の変化もあります。いわゆるメーカーや建築、金融という産業よりも、サービス業がググッと伸び始めている。これは時代とともに、産業構造が大きく変化しているということです。

次に、日本は仕事に求めるものが他の国とちょっと違います、というお話をします。「仕事をする上で大切だと思うことを教えてください」という調査を行いました。日本以外の国は、どの国も「賃金」と「福利厚生」なんです。ですが、日本だけ「良好な職場の人間関係」が一番上がってくる。次に日本では「自分の希望する仕事の内容」に興味がある。これは、ひとつの会社でずっと働き続けるのが普通で、定年退職の文化が長かったという日本の特徴を表しています。また、この結果、転職した時に給料が下がるのも、日本だけです。これは本当に独特です。将来的に



2025年を見てみると、今までの働き方や人事制度、雇用や個人の価値観の延長線で、一生同じ会

社で働くということでは、もうこの産業構造変化には対応できません。これが数値で見えているのが、日本の現状です。



テクノロジーが雇用に与える影響ということで、無くなる仕事と生まれる仕事という話もあります。コンピューターに置き換わる可能性がある仕事が、データ上でも明らかになってきました。これは聞いたことがあると思いますが、日本の労働人口の49%が人工知能のロボットで置き換わると言われています。

これには私は全然、悲観的ではなくて、昔からそうだったよねと思っています。スライドの左上にある「Human Alarm Clock」とは、目覚まし時計のない時代に、朝7時にコンコンと音を立ててみんなを起こす仕事です。紙芝居屋さんはずごく減りましたよね。人間レーダーという、レーダーの人間版という仕事もかつてはありました。でもこういう仕事は、かつてあったけど今はありません。今も昔もそうですよね。

たしかに、ビッグデータ、AIによって仕事がどんどん無くなる可能性はあります。よく挙げられるパラリーガルもそうですが、スーパーのレジ打ちなどは実際にセルフレジが生まれたり、コールセンターが自動応答になったり、銀行融資もデータでやればいいとなると、これらの仕事がなくなってしまうかもしれません。でもそうすると、必ず新しい仕事が生まれると思うんですよね。

YouTuberなんて、昔は考えられない仕事でしたが、劇的に増えていますよね。2019年の小学生のなりたい職業人気ランキング6位なんです。ちなみに90年代の6位は何だろうと思った

ら、パイロットでした。こうやって、職業はどんどん変化しています。新しい職業として生まれたYouTuberやネイリストさんが、この先居なくなっても、3Dプリンタのネイリストさんが出てくるとか。本当に自動車が自動運転になったら、交通監視員やロボットトレーナーという仕事も生まれますよね。

仕事が無くなれば、その分新しい仕事生まれる。これは別に今に始まったことではなく、過去からずっとそうと、これからもそうだとということで、全然ネガティブには捉えていないです。

2020年は歴史的にも、本当に生活ががらっと変わったと思います。私たちがコロナによって、大きく生活スタイルや仕事の仕方に変化がありました。10年後に2020年を思い浮かべると、このときにパラダイム・シフトが起きたんだと認識される年に、今年はなるなと思っています。日本はオリンピック・イヤーだといわれてスタートした2020年。オリンピックも来年はどうなんでしょうね。それにしても2020年は、世界中が同時に同じテーマに向き合った年でした。テレワークへ一気にシフトしたこともありますし、その最中に黒人差別問題がアメリカを中心に起き、香港では国体法の法律改正がありました。

「I need a job」という言葉を掲げている男性の写真があります。少し説明します。ヨーロッパでは一気に失業率が上がったのですが、最近になって失業率は下がりました。これは景気が回復したからではありません。失業率というのは、「仕事を探す人の内の仕事が見つけれない人」という計算で出てくるものです。つまり、仕事を探す人が減った、なので失業率が減ってきたという、非常に厳しい環境です。

かたや日経平均が上がって、今日も29年ぶり2万5000円台を突破しました。すごく大きな渦の中で、あちこちでいろいろなことが起こって、プラスもマイナスもあったのが2020年だと思っています。私は今日、ここに入る直前にニュースを見ました。日経平均が2万5000円を超えたというニュースです。そして昨日、10月の段階の日本の自殺者が対前年で39%アップしたと言います。こ

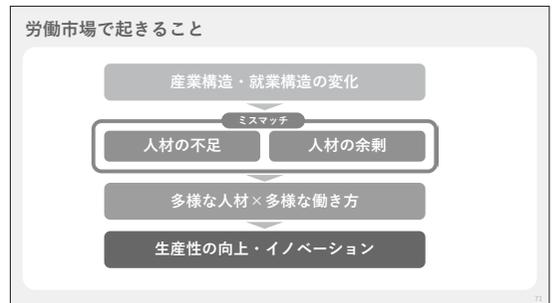
のちぐはぐさというのはなんなのだろうと。2020年は、すごく大きな変化の年だと思っています。これがまさにさっき言った産業構造の変化や、「働く」の変化をグワッと押し進めるのだと思っています。これはすごく大変なことでもあるけど、機会でもあります。

すでにアメリカではAmazonとウォルマートの戦いが起きています。みなさん、ウォルマートってわかりますか。簡単に言うと、イトーヨーカドーやジャスコのような、いわゆる流通です。Amazonはわかりますよね。通販でお買い物できるところです。この戦いは今、アメリカですごく顕著になっています。

実はテクノロジーの世界でも、ウォルマートは本当に注目されている企業です。なぜかという、今年、アメリカでウォルマートのアプリのダウンロード数が、Amazonを抜いたんです。ネット通販の会社をリアル流通のアプリが抜いたのは、すごいことですよ。これは実は、コロナの影響がすごく大きいんですね。「買い物は通販でいいよね」と普段は思いますが、生鮮食品はやはりその日に買いに行きたいですよ。でもAmazonだと生鮮食品は3～4日後にしか届かない、という流通パニックがアメリカでも起きていました。そのなかでウォルマートは、アプリでオーダーして、車でピックアップするという、人と全く接触しないで生鮮食品を買い物できるサービスをはじめたんです。確かにそのニーズはよくわかりますよね。全く接触しないでポンと野菜などを積んでくれるということで、ウォルマートがAmazonを抜いた。これは世界でもセンセーショナルな事件でした。

ウォルマートはこのことを皮切りに、6月にはウォルマート・ヘルスという定額の診療所をアメリカ本土のいろいろな場所に作ったり、Amazonの宅配コストの119ドルの会費より安い98ドルでウォルマート・プラスを生むなどして、ビジネスがどんどん成長しています。これは何を言っているかという、もしかしたらこれまで3～4年かかっていたビジネス構造の変化が、この1年は数ヶ月でおきている。これが世界各国のみならず、

日本でも目に見える形で起きているんです。それは、つまり、働く場所や働き方、働く職種が、あっという間に会社内で変わっていくということです。ウォルマートで働くということは、いわゆるスーパーで働くことだったのが、今は完全にITの会社で働くという選択肢になっています。そういう変化が、この2020年は緩やかではなくて、目の前で急速に起こったと感じています。



これからは日本だけではなく、産業構造や就業構造の変化の中で、人材が足りないということと、人材が余るといふ2つのことが同時に起きてきます。みなさんが出ていく社会は、「人が足りない」といっている産業と「人が余っている」といふ産業が出てくるのだと想像するといいでしょう。なので、今までの「仕事を選ぶ」、「働く」、「会社が雇う」という関係は成り立たない。ある意味、2つの会社をまたぐとか、働き方を多様にするなど、そういう対応をしないと社会が成り立たない、ということが起きています。なので、さまざまな人材と、さまざまな働き方を社会で準備しなければなりませんし、みんながそれに慣れていかなければいけないと思っています。

メンバーシップ型 VS ジョブ型 と ロール型			
	ジョブ型雇用	メンバーシップ型雇用	ロール型雇用
雇用制度の根拠	職務	職務	人材
職務・役割の明確さ	明確	曖昧	明確
資金制度	職務重視	職務重視	役割重視
資金分配	重点分配が可能	硬直的	重点分配が可能
評価基準	職務内容・職務成果	職務水準・能力発揮	期待役割・役割成果
専門性	スペシャリスト・マネジメント人材	ジェネラリスト	スペシャリスト・マネジメント人材
人材の流動性	高	低	中

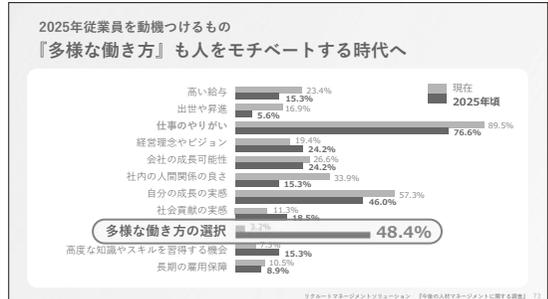
もしかしたら就職活動をしている学生さんは、この話を聞いたことがあるかもしれません。最近、働き方や雇用、就職では、メンバーシップ型企業に入るのか、ジョブ型企業に入るのか、ということが話題になっています。いわゆる日本は、昔からメンバーシップ型雇用が多いと言われてきました。分類するとはっきりわかり過ぎてイヤなのですが、アメリカは大体、ジョブ型雇用だと言われていています。メンバーシップ型というのは、人を採用してから仕事を割り当てる、人材を起点とした雇用制度です。ジョブ型というのは、先に仕事が決まっていて、その仕事ができる人を雇うというシステムです。起点が違うのが、一番大きなポイントです。

この起点が違うことによって、役割が明確だったり、曖昧だったり、賃金分配、お給料にすごく幅があったり、専門性の高い人材を求めたり、ジェネラリストを求めたりという差が生まれます。そしてその結果が、人が転職する数につながっています。日本はどちらかというと、メンバーシップ型の会社が非常に多かったので、定年退職まで働く方が多くおり、それによって産業を支えることができ、家族のような形で戦うことで会社が成長してきました。

ただし、産業構造がこんなにめまぐるしく変化すると、それに必要なスキルが5年タームぐらいで、どんどん変わってしまいます。そのためか最近はずっと同じ会社で働くことだけが選択肢ではないということになり、ジョブ型雇用の考え方が日本にも入りはじめました。それを明確に企業が宣言したのは今年に入ってからです。今年になっていろいろな企業さんが、これを宣言し始めているという状況です。

私たちの会社は、実はこの2つのどちらにも当てはまりません。これを私たちは「ロール型」と呼んでいます。係活動のようなことですね。起点は人材です。役割は明確で、「この係をお願いします」という感じで、仕事を起点に雇用をするわけではなく、人を雇用してから係をお願いするという形です。それでも、スペシャリストになっていく必要はあります。人材の流動性もメンバーシッ

プ型よりは高く、ジョブ型より低い。それがリクルートの形です。



これについてはどれがいい、悪いではないですね。個人個人でどういう働き方がしたいのか、どのようにキャリアを積みたいのか、自分の価値観に合った雇用型を選んだ方がいいなと思います。また、その会社のフェーズがすごく成長しているときなのか、少し成長が鈍化しているのか、それによっても形は変わっていきます。私はどれでもいいと思うんですね。ただ、こういうことをちゃんと知ったうえで、企業を選んだほうがいい。いずれの場合も、この会社がこういう人材の雇用の仕方をしているのはこういう背景があるからだ、ということを知って選ぶといいかなと思っています。

4. 最後に

最後です。680対983というこの数字、何だかわかりますか。これは、まだコロナがそんなに広がっていない4月に、1600人の20代、30代、40代の方たちに、「あなたが生き生きと働いている様子を言葉で表現してください」という質問と、「周囲の人が生き生きと働いている様子を言葉で表現してください」という2つの質問をしました。そのときのワードが、自分の話だと680ワード、人の話だと983ワード出てきたという結果です。何を言っているかということ、「やりがいのある」「楽しい」「笑顔」「切磋琢磨」というのはいいワードなんです。結局、自分のことより他人のことのほうが、たくさんの表現ができるということなんです。自分自身の状態を言葉にしたり、自覚化した

りするのは苦手なんだと、改めて思いました。

**自分がどう生きていきたいか？
を考えるのはとても大切なこと**

これは実はすぐみなさんにもお伝えしたいことで、社内の人にも今、この話をよくしています。やはり自分がどう生きていきたいのか、どう働いていきたいのかを考えるのは、とても大切なことです。今、すでに働いている方も、大学に入ったばかりでまだ全然「働く」なんて考えていないという学生さんも、就職活動真っ盛りの学生さんにとっても、やはり自分のことを客観的に見るのはとても重要だと思います。これを「メタ認知」と言います。自分のことを客観的に見て、そもそも自分は何がしたいのか、とか、何がしたいかはわからなくても、どんなときに元気でいられるのか、とか。そういうことを考えることは、すごく大切だなと思っています。さきほどの、自分のことを自覚化することにつながります。

当たり前なのですが、結局、自分の人生は誰も決めてはくれません。自分でしか決められないし、自分でしか責任が持てないんです。確かに自分のことを深く考えると、嫌な部分もすごく見えるのですが、それを考えることはすごく大切だなと思っています。これは、私自身、今でも大切だと思っていますが、特に学生のみなさんには、こういうことを普段からやることをお勧めします。自覚化することで、いろいろな選択をするときに、決める・決めないといった自分の判断が魅力的にできるのではないかなと思っています。

タイトルに私は「なぜ働くのか」と書きました。そして、すべての人に役割のある社会を創りたいから働いている、という話をしました。でも、仕事に対する思いは人それぞれだと思っています。社会人は、実は学生より自由なんですね。さすが

『なぜ働くのか？』は人それぞれ

に私が明日、辞めるというのは迷惑だから辞めないけれど、変な話、ここから10年働こうが3日で辞めようが、それは本当に個人の自由です。学生も自由ではありますが、学生のときは小学校は6年間、中学校は3年間と、なんとなく期間が決まっています。社会人はずっと働いてもいいし、今、辞めてもいい。そのなかで自分が生きていく、働くということを考えて進めていくわけです。これは、誰かにとってではなく、何よりも自分にとって「なぜ働くのか」ということがすごく重要だということです。

『ふつう』にしばられない

私自身も気をつけていることですが、そのときに「ふつう」に縛られない、ということの特に大事にしています。これは本当に大学に感謝なんです。明治学院大学の社会学部社会福祉学科というところは、学校内外のさまざまな人たちに出会うことによって、学びが深まる場所だったなと思っています。私が持っているダイバーシティ・インクルージョンの世界や多様性に関しての考え方のベースは、大学時代にできたと言えます。「人はそれぞれみんな違う」ということは、大学時代に学びました。

アメリカの副大統領に決まったカマラ・ハリスさんは、インドからの移民の二世です。彼女もス

ピーチで、黒人、アジア系、白人、ラテン系、ネイティブアメリカンといった話に触れていましたが、たしかにアメリカでは全然違うんですね。アメリカに行ったら当たり前なのですが、人種も肌の色も言葉も本当に違うんです。でも、日本という国にいて、なんとなく似た人たちが多い気がするから、「ふつう」という社会に飲まれてしまうことが多いなと思っています。私はこの「ふつう」に縛られないことをとても大事にしています。「ふつう、何歳で結婚だよね」、「何歳で就職だよね」ということに囚われる必要はありません。自分にとって何がいいかが、すごく大事ななと思っています。

自ら「機会」を創り出し
「機会」によって自らを変えよ



このペンギンの写真は見たことがありますか？これは2012年、葛西で騒がれた脱走ペンギンの姿です。右と左、実は同じペンギンなんです。80数日間以上、逃げて海で泳いで、捕獲されたら右になっていた。襲われないように、エサを獲るためにがんばって泳いでいたら、左の子が右になっちゃった。すごいですよね。脱走前と脱走后で、まったく姿が違います。水族館の中にあるペンギンからしたら、左が「ふつう」なんです。でも海にいるペンギンからしたら、右が「ふつう」なんです。その人がいる場や、見方によって「ふつう」は全然違うんですね。これはペンギンの話ですが、人間にも当てはまると思っています。つまり、「ふつう」ってなんだろうなど。いつも私は、それを考えるようにしています。今の立場だと、「経営者の振る舞いとは、ふつうはこうだよね」などいろいろあるんですが、本当に極力気にしないようにしています。

得意不得意は背中合わせ

得意、不得意は背中合わせです。最近、就職活動をする学生さんとお話すると、本当に自分が何が苦手か、ということへの探究心が高いんですね。でも、得意と不得意って、同じなんじゃないかと思うんです。好奇心旺盛な人は飽きやすいし、共感力のある子は騙されやすい。このように、得意、不得意は背中合わせです。これは学生さんに向けてになりますが、どちらかという得意に目を向けてほしいと思っています。自分が得意だな、好きだなと思っていることはなんだろうと純粹に見ると、自分はどう生きていきたいのか、今の仕事は楽しいのか、この先どうするのかということが、自ずと広く見えてくるかなと思っています。

私は今、46歳なんです。もう不得意なことは諦めています。その代わりに得意なことをとにかく他人より300%強くすればいいんだとずっと信じています。不得意なことはみんなに助けられればいい。そして、得意なことでみんなを助けられればいい。こういうことをお互いが素直に思えると、どの仕事をやっても、いいチームになるなと思っています。最近、学生さんと話すと、不得意なことや苦手なことのほうを真面目に考えている学生さんが多いです。だからそんな人には「得意なことが絶対にあるよ」というアドバイスをします。だから、みなさんもぜひ、得意なことに目を向けてほしいなと思います。

私たちの会社には江副（えぞえ）さんという創業者がいるんですが、創業以来、「自ら『機会』を創り出し、『機会』によって自らを変えよ」というのを社是としています。私はこの言葉がすごく大好きで、大切にしています。20代の頃は「自分で機会を創るんだ。その機会によって自分が変わる

んだ」という意味だと思っていたんです。でも、年齢と経験が積み重なる中で、この言葉の解釈が変わっていきました。「全てが機会なんだ」と思うようになったんです。人生は本当にしんどいことも、嬉しいことも、悲しいこともあります。その全部が、機会なんだなと。いい人との出会いも、嫌な人との出会いも(笑)、楽しい仕事も楽しくない仕事も、全部、機会です。それによって、自分が変化していくという感じ。それがすごくいいなと思っているんですね。コロナは決していいことではないと思っています。けれども、コロナというものの中で、みなさんが気づいたことや出会った人、起こった出来事の中で変化してくれたらいいなと。いいことも悪いことも全部、機会だと受け止められるようになったらいいなと思って、この言葉をご紹介します。



今日は学生さんが多いと聞いています。働いている方や先生も、ご出席いただいているかもしれません。私はみなさんに、「無限大」という言葉を贈りたいと思っています。私の就職活動は98年の超氷河期の中で、社会に出るということがすごく大変だった時代でした。この頃は、みんな大変だったと思います。その時に、ボランティアで仙台に一緒に行った方が「何を言っているの?」と。小説家になろうとされていたその方に、「僕は小説家になろうと思っているんだよ。五体満足の柏村さんが就職活動ごときに悩むなんて信じられない。君は無限大なんだよ。僕だって無限大なんだから」と言われたんです。これには私、すごくハッとしました。だから今でも無限大なのだと、私はいつも思おうとしています。

経験を積む中で、失敗したことやうまくいかなかったこともどんどん蓄積されていき、「このチャレンジは失敗しそうだな」と思う力もどんどんついてしまいます。けれども、そういうことは気にせず、無限大なのだから変化していこうと思っています。みなさんは、もっと無限大です。ですから、自分ができること、できないことだけではなく、まず自分が何をしたいのか、どんな場にいたいのかを想像して、自覚化していく中で、ぜひ一歩を踏み出していただけるといいなと思っています。恋愛と一緒に思うんです。大失恋するまで、恋愛のしんどさって、あまりわからないんですよ。私は高校生のときまで、あまり大きな失恋をしたことがありませんでした。それまではストーカーのように追いかける力はあったんですが、高校で大失恋をしてから、すごく臆病になったんです。つまり、人間は経験によって、できないことや、やったら傷つくことに気がついてしまう。それは危ないことに近づかないという意味では、正しいんですよ。けれども大人になっていくにつれて、そこが冷静にわかっていくからこそ、無限大だと思えることが大事です。学生のみなさんは死ぬほど無限大です! 「今、将来がよくわからない」とか、「今、何がしたいかわからない」「こういうことがやりたいのにうまくいっていない」「就職活動がうまくいかない」など、悩みはいろいろあるかもしれません。でも、みなさんは無限大だということを、最後の言葉にしたいと思っています。

ぱっと駆け足でお話してしまいましたが、ここから質疑応答をさせていただけたらと思います。本当に母校の講演ということで、いつにもない緊張感でお話をさせていただきました。どんなことでもいいので、ぜひ質問を投げさせていただけたらと思います。講演内容と全然関係なくてもかまいません。学校、学生時代の話でも、なんでもかまいません。いったんこれで終わります。ありがとうございました。

質疑応答

大川：柏村さん、ありがとうございます。それでは質疑応答に移ります。質疑応答に関する説明を石岡さん、お願いいたします。

石岡：はい。ただいまより質疑応答に移りたいと思います。質疑応答はZoomの挙手機能を用いて実施いたします。それでは質疑応答を開始します。質問のある方は挙手ボタンをお願いします。

Q1 ●1：失礼します。明治学院大学体育会水泳部の3年の●と申します。

就活をするうえで、体育会であったことが有利に働いたことはありましたか？

柏村：会社によると思います。私は水泳部のときに何を経験したのかを話したことが役に立ちました。私が体育会だということよりは、大学のときに自分が打ち込んだこととして、水泳部で学んだことや気づいたことを話すことが役に立ったな、というのが私個人の印象です。

就職活動中ですか？ がんばってください。

Q2 ●2：私は明治学院大学社会学部社会学科4年の●と申します。

就職活動を終えて、今、卒業論文を書いている最中で、もう学生のラストスパートという感じです。コロナもあって、外に出られなくて、家にいるのにすごく飽きてしまいました。せっかくの大学生活なのに、なんだかぐだっとした感じで終わってしまいそうです。学生のラストスパートに向けて、学生最後にしておくべきことや、卒業するまでにこれはやっておくべき、というものがもしあったら、教えていただければ幸いです。

柏村：これは人によってかなり言うことが違うと思うんですが、私はもう徹底して学生だからできることをやったほうが良いなと思っています。ちょっと今はコロナだから海外には行けないのですが、社会人になると1ヶ月続けて旅行などは、なかなかしにくい環境もあるので。私はもう本当にとことんその時間を学生として、活用することをおすすめします。なので、入る予定の会社であ

ルバイトをするなどはあまりおすすめしていません。旅行をするなど、本当に自分が今したいことをやった方がよいと思います。社会人になるために備えることは、絶対にしなくてよいと思います。

Q3 ●3：柏村さん、お久しぶりです。聞いていて本当によくできた講演で、この20年間の労働市場の変化を総括して、本当にわかりやすく勉強になりました。柏村さんもおっしゃっていましたが、間違いなく2020年はパラダイム・シフトになってきます。

柏村：そうですね。なので、私の会社も新入社員として、大学を卒業したばかりの方たちが入ってきます。ある意味、変化が急激なので大変なだけけど、いい機会にしてほしいと思っています。

これから就職活動をする学生さんも、みんなが一斉に新しい社会に突入している感じなので、これから働く人たちにもすごくいい機会です。大変さももちろんあると思いますが、学生のみならずにも、そこをある意味、エンジョイしてほしいと思っています。

Q4 ●4：明治学院大学経済学部●と申します。よろしく申し上げます。

私は今、3年生で就職活動をしているところです。私もなぜ働くのかということ、今、考えています。御社のような社会課題意識も強く、自分からいい社会を創りたい、という気持ちが私もすごくあるんです。現在、就職活動でオンライン・インターンシップをやるところが増えていきます。私もそれに参加しているんですが、自分の中で、仕事をする上でどんな人と関わっていくか、というところを大切にしています。人事の方だけだと判断しにくい会社の内容や、関わり方を見つけるのが今、すごく難しいと考えております。

自分がちゃんと課題意識を持って働ける会社なのか。その判断材料がわかるようなアドバイスがもしありましたら、お願いします。

柏村：なるほど。本当に大変ですね。オンラインのインターンシップだと、どうしても一問一答み

たいになってしまうし。偉いなと思ったのは、自分は何が大事か整理できているところと、働く人たちがどんな人たちなのか、自分にとって大事だとおっしゃっていたところです。それは私も大事にしたほうがいいと思うんですね。そうしたときに、その会社でどんな人たちが働いているか、接点を持つことはすごく重要です。そのひとつの判断材料としては、まず、まっとうに人事の方に「働いている方のお話を聞きたい」と、紹介を頼むといいと思います。これはなかなか断る企業はないと思いますよ。2つ目はOBの伝手。3つ目は、その会社がやっているイベントなどにちゃんとコンタクトをして、働いている方たちがどんな人たちかを見る、というやり方があると思います。でも一番いいのは、はじめに言ったりアルにコンタクトすること。なので、人事の方に普通にお願ひすれば、多分、断る企業はほとんどないと思います。

●4：インターンシップで実際に会うのを控えている会社さんを見ると、実際に行くのは、してはいけないのかなと思っていたんですが。

柏村：会社によって違うと思うんですが、「紹介してください」と言って、つないでもらってもオンラインかもしれません。一対一で面談とか。私も実は学生さんと面談するのは、そういう機会が多いです。「どんな会社か知りたいので、話を聞きたいです」という学生さんと、6～7月はオンラインで面談をしていました。一対一で話すと、かなり会社の雰囲気がわかるので、そういうのを遠慮なくお願いしてみるといいと思いますよ。

●4：ありがとうございます。参考にさせていただきます。

柏村：オンライン環境だから大変ですね。がんばってください。

Q5 ●5：明治学院大学経済学部国際経営学科の●です。質問がひとつあります。

これはゲストの方に毎回質問しているのですが、人生の中で夢や目標はありますか？ 仕事という面ではなく、人生という面での夢や目標を教えてください。

柏村：私はさっきの「すべての人に役割がある社

会を創る」が、自分の夢であり、やりたいことなんですね。なので、会社でもやっているし、会社外でもやっているという感じです。なので、夢というより「すべての人に役割のある社会を創りたい」ということ自体に、私が今なぜ生きて頑張っているのか、なぜ生きてその活動をしているのか、なぜ生きてそのことを学んでいるのか、という全てが収斂されるかもしれません。

●5：それについてひとつよろしいですか。

仕事の目標と人生の目標は一致したほうがよりベターですか？ それとも別々の方がいい側面もありますか？

柏村：いい質問ですね。これは本当に人によると思いますよ。私は人生の目標、自分のやりたいことと仕事とリンクしなかったら、仕事が頑張れないタイプなので。私は100%一致でなくても、リンクしたほうがいいタイプの人間だと思います。だけど、そうじゃない人もきつといる。人によって違うと先ほど申し上げたように、そうではない人もいると思うので、自分にとって何がいいのか見極めるのが、すごく大事なかなと思います。あまり大きな声では言えませんが、私はリンクしなかった瞬間に辞めるタイプです。ですが、それは人それぞれ違っていいと思います。ただ、考え方はいろいろですが、学生時代も勉強する時間、遊ぶ時間、勉強しながら遊ぶ時間もあるし、遊びながら学ぶこともあります。そう考えると、きりがありませんよね。なので、なんのために働くのか、それは人それぞれでいいと思いますが、お金をとにかく稼ぐんだというのなら短い時間で稼ぐことが重要だし、目標があってそのために働くのだったら、集中した方がいいと思うし。人によって本当に違うと思います。私は正直に言うと、シンクロしないとダメな人だったというだけです。参考になっていますか？

●5：はい、ありがとうございます。

柏村：今、悩んでいるんですか？ ご自身がシンクロするべきか、そうでないかに。

●5：そうですね。今、人生設計していく中で、自分にとってやりたかったことを、今のコロナ期間で考えておまして。働くところや働くこと自

体に意味や目標を持つのではなくて、もう少しやりたいことにフォーカスしたほうが楽しいのではないかと感じています。

柏村：いいじゃないですか。

●5：そのような迷いがあったので、質問させていただきました。

柏村：働くということに対して、●さんがどういう捉え方をするかによりますが、その捉え方次第かもしれませんね。やりたいことや活動が働くことにつながる人もいるし、そうじゃない人もいます。でも、いい悩みですね。そういうことを考えると、自分にとって大事なことはなんだろうと、今の時点で決めていけるから、深く考えるのは大賛成です。でも、これは後で変化してもいいから、ぜひがんばって考えていただけるといいと思います。

Q6●6：明治学院大学1年の英文学科の●です。

今、ボランティア活動を計画しています。ですが、ボランティアとお金が絡んでしまうと、途端に「ボランティアってなんだろう？」という悩みが出てきてしまいます。柏村さんにとって、ボランティアの意義とはなんですか？

柏村：なるほど。それは、ボランティアをして時給をもらうことに抵抗があるというお話ですか？

●6：そうです。

柏村：私は大学時代にしていたのは、全くお金が絡んでいなかったボランティアのほうが多かったです。でも、私はどっちでもいいかなと思っていました。そこに困った人がいて、自分ができることがあったらやる、ということの中に対価が発生するときもあれば、対価が発生しないときもある、というだけで、そこにあまり差はないんじゃないかと思っているタイプです。ただ、私たちは今、先ほど会社の説明をさせていただいたように、ある程度の人員や収益のある企業において、自分たちの人材も含めた力を使って、たとえば先ほど申し上げた訪問美容のような仕組みを創る。このようなことを一度、儲からなくてもやってみることは、将来ビジネスになるかもしれないし、

ビジネスにしなくてはいけないわけです。そういう活動自体は、責任というか、係のようなものとしてやった方がいいなと思っています。だから、お金をもらうときがあってもいいし、もらわないときがあってもいい。困っている人がいて、その役に立つのなら、どちらでもいいかなというのが素直な感想です。

石岡：ありがとうございます。質問がないようでしたら、質疑応答の時間を終了させていただきます。たくさんご質問にお答えいただき、ありがとうございました。

柏村：本当に駆け足でしたが、ありがとうございました。

大川：それでは講演終了にあたり、主宰者である学生部会委員長の石川より挨拶がございます。石川さん、よろしくお祈りします。

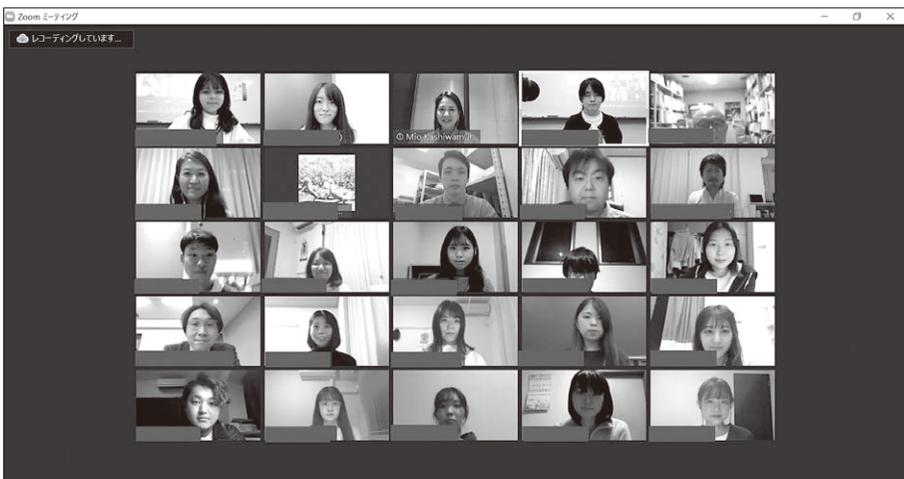
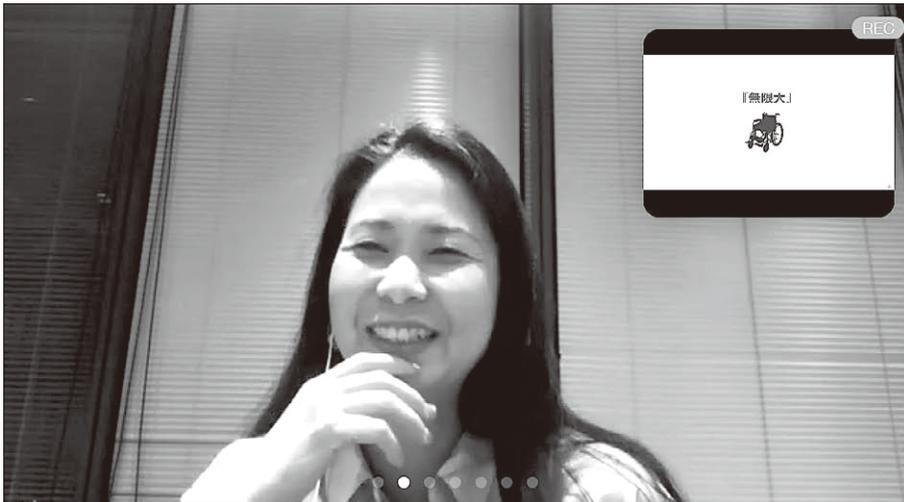
石川：本日は講演会『New Normal時代の仕事を考える～これからの「社会」、これからの「働く」ということ』にご参加いただき、ありがとうございました。お話の中で、得意や不得意は背中合わせであって、得意に目を向けてどう生きていきたいかを考える、ということをお話いただきました。そのような生き方や働き方に対する考え方に、大変、感銘いたしました。就職活動を控える明学生をはじめとする参加者のみなさまにとって、大変、有意義な時間になったのではないのでしょうか。コロナ禍で思うように企画が進められない中、オンラインという新しい形の講演会を実施するのは、困難の連続でした。この中で無理を承知で本学の卒業生である柏村さんにご連絡したところ、思いがけずご快諾いただきまして、講演の開催に漕ぎつけることができました。開催にあたっては、柏村さん、並びにリクルートマーケティングパートナーズのみなさまには多大なご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。本日は誠にありがとうございました。以上をもちまして、簡単ではございますが、閉会の挨拶とさせていただきます。みなさま、本日は誠にありがとうございました。

New normal 時代の仕事を考える ～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～

柏村：ありがとうございました。本当に呼んでいただき、ありがとうございました。みなさん、がんばってください。失礼します。

大川：ありがとうございました。では、ここで柏村さんにご退出いただきたいと思います。あらためまして、本日は誠にありがとうございました。

それでは以上をもちまして、明治学院大学社会学・社会福祉学会・学生部会主宰の講演会『New Normal時代の仕事を考える～これからの「社会」、これからの「働く」ということ』を閉会いたします。参加者のみなさま、本日はお集まりいただき、ありがとうございました。



講演会

開催後アンケート結果

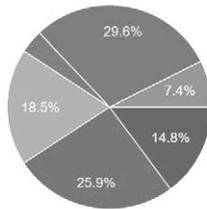
講演会参加人数 46名

(大学生、卒業生、教職員、一般の方含む)

アンケート回答人数 27名

○アンケート回答者内訳

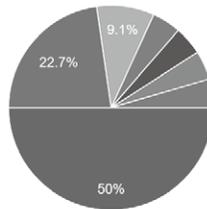
参加された方について
27件の回答



- 学部1年生
- 学部2年生
- 学部3年生
- 学部4年生
- 大学院生
- 教職員
- 卒業生
- 一般の方

学部1年生:4名(14.8%)
学部2年生:7名(25.9%)
学部3年生:5名(18.5%)
学部4年生:1名(3.7%)
大学院生:0名
卒業生:8名(29.6%)
一般の方:2名(7.4%)

学科
22件の回答



- 社会学科
- 社会福祉学科
- 国際経営学科
- 経済学科
- 仏文学科
- 英文学科
- 法学部政治学科

社会福祉学会学科:11名
(50%)
社会福祉学科:5名(22.7%)
国際経営学科:2名(9.1%)
経済学科:1名(4.5%)
仏文学科:1名(4.5%)
英文学科:1名(4.5%)

○講演会に参加しようと思った理由を教えてください。

- ・就職について考えるきっかけになったら良いと思ったから。(社会学科2年生)
- ・withコロナ時代を生きる中でこれからの仕事のあり方に興味があったため。(社会学科2年生)
- ・自分と同じ学科の卒業生で、活躍している方のお話を聴きたいと思ったから。(社会福祉学科1年生)
- ・就職活動に対してあった漠然とした恐怖心を克服するために、自分はどうのように行動していくべきか、それを知るための機会があるのではないかと考え参加させていただきました。(国際

経営学科2年)

- ・家族がスタディサプリーを利用しておりその仕組みに興味があったから。(英文学科1年)
- ・就職活動する上で良いきっかけを作れると感じたため。(経済学科3年生)
- ・New normalに関心がありました。(卒業生)
- ・正直いうと、仕事が休みでタイミングが合ったというのが一番大きな参加要因ですが…柏村さんのお話を一度伺いたかったことと、社会人なりたてということもあり、今後の社会の変化や働き方について学びたかったので、参加しました。(社会福祉学科卒業生)
- ・テーマに興味を持ったため。(一般の方)

○講演会で最も印象に残ったことを教えてください。

- ・すべての人に役割のある社会を創るという言葉が印象的でした。社会的弱者を無視しない、どのような人にも平等に機会は与えられるべきと感じました。(社会学科2年生)
- ・社会のみんなに役割があることが、仕事の目標でもあり自分の理想でもあるという言葉。(社会福祉学科1年生)
- ・得意不得意は背中合わせであるという言葉が印象に残った。私は自分の不得意であることや苦手なことばかりに目が向いてしまうことが多く、自分に自信を持つことが出来なかったため、誰しも必ず得意なことがあるという言葉が印象的だった。(社会学科1年生)
- ・AIによって取って代われる仕事に対して、ポジティブに考えられている点と、「ふつう」とはとられないという話が印象に残りました。今後、少子高齢化が深刻化し人手不足となる中、さらに今年のようにウイルスによる生活環境の変化なども出てくるなかで、正直「仕事があるだけ有り難い」という気持ちで職場に行く日もありました。終身雇用の考えが薄れている時代だからこそ、「自分はどんな生き方をしたいのか」は常に考えたいものです。(社会福祉学科卒業生)

○講演会の内容に対する満足度を教えてください。

- 《評価5》17名
- 《評価4》9名
- 《評価3》1名

○上記のように回答した理由を教えてください。

《評価5》

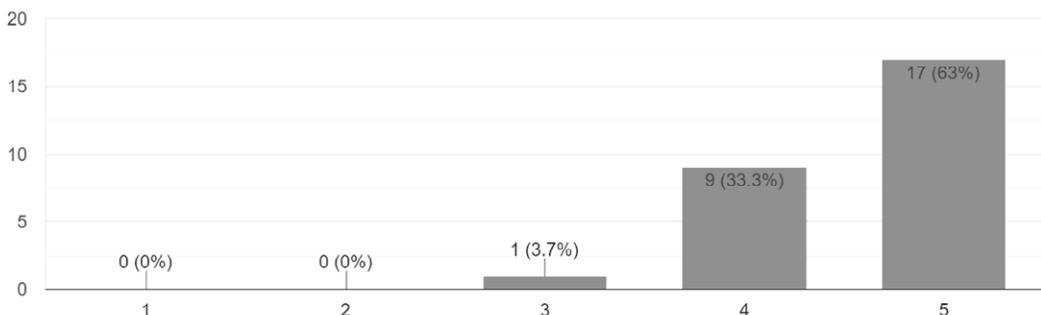
- ・卒業生の方にお話をいただいたことで、親近感を持ちながら、自分に引き付けて考えることができたと思うから。働き方や自分との向き合い方など、大学生が学ぶべきことをたくさん聞くことができたから。(社会学科1年生)
- ・これから就職することをはじめ、生きていくうえで役に立つことをたくさん教えてもらえたから。(社会福祉学科1年生)
- ・短い時間の中で明確にわかりやすくテーマに沿った話をしてくださったからです。さらに今後の社会に対し悪いところだけではなく、前向きな意見を多く教えていただいて、就活に対して少しでも前向きになることができました。(国際経営学科2年生)
- ・コロナ禍の今、特に学生の皆さんには大変勇気付けられる内容だったと思います。(社会学科卒業生)

《評価4》

- ・実体験からの講演で説得力があったから。(卒業生)

講演会の内容に対する満足度を教えてください。

27件の回答



開催後アンケート結果

○講演会に参加して「社会」や「働き方」に対する
考え方や心境に変化はありましたか。

《評価5》9名

《評価4》10名

《評価3》8名

○上記のように回答した理由を教えてください。

《評価5》

- ・講演会前より「自分らしく」を大切にしようと思った。(国際経営学科2年生)
- ・やりたいことのない自分に自信がなかったが、やりたいことがないなら自分はどんなときに元気か、そういうことを考える事が自分のやりたいことにも繋がるという話を聞いて、そういう風に考えていけば自分のやりたいこともみつかるかなと思えた。(社会学科4年生)
- ・働いている身としては共感できるうえで、講演者とスタンスが似ていると感じたから。(卒業生)

《評価4》

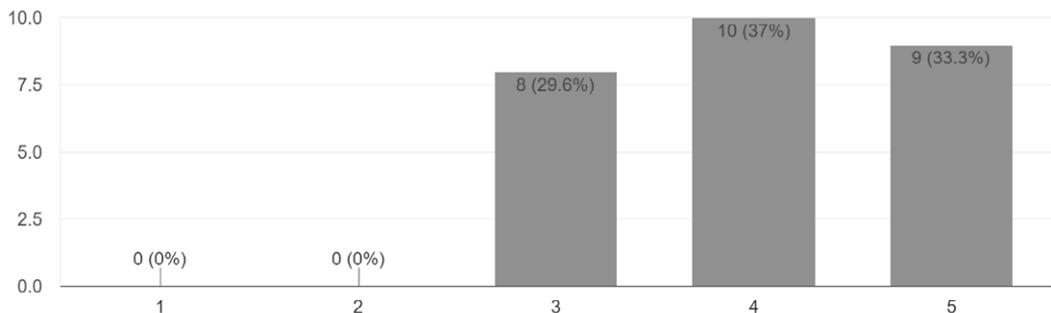
- ・少しでも若いうちにこのようなことを考える機会を持ってほしいと思ったため。(若者が)(一般の方)
- ・誰も予想していなかったコロナという事態に世界中が見舞われている中で、今までどおりの就職活動や働き方が通用しない世の中になりつつあるから。(社会福祉学科1年生)
- ・他人ではなくて自分自身に目を向けて、やりたいことを深く考えていく大切さが改めて分かった。(英文学科1年生)

《評価3》

- ・社会全体が経験したことのない大きな変化が求められる中、多様な働き方や生き方が今まで以上に求められ、逆に型にはまらないいろんな生き方ができる時代になれば、と考えるようになった。(社会学科卒業生)
- ・仕事の代替によりサービス業需要が増えることが見込まれるため、サービス業をもう少し注目してみようと思いました。(経済学科3年生)

講演会に参加して「社会」や「働き方」に対する考え方や心境に変化はありましたか。

27件の回答



開催後アンケート結果

○講演会で期待していたことは得られましたか。

《評価5》13名

《評価4》9名

《評価3》5名

○上記のように回答した理由を教えてください。

《評価5》

- ・リクルートに就職した経緯や、ご自身のモットーとしていることについての話が聞けたから。(社会福祉学科1年生)
- ・コロナウイルスによる新たな時代に新たな働き方が適応され始め、よりスピーディーな世の中になっていくことが学べた。(国際経営学科2年生)
- ・常に社会を客観的に見たいという気持ちは学生時代と変わらず、機会があれば学内の講演会などに参加したいと思っていましたが、名古屋在住のため難しかったのですが、コロナの恩恵？でZoomを通じて学内の講演会に参加することができました。(社会学科卒業生)

《評価4》

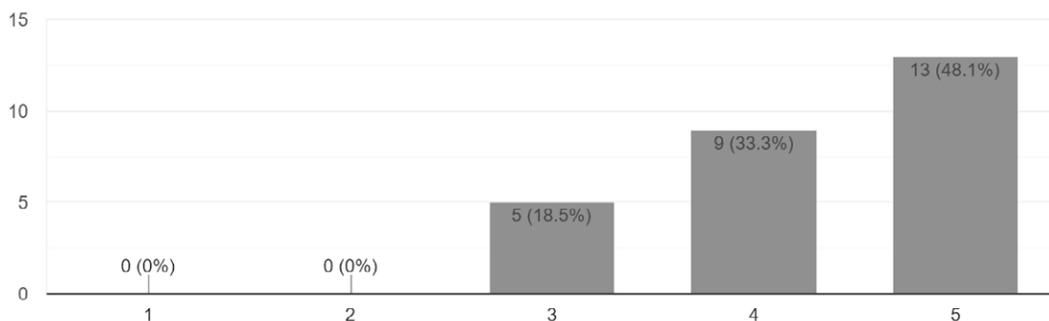
- ・自分との向き合い方を知ることができ、多くの知識を得ることができた。(社会学科1年生)
- ・最先端を行っている会社の取り組み方が理解できた。(卒業生)

《評価3》

- ・得られたというより、今後の自分の生活や活動を考えるきっかけになった。(法学部政治学科2年生)
- ・リクルート会社についてお話しいただいたが、ほかの会社についても広く教えていただいたかったというのはある。だが自分に対してネガティブにならず、良いところを伸ばしていこうとする柏村さんのポジティブさ、明るさが女性としてとてもかっこよかった。(社会学科3年生)

講演会で期待していたことは得られましたか。

27件の回答



特集

コロナ禍における変化

コロナ禍における「監禁状態」を考える……………石原 英樹

コロナを経て「祭り」をとりもどすのか……………金子 充

プレ座談会……………石岡里佳子／石川 真衣／伊藤 小春
木島 夏海／池田 希帆／高橋 美衣／東野 好花

認知症家族介護者が抱える課題と

ポストコロナ時代への展望……………金 圓景

ささやかな「奇跡の年」のために……………澤野 雅樹

第1回座談会……………井村 知貴／栗原 瑞生／生澤 美結
明角 優花／伊藤 小春／高橋 美衣

学校とは何するところであったか

—コロナ禍における教育社会学オンデマンド

講義から—……………元森絵里子

第2回座談会……………石川さやね／鈴木 菜々／鈴木穂乃花
山田 梨穂／石岡里佳子／東野 好花
澤野 雅樹

コロナ禍における医療ソーシャルワーカーの

相談援助の変化……………下田 尚子

働きかた、働く場所の変容を考察する……………沼田 元明

「フィルターX」とは何か

—身体性向としての社会的距離に関する一考察—

……………岩永 真治

コロナ禍における「監禁状態」を考える

石原英樹*

1

大岡昇平『俘虜記』の冒頭に「ある監禁状態を別の監禁状態であらわしてもいいわけだ デフォー」という言葉がある。この小説は第二次世界大戦中フィリピンでアメリカ軍の捕虜になった作者の、収容所での克明な生活の記録である。デフォーとはロビンソン・クルーソーの著者ダニエル・デフォーのこと。

大岡の小説で「ある監禁状態」とは、「別の監禁状態」とは何を指しているのか。

大岡の捕虜記は冒頭の「捉まるまで」だけが戦闘シーンだが、それ以外は延々と捕虜生活が描かれる。これが「別の監禁状態」である。だが捕虜になったという屈辱があるものの、収容所にも物資は豊富で、飢えはなかった。アメリカ軍の物資に圧倒され、従順になったその心の屈辱的な動きが描かれる。後に帰国した大岡はこの小説を書きながら、自分の捕虜生活が、一夜にしてアメリカを受け入れ、占領下で粛々と生活する日本と同じであると感じ、風刺する意図を持ったという。つまり「ある監禁状態」とは当時の日本である。そこでこの序文を引用したといわれている。

実は大岡はこのセリフを、デフォーではなく、アルベール・カミュの『ペスト』(1947)から孫引きした。カミュの小説は、アルジェリアのオラン市を突然襲ったペストの不条理と、その収束時までの人々の助け合いと祈りを描く。

コロナ下で世界的にこのカミュの本が読まれているというのも、むべなるかな。

正確には次のような語句である。「ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、何であれ実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、理にかなったことである」。カミュの場合は、当時のナチス占領状態の風刺であるといわれるそうである。

さて、私もご多分に漏れず初めてカミュの『ペスト』を読み、考えた(2020年4月現在)。このコロナ状況下での自宅での監禁状態についての小説はたくさんでるだろうが、それは何への風刺になるのかな。どんな論文が出るだろう。

日本における感染拡大を抑える「行動変容」の方法への風刺があるかもしれない。人々を制約するやりかたには(1)法律、(2)市場、(3)アーキテクチャ、(4)規範があるとされている(ローレンス・レッシング)。(1)はずばりロックダウンである(ヨルダンなど)。(2)は外出に罰金を科す英仏や休業補償を出す台湾などが該当する。アーキテクチャにナッジを入れると、「ビルで消毒液を使っただけのために動線上にガムテープを貼る」などの誘導がこれにあたる。そして日本の場合は(4)の規範が多いのはいまでもない。法律による強制よりもずっとわれわれの個人の自由を保障しているように見えながら、それが「同調圧力」という形をとった場合のまがまがしさは、まさに「別の監禁状態」といえるかもしれない。

2

しかし私がもう一つ別の「監禁状態」として指摘したいのは、社会学者落合恵美子氏の「ケア

* 社会学部教授(社会学科)

ワーク」の議論である。彼女は2020年4月13日のオンライン記事「新型コロナウイルスとジェンダー」(<https://wan.or.jp/article/show/8880>)で早くも「自宅隔離」において、ケアを行うのが相変わらず女性であることを明らかにしている。「ステイホーム」「家にいるだけで世界は救える」と言われるが、家にいるのはそんなに簡単なことだろうか？ 対象を「自分もしくは同居家族が新型コロナウイルスの影響により、在宅勤務を経験した人」への調査では、食事の回数が増えたことなど、女性の時間を奪っていることが見えてきたという。ここでいう「別の監禁」とは、家族で担う「ケアワーク」

が不可視の檻となっていることである。コロナ禍はこれを可視化して組み替える絶好の機会であるとも落合は述べている。

これらのケースに共通するのは、従来社会学で問題とされてきたこと（日本社会の同調圧力、日本家族のケアワークの不平等）が、今回のコロナ騒ぎで、いままでよりもはっきりと人々の目に映るようになってきたことである。これを「日本の病理」などと決めつけずに、少しでも変えてゆくきっかけにすべきだろう。

コロナを経て「祭り」をとりもどすのか

金子 充*

コロナの2020年、SF映画に出てくる未来都市で、ポツンと無機質な個室に閉じこもって一人で生きているような感覚におそわれる日々を過ごした。授業や会議のすべてがオンライン化して、文字通りバーチャルに支配されるようになったからだ。オンライン化で、誰かと会うことがなくなって、五感をつかって他者の存在を確認できなくなり、もっといえば他者の「身体」を感じるができなくなり、ひとりの人間として不安を覚えずにいられなかった。

授業のオンライン化で、教室を満たしていた学生たちの熱気や笑いがなくなり、飲み会もゼミ合宿もできなくなった。オンラインのゼミに「おしゃべり」はなく、間合いや表情を見ながらのやりとりが困難になった。コンピュータを介して、予定された「授業コンテンツ」が淡々と進行する。オンラインで「画面オフ」にする学生は多い。こちらが名前を呼んで問いかけなければ、参加しているのかさえ確認できない。

こうして、コロナによっていわば「祭り」的なものがことごとく失われたのだと感じている。ここでいう「祭り」の要素としては、熱気、笑い、表情である。あるいは「身体」ということなのかもしれない。とりわけ「社会」や「福祉」について考える私たちは、そのような「祭り」的な要素を多く含む人間の営みや身体に敏感になることで学びや研究を深めてきたわけである。コロナでそのような機会が奪われてしまったことを感じる日々である。

2020年の秋学期になり、教室での対面のゼミが復活した。3年のゼミ生20人は、笑顔で毎週、ほぼ全員が対面授業に出席してきた。男女混合でグループを組ませて、ディスカッションをさせる。毎週教室に来て本当に楽しそうに対話する学生の姿を見ながら、やはり人には「祭り」がいるんだな、などと勝手に思っただけの自分がいた。他者が存在するというただそれだけのことに感動したり感謝したりするという体験を、コロナ禍のいまおそらく多くの人間が求めているのではないかと想像する。まさにそれが祭りの機能だ。祭りは合理性が支配する世界からわれわれをいったん解放してくれるもので、人間に不可欠なものなのだあらためて感じる。

ところで、外出を自粛しない人やマスクをしない人を非難する、いわゆる「自粛警察」というものが流行っている。これに関連して、あるひとり暮らし高齢者に話を聞く機会があった。その方は、テレビで連日垂れ流されるコロナ関連ニュースを見ながら、怖くて外に出られないという話をしていた。そして運動のために近所を散歩していると、通りすがりの人にマスクをしていないことを注意されたことがあるという。「このあたりではマスクをしないで歩いていると注意されるのよ」とおびえた様子で話していた。そのマスクの規律は「近所の年寄り」の間では一般的なものだと言い、「世間の目」を非常に気にしている様子だった。

子どもたちも同じ状況に置かれている。多くの小中学校は2020年の夏休み前後からほぼ通常授

* 社会学部教授(社会福祉学科)

業に戻ったが、学校では終日マスク着用と私語厳禁で、音楽や遊び、文化イベントは奪われたままになっている。誰もしゃべらない無音の教室で、ディスタンスを保ち、前を向いて黙々と給食を食べなければならないという。このようなほとんど刑務所のような規律のなかで、子どもたちは「看守」となる先生の監視の目に過敏になっているにちがいない。

そして、先生やおとなたちのコロナ対応を見ながら、子どもたちの間でも不信が生まれている。小さな子どもや若者たちが他者との接触を避けるよう強えられることは残酷なことで、それは社会の信頼性をますます失わせることにつながるだろう。

関連して、2020年夏に、横浜市内の駅の地下街で寝泊まりしていた路上生活者に対して中学生を含む少年たちが暴行を繰り返す事件が起こった。市教育委員会はコロナによる若者の不安とストレスが一因であると見ている、と報道されている。

散歩に出るにも周囲の目を気にしなければならない高齢者の経験。先生とクラスメイトから監視、抑圧される子どもたちの経験。そしてホームレス襲撃事件を起こす若者たちの不安な気持ちの根っこにある息苦しさは、おそらく同じ性質のものだと思う。

自粛警察は、日本特有の「同調圧力」が生み出したものであるとする考察を多く読む。だがもうひとつの側面として、コロナ以前から日本社会には単純に「祭りのなもの」が欠如してきたのではないかということを考えたい。日本社会は、海外の人たちがやるように飛沫を飛ばしながら至近距離で討議しないし、ハグやキスもしない。緊張感からの解放が少なく、「空気」を読むばかり

で、息苦しい社会だと思う。そこにきてコロナでさらに他者（の身体）との距離が遠ざかった。科学的な根拠にもとづく対コロナの行動規範にしたがうべきことは確かだが、そこから生じる緊張感と「祭り」がなくなったことによる人々のストレスがどこに向かうかが心配だ。すでにDVや虐待が増え、認知症、不安やうつ、孤立といったことが深まっている。こう考えてみると、「福祉」というのは「祭りのなもの」を提供することに近いのなのかもしれないと思ったりもする。祭りがなくなったために人間が壊れてしまい、社会が崩壊の危機にさらされているということだろう。

オンライン授業やZoomインタビューのメリットももちろん理解できた。合理的であるし、工夫次第で効果も高められる。他者との接触が嫌な人、必要でない人にとっては快適であろう。その一方で大学というコミュニティが「祭りのなもの」を育ててきたことにも関心が払われてよいと思う。大学にかぎらず、withコロナの今後、合理性に支配され殺伐とした社会の緊張感を解く何かが必要であることを再確認し、その何かをとりもどすことも考えたほうがよいのではないかと思う。

ここまで書いてきて、結局のところ「祭り」とは何なのかがよくわからなくなってきた。論文ではなく妄想の類いの文章であるとはいえ、支離滅裂な感じもする。こういった妄想を誰かと語りあうことも「祭り」の一部なのかもしれないが、それができないことが自分をさらに混乱させている。身体のいらぬヴァーチャル・リアリティの世界がついにやって来てしまったいま、人間社会が試されているというありきたりな現状把握しかまだできていない自分がある。

プレ座談会

開催日時 2020年7月26日(日) 13:00~

参加者 石岡里佳子(社会学科3年・学内学会)

石川 真衣(社会学科3年・学内学会)

伊藤 小春(社会学科3年・学内学会)

木島 夏海(社会学科3年・学内学会)

池田 希帆(社会福祉学科2年・学内学会)

高橋 美衣(社会学科2年・学内学会)

東野 好花(社会学科2年・学内学会)

——いつからコロナを意識し始めましたか。

伊藤：3月末くらいです。

石川：3月終わりくらいです。

石岡：緊急事態宣言前くらいですかね。

木島：2月~3月頃です。2月の中旬くらいから横浜港に停泊している(客船の)ダイヤモンドプリンセス号の船内で感染があったということを知ってコロナの危機を感じ始めました。(その影響もあって)2月の中旬頃に(消毒用の)アルコー

ルを持ち始めるようになりました。

石岡：3月中旬頃まで留学をしていたのですが、留学先はそこまでマスクとかしていなかったもので、日本に帰ったらアルコールやマスクが徹底されていてびっくりしていました。

東野：ドラッグストアでアルバイトをしているのですが、2月上旬からマスクの売れ行きが凄くのびてきて、今までお店にあった商品が一気に減っていったのでそれを見て意識し始めました。

高橋：2月~3月です。アルバイト先の飲食店の



お客さんの人数が少なくなっていった傾向があつて意識し始めました。

——心身への悪影響、好影響はありましたか。

石岡：あまり動かなかつたので生活リズムが崩れました。

伊藤：朝10時には起きられなくなってきています(笑)。

石川：夜型になってきています。夜型で朝早く起きるのが難しくなつてきているため秋学期の1限の時間が起きられない気がします(笑)。

伊藤：授業受けるのがしんどくなつてきました。学校に行くと授業モードになっていたのにずっと家に居るので、休みなのに授業あるという理不尽さを感じます。

石岡：休みと授業の差がなくなつたように感じます。授業を後回しにして休みの日に受けてしまつているため、メリハリがないです。

伊藤：好影響と言うと、家からでなくていいのはありがたいです。

石川：元々アウトドアなほうではないから、満員電車のしんどさがなくなつて良かったし、嬉しかったです。

池田：通学に3時間かかるため、都内とかを通るときに人混みが苦手だから、通学する必要がなくなつたことから精神的に楽になりました。

石川：インドア、人混み苦手な人にとっては良いかもしれないね。

伊藤、木島：家にいたいので良いですね。

石岡：でも、遊びたいですね。オンライン飲み会もあるけど、直接人に会えないのはきついです。

高橋：私は、家にずっといるのが苦なので気分転換に散歩はしていました。アマゾンプライムでドラマや映画、アニメを見て時間を潰していました。

石岡：授業始まる前は、一気に続けて映画やドラマを見ていましたが、授業始まったらずっとパソコンと向き合う毎日に。そうなたたために、ずっと座りっぱなしで腰が痛くなつたり、目が疲れるようになりました。

石川：分かります。

——自粛生活期間はどのように過ごしていましたか。

石川：ヨガを始めるようになりました。あと、大掃除をやりました。1mmも興味はなかつたけれど、体を動かすという意味で始めるようになりました。普段時間を割かないことを丁寧にやるということが増えました。

石岡：韓国ドラマ・映画を見る機会が多くなりました。見る機会が増えることによって語学を独学でやるようになりました。あと、動けないからウォーキングをするようになりました。YouTubeで動画を見て、ストレッチするようにもなりました。

伊藤：睡眠時間が増えました。

高橋：体重、体型を維持するためにもダンスのオンライン授業を受けるようになりました。

池田：朝活動するようになりました。わざと朝に予定をいれて、生活を正しくするために、朝早くにバイトをいれたりしていました。

石川：お菓子作り、料理作りにチャレンジしました。

——オンライン授業のメリット・デメリットについてはいかがですか。

石川：メリットで言うと、オンデマンドの授業では、聞き逃した所に戻ってメモすることができて良かったです。しっかり聞けるという点が良かったです。

石岡：デメリットで言うと、発表、プレゼンテーションできる機会がなくなつてしまつて、人の前で話すことができなくなつてしまいました。あと、課題が多いことです。メリットで言うと、移動時間がなくなつたのは良かったです。あと、チャットを使うことで質問しやすかったです。

東野：メリットで言うと、私は、あるボランティアの授業を受けているのですが、そこでオンライン授業だからこそ、遠くに住んでいる人、ゲスト

を簡単に呼ぶことができ、Zoom上で色々な方と交流することができました。デメリットはやっぱりExcelとかの実習をやりながら授業を進めるにあたって、先生は苦勞するだろうなと思いました。先生もオンライン上で説明するのは難しいと言っていたので、そこはデメリットかなと思います。

石川:確かに遠くの人を呼べるのは良いですね。まだインタビューとかはしていないのですが、私も調査実習で普段は関東しかインタビューできなかったのがちょっと遠くの人とオンラインでインタビューしようかという話も出ていて、割と場所を気にせず提示できるっていうのはメリットかなと思います。あと、実家からも授業を受けている人もいますよね。

——**対面授業とオンライン授業どちらがいいですか。**

東野:実習とかそういう少人数だったら対面の方がいいかなと思います。でも、大人数の授業とかは先生の話をもともと聞いているだけだったので、それはオンデマンドでも変わらないかなと思いました。

伊藤:対面と動画だったら、対面の方が若干いいかもしれないです。動画を見るのが凄く苦手で気が逸れるので時間がかかってしまったので。

石川:ネット環境とかもありますね。大人数の授業とか本当に一方的に聴くだけの授業とかだったら私もそこまでわざわざ大学に行く必要が無いのかなっていうのは感じてしまっていて、そういう所はあります。

高橋:私は対面授業の方がいいなと思います。通学するのは時間がかかるけど、生活リズムは崩れないし、授業の中で出された課題、リアクションペーパーとかもその授業の時間内に終わらせて提出することができるので課題も増えないというか後回しにすることも無いという面で(対面授業の方が)いいかなと思います。コロナの感染が広がるようであれば全然オンライン授業でも良いのですが、コロナの感染が少なくなって大丈夫な状態

になったとしたら、できるだけ対面授業がいいかなと思います。

石岡:やっぱりオンライン上だと話し合い、ディスカッションとかしづらいのがあって、そういう授業とかは対面授業がいいと思うし、逆にオンラインって先に決めてオンラインだけの授業っていうのがあってもいいのかなと思いました。ゲストスピーカー呼ぶとかできるからそういう面で考えてオンライン授業だけやりますっていう授業があってもいいかなと思います。

高橋:オンライン授業の方が何回もその動画を何度も聞き直せることができるから、対面授業よりは真面目に集中してコメントを書けていると個人的に思います。

石川:分かります。時間に割とゆとりがある分、リアクションペーパー書くにもレポート書くにもちょっと前より丁寧に書こうかなっていうことはあります。それは先生にとっては良いのかどうかは分からないけど、それでも単純に人と会えない、友達と会えないっていうのは春学期過ぎてみて悲しいと思ったから、その面では多少対面授業があってもいいなっていう気持ちもあります。

石岡:テストが無くなって、レポートだけで成績がつけられるのは、結構どうなんだろうとは思いますが。

伊藤:テストが無いのは辛いです。レポート書くのは苦手だったので。

石川:確かに、レポート書くのが苦手な人にとっては過酷なテスト週間になりますね。

伊藤:ほぼ全部レポートですもん。レポートの授業をなるべくよけて履修したらレポートになっちゃって。

石川:レポート派にとってはありがたいです。

石岡:レポート派ではあるけど、量が多いとちょっと…。教科によってはこの内容についてはレポート難しいというのがあるので。テストで取っていたつものものがレポートになるものはきつかったです。

伊藤:後回しの癖で、自分の首がすごく絞まっていて、しんどいです。

——現在、家族はどのような状態ですか。

石岡：私は今、バイトも無くなって学校も行っていないので、家にいるから結構やっぱり家族と一緒にいる時間は増えたかなと思います。一緒にご飯も食べられるし、そこは結構良い面かなと思いました。

石川：結構家族の人とかのお仕事はリモートになっていますか。

伊藤：最初リモートになったけど、だんだん出社するようになって結局ずっと出社している感じです。

石岡：私の姉はほぼ在宅になって、それでもやっぱり仕事はあまりないという状況ですね。

石川：影響は多少ある感じですか？

行ったりだとか皆でご飯食べに行ったりだとか家族の時間が増えたりして仲良くなっているのかなと思います。

石岡：実家だと家族との時間が増えると思うんですけど、1人暮らしの人はどうですか。

石川：はい。家族は父がオンラインと出社半々位で母はずっと出社しているんだけど、そこまで生活の変化はないって言っています。出身が静岡県なんですけど、静岡県はそこまでコロナが酷くなかったのもあるから、そこまで変わってないかなと思います。でも、私がこっち（関東）に住んでいることによって、夏とかゴールデンウィークの帰省も止められて私と家族と一緒にいる距離、時間は減っているなという感じはします。逆に早い段階から実家に帰っている子もいたりするから、ま



石岡：結構影響ある所に勤めていますね。私の親も影響があるみたいです。

伊藤：父は出社していて、母は元々家でできる仕事だし、私は学校が無いだけでバイトは本屋だから特に閉まることがなかったので、コロナ前と変化があまり無いかもしれないです。

池田：私の親は母が病院で働いているんですけど、本当に仕事が無くならないので、オンラインとかは無かったです。父も会社に行かないとできない仕事に就いているので、在宅っていうのは一回も無かったです。その代わりに、午後7時前とか早く帰ってくるようになって、そこから2人で歩きに

たそこも半々位で違うのかなって思います。

伊藤：妹が1人暮らしで大学1年生なんですけど、入学前に引っ越ししなくちゃいけなくて、入学する前に引っ越しして行ったのに、行った先で当分休講ということになって1回こっち（関東の実家）に戻って授業が始まったらまた1人暮らしの家に戻るってということになったので、そこはかなり振り回されました。

東野：私は父がリモートです。弟がいるんですけど、中学生で学校が一時期臨時休校になったので、ずっと家に家族がいる状態で母が今までよりも食材を買う量が増えて、ご飯を作る回数も増え

て(母が)凄く大変だと言っていました。あと、弟が中学3年生なので、今年、本当は部活が最後に総体をやって終わる予定だったんですが、それも全部中止になって、とても悲しんでいました。その代わり、学校で先生達がちゃんと大会みたいなものを作ってくれてそこで部活が終わったんですけど、やっぱり悲しんでいました。また、受験も控えているので、オープンキャンパスとかも全て未定になってしまって、行けるかもどうかも分からないから情報集めもできていなくて不安だそうです。

石川：私の妹も中学3年生なんですけど、ちょうど受験の年で、塾通っているんですけど、塾も少し前まではオンラインでして、今年受験生の子とかはオンラインにも対応しなくちゃいけなくて凄く大変そうだなって感じ。大学よりも中学とか高校とかはオンライン化が難しいと思っているので大変だなって感じます。

石岡：やっぱり大変そうですね。コロナの影響が大きくて。これからどうなるのかも分からないから。

—今後の社会はどう変わっていくと思いますか。

石岡：私は今、色々企業とか調べている中で今、テレワークしている所が安心できる所なのかなと思います。就活の時の企業選びとかにテレワークをしているかが考慮されて、そのテレワークを用いている所が人気になっていくのかなと思います。

石川：確かに、絶対オンライン化は進むだろうという感じはします。どこの業界でもどこの会社でもITというかオンラインが仕事に必須になってくる感じかなと思っています。

東野：凄く身近な変化の事なんですけど、私は今、ドラッグストアで働いているんですけど、やっぱりドラッグストアはコロナの時期でも凄い利益が出て売上が上がっている。私の家の周りに新しく2つもドラッグストアができる予定で、本当に近くにできて、ドラッグストアがコンビニ化して

しまうのではないかと考えています。

伊藤：それは面白いですね。

東野：どれ程増えるのかなって。

石岡：私はバイトでビュッフェをやっていて、それが今できなくなっています。このように、大皿に料理があつて皆で取るみたいなものが無くなっていくのかなと思います。飲食店の利用の仕方も結構これから変わっていきそうな感じがします。

石川：確かに。飲食店は大分打撃を受ける感じがある気がします。私も飲食店で働いているんですけど、売り上げが去年の半分とか酷いときは3分の1とか言っていて、大分打撃を受けているんだなと思いました。

東野：グローバル化、外国のことについて触れる授業を取っているのですが、その授業で、グローバル化、グローバル化っていうのが今、コロナの影響によって無くなってしまっているのではないかっていうことを話しています。人の移動ができなくなってしまっているという面、お話すると私の知り合いでも元々アメリカに留学に行っていた人がもう日本に強制帰国させられたりとかして自分の国に帰るといったことが起きている状況です。あとは、マスクとかも今まで中国に生産を頼っていたけど、コロナのせいで日本でマスクが足りなくなってしまって国内生産を凄く促進していったっていうのも海外に頼るっていう動きがどんどん減ってきているように思います。そういう面でも国内でできることは国内でやろうっていう感じになっていくのかなと思います。グローバル化が少なくなっていく感じがしました。

石岡：確かに。国内でできることが多い国が結構強くなっていくというのはあるかもしれないですね。

池田：テレワークで言うと、テレワークが増えることによって障害者の人たちが働きやすくなるのかなって思ったりします。身体障害者の方々は、会社とか行くのが困難だったりするので、リモートで繋がっていければ、もうちょっと障害者の人たちに対する仕事の幅というのはもうちょっと広がるかなって思ったりしました。私の周りの変化として言えば、パン屋さんでアルバイトしている

んですけど、レジでフィルターみたいなものを張ることによって、全然声が聞こえなくてお客さんとのやり取りでちょっとトラブルになってしまうことが多くなったりとか、増えたかなっていうのがあります。

伊藤：それで言ったら、不登校の子が凄く授業に参加できるようになっていいという話がありますね。

石岡：学校に行くのが嫌だっていう人は、家で授業を受けられるのは精神的にそっちの方が良いっていう人もいますよね。

高橋：飲食店関係のお話で言うと、この前、外食に行ったのですが、行ったお店では今、バイキングを中止していて、利益が下がって大変だし、痛手だと言う話を聞きました。バイキングは料理を取るのに皆が同じスプーン、箸等を使うし、料理を取りに行くにあたって密になってしまうという危険性もあるので中止しているそうです。グローバル化関係について言うと、東京オリンピックが延期されることが決定したけれど、世界全体のコロナの感染者数が1年で急激に減るわけでもないから東京オリンピックは開催されたとしても海外から参加する人は少ないように感じます。

池田：お店で言うと、テイクアウトを始めたところは結構売り上げが上がりそうですね。今までテイクアウトで食べなかった高級そうなお店の料理が家でも食べられるってなるともうちょっと売り上げとかも上がるのではないかと思います。東京とかだとUberなどがあると思うのでそれを活用していけば、売り上げを上げるお店とかも増えていくと思います。そういうのは当たり前でどこでも高級な味が家でも食べられるのかなって思います。

石岡：やっぱり私は、食べている時もそんなに喋っちゃいけないとかいうのがあって、そういう会話がなくなるのは寂しいなと思います。

イベントとかライブとかも最近できなくなっているじゃないですか。オンラインとかが増えたりすることによって、ライブ関係とかも結構厳しくなりそうだなっていうのはありますね。それこ

そ、地方で住んでいた人とか移動できない人とかにとってはいいのかもしれないんですけど、やっぱりライブを求める人は多いと思うので、それをどうコントロールするかっていうのは難しそうだなって思っています。

石川：確かに。やっぱり大勢で集まるっていうのは、絶対できなくなっていると思います。多分大勢で集まることを目標に調整していくっていうよりは、それは諦めて間隔をあけたり、人数を減らしたりしてやっていく対応に変わっていくと思います。ライブとかは体験型というか臨場感を大事にしていたと思うから、画面越しになるとなかなか臨場感とか出すのは大変だし、難しそうだなって感じます。

石岡：1人1人の意識を持つことがやっぱり重要になっていくと思います。お客さんが守らなかつたら、結局人数を制限したところで意味が無くなってしまふから1人1人意識を持っていくこととそれを伝えることが大切だと思います。それを伝えるのは難しいとは思いますが。

石川：ライブが当たったから行っちゃおう、みたいな人もなかにはいるかもしれないですね。

伊藤：演技関係者で、開催するのはいいけど、1人でもコロナ感染者が出たら一発で中止みたいな話があるそうです。今後もそのような状況が続くって話もあってずっと張り詰めている状態で緊張感が溶けないのがしんどいっていう声は見ました。開催するにしても安心は誰もできないっていう感じが嫌だなって思いました。

石岡：舞台に出ている側は、誰かコロナに感染しているお客さんとか身内の人とかにいた場合、今までやってきたことがスパッと終わってしまうので、それはきついだらうなと思います。精神的な面で言うと、エンターテインメントとかは必要だと思うから、この事態でどうやっていくのか考えていかないかなって思います。

伊藤：最近、マスクするの、辛くないですか。フェイスシールドとかあるじゃないですか。演劇の会場とかにいる人は全員つけているのかなって思ったりしたので。フェイスシールドをつけたら暑いだろうなって思いました。

石岡：でも、フェイスシールドをつけないっていう選択肢もあるから、それをどうするかですよ。1人1人の意識と徹底した管理体制が必要になるかな。その分、運営側の負担も大きくなるのかなって。

今は緊急事態宣言が解除されたり、Go Toトラベルとかありますけど、皆さんの意識はどうですか。私はまだ家から出ることは我慢する時かなと思っています。そんなに必要がない外出だったらなくてもいいと思います。でもやっぱり外に出ることで精神的に軽くなる人もいるからそれはさっきも言ったように1人1人の意識と外出した際は、2週間自粛するとか個人の行動が大切になってくるのかなって思います。

伊藤：割とムードに沿って動いてしまうという人がいると思うからどうムードを作るかっていうのも大事な気がします。Go Toトラベルだったら、ちょっと何を言ってるの、みたいな発言していた方が、そういう（外に出ない方がいいという）空気を作れるのかなって思ったりはします。

石川：確かに。他の人がこうだからこうしろみたいなのは良くも悪くも周りの雰囲気を見て行動している感じはあると思うし、私も実際、周りの人が今どれくらい旅行しているんだろうとか見たり考えたりしたから、それも考えとして一理あると思います。でも、自分で考えて行動しないとイケないし、いくら国とか地域の指示で、外に行ってはダメ、外に出てもいいとか言われても結局は自分がどう感染しないとかさせないとか、そういったことを意識しないとコロナを防げないと思うから、ちゃんと考えて行動することが自分も含めてできるようになった方がいいように感じます。

池田：ホテル業界の人たちに対しては、なんとかこのGo Toトラベルで利益を出そうと頑張っているから、それ自体は否定することはできないけど、個人としては感染リスクとしてマスクがあって、マスクをしてまで旅行したいかって言ったらそうまでしてしたいとは思わないです。東京除外

とか色々言われているんですけど、全国的に広がってきているから東京が排除されるのは可哀想だなって思います。経済を回したいんだったら、一時的な減税とか、消費をもっと上げるとかもちょっと他のやり方があるんじゃないかと色々考えてしまいます。果たしてGo Toトラベルは良かったのか悪かったのかっていうとどちらも言いがたいなって思っちゃいます。

高橋：私もGo Toトラベルが良かったのか悪かったのかは凄く感じています。東京除外が決まったのも急だったし、Go Toキャンペーンでお客さんを受け入れる旅館等の宿泊先も、何人のお客さんが来るとか誰が来るとかも把握ができていない状態で大変だということニュースで見知ったので、もう少し他の対応、やり方があったのではないかと思います。観光業界もお客さんに来てほしいと思っているだろうから、国や政府が観光業界に給付金や補助金等を送るとかそういった方法はなかったのかとか考えたりしてしまいます。

伊藤：すでにあちこち色んなお店が潰れているし、観光業界も苦しい状況にあるようで、観光に行かずに支援することは結構難しいですよ。クラウドファンディングにしても。

石岡：だから全部制限、全部禁止っていうのは難しいけど、よく分からないまま進んでしまっているから、1回細かく情報を出してから考えた方がいいのかなって。そうしないと、お互いが動きづらいのかなって。

石川：確かに、ニュースとかを見ていても感染者数とかの数字は誇張させているように感じるけど、実際どこでどのような経路で感染しているとかは分かりにくいし、情報の取捨選択とかも難しいなって感じます。

石岡：難しいですよ。でも、解除されている以上、出掛けても別にいいけど、感染者が増えているのは事実だから、そこはやっぱり個人的には意識が必要になってくるのかなと思います。

認知症家族介護者が抱える課題とポストコロナ時代への展望

金 圓 景*

2020年は、誰もが予想していなかった新型コロナウイルス感染拡大により、在宅で認知症の人を介護している家族は新たな課題に直面している。それは、環境の変化に敏感な認知症の人がそれまで利用していた介護サービスが利用できなくなってしまうのではないかという不安である。在宅で介護を担っている人にとって認知症の人のデイサービスやショートステイ利用は、家族介護者への間接的な支援につながっている。認知症の人が介護サービスを利用している間に必要な用事を済ませ、リフレッシュできる休憩時間を確保できる貴重な時間になるからである。しかし、コロナ禍において介護福祉業界でクラスターが発生する度に、介護サービスが中止されるケースが相次ぐなか、家族介護者は代替策が見つからないという課題を抱えている。

介護サービス以外に、認知症家族介護者が利用できる地域資源として認知症カフェが全国各地で展開されている。しかし、コロナ禍においてほとんどの認知症カフェが閉鎖され、厚生労働省(2020)の調査によると、約8割を超える認知症カフェが感染拡大で再開に踏み切れない状況である。認知症の人と家族介護者にとって居場所になっていた認知症カフェの再開が難しいなか、地域での居場所を失った認知症の人と家族介護者が少なくない。

一方で、対面での認知症カフェの開催が難しくなってきたなか、新たな試みとしてオンライン上で認知症カフェを開催する事例が増えてい

る。オンライン上で開かれている認知症カフェの場合、全国どこでも参加できるメリットがあり、これまで以上に新たな出会いや学びが得られ、認知症の人と家族介護者にとって新たな刺激になっている。しかし、オンライン上で開催される認知症カフェに参加できる人は限られており、スマートフォンを持っていても使い方が分からない、または自宅でのネット環境が整っていないなどの理由から参加できない人も少なくない。

その他にも、仕事と介護を両立している家族介護者の場合、在宅勤務が続かなか介護と仕事の両立が厳しくなってしまったケースも発生している。力石(2015)の調査によると、介護時間が介護離職の意思決定に大きな影響を与えている可能性が示されている。在宅勤務が続くと、仕事と介護の切り替えが難しく、コロナ禍で介護サービスが中止・縮小される場合、普段より介護時間が増えることから介護離職や介護虐待などが懸念されている。しかし、これらの新たなニーズに対する支援策が整っていないのが現状である。

ポストコロナ時代には、コロナ禍において認知症家族介護者が抱えているこれらの課題に向き合い、持続可能な介護福祉業界を構築するために、国・自治体・介護福祉事業所・介護福祉専門職などそれぞれに求められることを検討・整備していく必要がある。また、新たな試みであるオンライン上の認知症カフェの積極的な活用に向け、日ごろから地域住民向けのスマートフォン教室などを開催するなど、非対面型サービスを併用できる基盤づくりが必要であろう。その他にも、ケアマネジャーは仕事と介護を両立している家族介護者が

* 社会学部准教授(社会福祉学科)

抱えているニーズを把握し、それぞれの状況に合わせたオーダーメイド型支援ができるように努めるべきである。そのためには、ポストコロナ時代に認知症家族介護者向けに必要な支援内容を適切に把握するためのアセスメント力を高めていく必要がある。つまり介護福祉業界にも新たな挑戦が問われる時代になると言える。

〈参考文献〉

- NHK WEB記事2020年11月1日付「認知症カフェ」新型コロナで“再開踏み切れず”80%超
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201101/k10012691311000.html> (2020.11.29アクセス)
- 力石啓史, 2015年, 仕事と介護の両立と介護離職に関する調査結果、生活福祉研究, 89, 17-27.

ささやかな「奇跡の年」のために

澤野 雅 樹*

すっかり耳に馴染んだ「新型コロナウイルス」や「コロナ禍」といった語彙は、次第に古び、廃れてゆくだろう。おそらく2年と経たずに新型という表現が似つかわしくなくなり、となれば当のウイルスはいわば「コロナ」属に吞まれ、特定種を指すことができなくなるはずだ。それゆえ、2020年が歴史的な年となる点では変わらないかもしれないが、前後を画す記号はCOVID-19となり、目下の困難を好機として利用できれば新たな時代の幕開けとして語り継がれるようになるだろう。

事実、リモートやオンライン、テレワークといった言葉が一部の人々にのみ関わる特殊なコミュニケーション手段ではなく、あらゆる世代の生活にこれほどの速度で浸透するようになるなど誰に予想できただろう。大学生がみな、家から一步も出ないまま授業を受けるのを日々見るにつけ、いったい「不登校」や「引きこもり」とは何だったのかと首を捻りたくなる。今や誰しも自室に引きこもり、全世界の大学生が「不登校」状態にある。裏を返せば、目下の状況はチャンスでもある。そう、リモートが日常となり、オンラインとの「ハイブリッド」が当然となれば、いよいよ「不登校」の概念が消滅し、家にいながら大学に入学し、卒業し、果てはテレワークで社会に貢献することさえ夢ではない。当然、それはルールを外れた者たちがレースに復帰するチャンスであるばかりか、社会の側でも埋もれた才能を発掘するチャンスとなるだろう。

ダニエル・ベルの「脱工業化」の先に出現する

社会のイメージを具体的に描いてくれたのはアルビン・トフラーの『第三の波』（1980）だった。彼の提唱した「デジタル革命」や「コミュニケーション革命」は、40年前からテレワークの実現を予見していたが、旧弊の価値観と社会的な慣性の法則とでも言うべき因習ないし惰性がその実現を阻んできた。COVID-19にもしも悦ばしい点があったとすれば、薄々可能と予感されながら阻まれてきた変化への包囲網が難なく突破されたことにこそ求められなければなるまい。

われわれの社会は、すでに20世紀のうちに始まっていなければならなかった変化に、今ようやく着手しつつある。言い換えるなら、コロナ禍を好機と捉える限りにおいて、災厄が去ったとき、世界が以前の状態に戻ると考えてはならない。来るべき世界を引き寄せるように災厄を利用するとき、われわれは「周回遅れ」と謗られた日本的な停滞をようやく後にすることができるのである。

教訓とすべき例を一つ出しておこう。

科学史ないし物理学史において「奇跡の年」と呼ばれる期間があった。1665年、アイザック・ニュートンはその一年あまりのうちに、世界認識を一変させる偉業を次々となし遂げた。何がそれを可能にしたのか？ ニュートンがケンブリッジ大学に入学したのはその4年前のこと、1661年だった。そして、1665年とは、イギリスが疫病の代名詞であるペストに見舞われた年でもあった。黒死病とも呼ばれるその流行病によりイギリスの大学は悉く閉鎖され、都市部は今で言う「ロックダウン」を余儀なくされた。若きニュートンは仕方なく実家のある田舎に引きこもり、否応なく孤

* 社会学部教授(社会学科)

独な時間を過ごす羽目になった。何もすることがないのだから、そのとき、青年ニュートンは窓外に広がる農村の風景に目を遊ばせながら、一本の林檎の木でも漠然と眺めていたのだろう。太陽の周りをめぐる地球の公転運動に思いを馳せ、同じようにして地球の周りをめぐる月の周回軌道にも思いを馳せていたのかもしれない。林檎の実が真下に落下するのを目にしたニュートンは、地球が太陽の中心に向かって落下せず、月もまた地球の中心に向かって落下しない「理由」に思い至ったのだ。言い換えるなら、太陽からできるだけ速く離れようとする地球の離心的な運動を周回軌道に繋ぎ止めている「力」を発見したと言ってもよ

い。それはまた「無為」が「仕事」に取って代わられた瞬間でもあった。

言いたいのはただ一つ、——無為こそ宝であるということ。その空隙に仕事を呼び込んだのは無為なのだから、真の価値は偉業にあるのではなく、それを可能にした無為にこそあると言うべきなのだ。何もすることがない時間こそが最大の好機であることを「奇跡の年」は教えてくれる。われわれもまた、2020年がCOVID-19の年である以上に各人にとって「奇跡の年」となるべく、何もすることがないからこそ何でもできる時間を見出し、満喫しようではないか。

第1回座談会

開催日時 2020年8月12日（水）14：00～

参加者 井村 知貴（社会学科4年）

栗原 瑞生（社会学科3年）

生澤 美結（社会福祉学科3年）

明角 優花（社会福祉学科3年）

主催者：伊藤 小春（社会学科3年・学内学会）

高橋 美衣（社会学科2年・学内学会）

——いつからコロナを意識し始めましたか。

生澤：私は1月くらいです。中国の武漢の方で流行っていることがニュースで取り上げられた時期に、個人的な話で申し訳ないのですが、足を怪我していて、病院に通ってたんです。そこで、担当の医師から「今流行っているコロナは、夏くらいまでかかる」と言われ、「そうなんだ、結構大変な感染症なんだな」と思った記憶があります。ただ、身近に感じたってことで言うと、ゼミのフィールドワークで本来だったら今年の2月にデンマークへ

フィールドワークに行く予定だったんです。それが急遽出発の2日前に中止になって、そこで初めて、「いよいよ日本にも来たのかな」と思いました。**栗原**：私が意識し始めたというか、自分から対策を取らなきゃなと思ったのは2月の頭です。ディズニーシーと、ロンドンに旅行に行ったんですけど、まずディズニーシーに行った時に、本当に人が少なかったんですね。やっぱりコロナが出始めたっていうのでちょっと話題になり始めた時期で。あとロンドンに行ったってのが、皆からも「行くんだったら空港と空港に行く電車だけ



はマスクをしておいたほうがいい」と言われたりとか、消毒液が買えないとか、そのようなことがあって。あとは旅行先で見た新聞を読んで、中国人がどこか入国禁止っていう記事を読んで、もしかしたらこれから大変なことになるんじゃないかなって思ったのがいちばん意識し始めた時かなと思います。

井村：いいですか。僕も先程述べられていたように栗原さんと同じくらいで2月くらいになるんですけど、年越しはディズニーのカウントダウンに個人的に行っていて、まさかコロナの年になるなんていうのは全く思っていなくて、2020年、楽しめたらいいなっていう感覚でした。当時(大学)3年生だったので、定期試験が1月末ぐらいまであって普通に大学もあったので、なんかコロナってまあまあ風邪みたいなものでしょって個人的には思っていたんですけど、3月とか4月くらいになってくると実際に就職活動している中で、例えば対面の面接を辞めますとか、就職の採用自体を一旦ストップしますみたいな、そういう話が出てきて少しヤバいなというのを身に染みて感じてくるようになったかなという印象でした。

明角：私も意識し始めたのが、2月の下旬ですね。年越しから1月までは正直全然危機感がなくて「まあ自分なら大丈夫でしょ」と甘く見ていたのですが、生澤さんも言っていたように2月の下旬にゼミの研修、1週間ですよ。デンマークに行く予定だったんですけど、それが無くなってしまった時から「これは相当な事態なんだな」と気づきました。

高橋：私は2月から3月にかけて芸能人の感染状況とかコロナの感染者数が増えているとか志村けんさんが亡くなったっていうのをニュース報道で見ているとコロナの影響が拡大してきて、コロナの危険性を感じました。そこから意識し始めました。

伊藤：私も2月まではニュースで見るとばかりだったのですが、3月になって友達が親に家に閉じ込められているみたいなことを言い出すし一気にニュースも不穏になってきたっていう頃からなので、私はこのメンバーの中ではかなり意識し始めるのが遅かったかなと思います。

——では、「コロナ禍」での自粛生活による心身の悪影響や好影響はどうだったでしょうか。

生澤：そうですね。悪影響で言えば、私が所属する軽音サークルの活動ができなくなったということです。コロナ流行の早い段階にライブハウスでクラスターが発生したというニュースもあったので、安易に活動する訳にもいかず、うまくストレスを発散することができないというところでもどかしく感じてしまう部分はありました。ただ、好影響だと思ったのは、満員電車の解消が見られたことです。私は新宿の予備校でアルバイトをしているのですが、帰りは特に満員電車ですごく混みます。だけど、コロナ禍で少しずつ人が減ったことで車内で感じるストレスが大幅なくなったので、そこは少しいい部分かなと思います。

明角：悪影響としては、やっぱり運動不足になるっていう所ですね。部活はできないし、友達とも遊べないという中でずっと座ってオンライン授業を受けたりしていると思うんですけど、それが原因で運動不足になって自分の中で凄いストレスになってしまった時がありました。ただ、それがきっかけとなって自分で意識的に運動をするようになりました。あと、常に水筒を常備するなどして水を飲んだり自分の体調を整える心掛けをするようになりました。

栗原：まず、悪影響だと思った点は、ニュースを見るのが嫌になってしまったことです。ニュースだとコロナのせいで卒業式ができなくなった人とかそのようなニュースばかり報道されてこちらまで辛くなってしまいました。でも、いい点としては、まず、1点目にマスク嫌いを克服できたところ。あともう1つが、この前教育系のインターンに伺ったのですが、そのインターン先でコロナのお陰でオンラインの授業が充実したという変化を前向きに捉えるような発言をしている人がいらっちゃって、私も変化に適應できるという前向きに捉えられるようになるきっかけになったんじゃないかなと思います。

井村：マイナスな方から言えば、やっぱり運動不足っていうのは先程おっしゃられたみたいにある

なと思っています。大学4年生になって、「えっ!? 大学ってこんなにめちゃくちゃ大変だっけ!?」って結構感じてしまって、めちゃくちゃしっかり(授業を)受けないと意外とレポート書けないものもあったりするので、座っている時間が多く、運動不足だなと感じました。あと、地方出身あるあるかも知れないんですけど、こういう時期、お盆とか(実家に)帰ろうかなと思っても例えば親が「ちょっと、この時期だからやめた方がいいんじゃない?」とか「近所の目もあるし…」みたいなことで(実家に)帰れないのはマイナスなのかなってところはあります。そして、プラスな点で言えば、僕は、個人的に通勤ラッシュだったりとか、めちゃくちゃ背中がくつつく位の満員電車とか山手線とかあまり乗りたくないタイプなのでその点は(コロナの影響で通勤ラッシュとかになりにくくなっていて)いいなと思います。またオンライン授業になったので、先程インターンの話とかもされていたのですが、例えば今までだと大学行った後にバイト・インターンといった形だったと思うのですが、オンラインだとどうしてもビデオでZoomとかで出ないといけな授業だったとしても、インターンの休み時間もりますみたいな感じでインターンをやりつつ大学の授業みたいなこともできたりするので、大学生でも時間をうまく使えたりとかできるのかなと思います。あと、個人的な話となってしまいますが、本当に外に出なくなってしまったとか友達とあんまり遊ばなくなってしまったとか、大学にも行かなくなってしまったので、服をわざわざ買う必要が無くなったというのがありました。意外と大学生あるあるかもしれませんが、めちゃくちゃ服とか気を使っていると意外とお金がかかるとか毎シーズン服買うとかあると思うのですが、意外と去年のでもいいかなとかわざわざ友達と会わないからっていうところでお金を使わなくなったのではないかなと思います。例えば、ご飯行ったりとか飲みに行ったりとかもそうだと思います。そこはマイナスかプラスかは分かりませんが、大学生の変化としてはあるかなって印象です。

高橋: まず、悪影響を挙げるとすると、やっぱり

運動不足でストレスが溜まってしまうというのはあると思います。緊急事態宣言が出された期間、自粛生活でどこにも行くことがなかったので運動不足でストレスが溜まりました。その後は、散歩とかもしていたのですが普段よりも運動不足でやる気、モチベーションとか低かったように感じます。好影響としてはオンライン授業で大学に行く必要が無くなったので睡眠時間は普段よりも取れるようになったことだと思います。

——では、生活の変化にはどんなものがありましたか。

生澤: まあ、皆さんもそうかなと思うのですが、単純に家にいる時間が長くなったというのがあります。あとは、自分がキャリアー(無症状感染者)だった場合に他の人に移したくないというのもあって人との距離感や手洗い・うがいなどの初歩的な所に気を使うようになったという感じはします。あとは、通学することがなくなったので運動する時間が減ったけれど自分の好きなタイミングで好きなことができるような環境に変わったように思います。

栗原: 私もやっぱり運動不足だと思っています。昨年までは三田線を利用していたのですが、本当は(今年の)4月から山手線で高輪ゲートウェイまで行って歩いて通学する予定だったので、これから歩く歩数が増えると思っていたのですが、こんな状況(コロナ)になってしまったので、なかなか自分で運動するのは難しいと感じています。あとは、変化としたら、授業(の受け方)が変わったので、自分で自分の好きな時間に好きなことができるようになりました。しかし、バイトも無くなってしまったので、自分のことに当てられる時間が多くなった分、収入とかも無いのでちょっと不安な点は増えたかなと思います。

明角: 私は、部活が無くなってしまったのが一番大きいですね。体育会系は結構練習時間を多く取っていて、それが生活の一部みたいになっていたのですが、春の大会が無くなるのに合わせて合宿も全部無くなってしまいました。個人的に練

習する時間が多くなったので、部員とのコミュニケーションを取れなくなったり、人と会話することが無くなったのが一番の変化かなと思います。

井村：時間に関連した話をする、逆にオンラインとかになって自由になりすぎたことで、例えば食事のタイミングであるとか寝る時間であるとか起きる時間であるとかが結構不規則になってしまったように感じます。課題に追われていたら遅めのご飯でいいとか、課題に追われていたから寝る時間が遅くなった起きる時間が遅くなったとか、空きコマの時間に昼寝をしてしまったりなどが結構あるあるなのかなと思います。実家暮らしではなくて1人暮らしとかをしていたりすると、今まで学食でお昼を食べていたりしていたところが自分で家で作るといったように変化があるように感じます。(大学)4年生になってある程度色々な人と友人関係であったりとか人間関係が構築されている中でも大学で同じ授業だったから話す友達みたいな人もいたと思うのですが、そういうのがあまり無くなってしまったので、本当に自分と仲良い人しか連絡取らなくなりました。それが良いのか悪いのかっていうのがありますが、人間関係的にも結構逆に狭まっちゃったのは印象にあるので、今までは連絡を取っていたけどオンラインになって連絡を取らなくなったということもあったので強く(変化があったように)感じます。

高橋：私は、自宅で過ごす時間が増えたことによってダラダラした生活を送るようになってしまいました。親に(コロナの影響もあるから)アルバイトを控えるように言われて、アルバイトも休むようになりました。自分の時間が増えた分、夜遅くまで起きてお昼近くまで寝てしまうといった習慣がつきはじめてしまいました。また、親しい友人のみ連絡をとるようになったので、人とコミュニケーションする機会が非常に減ってしまったように感じます。

——次に「**経済(バイト、インターン、その他社会の経済等)への影響**」について、お願いします。

栗原：個人的な話になってしまうのですが、私は

くもんのバイトをしていて、くもんの教室はとても狭いので密を避けるために大幅に人員を削減しています。パートの人を優先しているのでアルバイトの人はあまりバイトできていない状態です。それでもお金は使っている状態なので、資金は少なくなってきているように感じます。今、そのような方が多いと思うと凄く不安に感じます。県を跨いで移動とかも自粛生活をするべきだという声もあるとは思いますが、個人的には経済をまわさないとこの先ダメなのではないかと思う点もあって、複雑だと思っています。

生澤：アルバイトの収入は、3月～6月あたりは出勤もしていなかったという状況だったので例年に比べて明らかに減っているように感じます。でも、夏期講習の時期に合わせて対面授業を再開し、スタッフも必要になっていたので、7月以降の収入は例年とあまり変わらないと思います。消費の面では買い物に行った時に今までだったら高いから手が届かない商品や食材が買えるようになったかなと思います。例えば、今までだったら料亭などに出されるような高級食材なんかが、営業自粛などで流通ルートがストップしているので、スーパーなどに卸されている状態になっています。そうしないと処分することになるので家庭にまわってきているのですが、明らかに値段が安くなっているし、商品としての質は落ちていないのに安く売らないといけない状況にあります。今年だったら、東京オリンピックに合わせて日本のブランドとして売ろうと思っていた商品とか、牛肉とか…。そういう商品は、成長時期をストップさせられないから、今このタイミングで出荷する必要があるのに出荷先が無くなってしまって、仕方なくスーパーで売っています。そんな現状を見ると凄く悲しくなるというか、ちょっと買っておこうかなという気持ちになりますね。

明角：個人的な話をする、私はバイトを2つしていて、1つが出版社で、2つ目がカフェで働いています。出版社の方は、全部リモートでバイトができてしまうので、そのお仕事は全くコロナ前と変わらず同じようにお仕事をしている状況です。逆にそれが主な収入源となるバイトになって



います。ただカフェの方は、やっぱり自粛中は休業していたり、休業明けも人員削減、人件費削減をするという事でシフトがかなりカットされてしまったりして結構大変だなと感じたことがあります。日本全体の話に広げると、就活についての不安が強くなります。株価が結構下がってきた影響によって採用中止だとかインターンを実施しない企業が多くなってきています。もしインターンをやってもオンラインで実施するという企業が多くなってきているので、その分、社員の方に顔を合わせず、会社にも行けずに採用されてしまうのではないかと。会社の雰囲気も社員さんの雰囲気とかも知らずに入社していく就活生、学生が増えるとその分、会社と新卒社員のミスマッチも増えていくのではないかと懸念しています。

井村:ありがとうございます。今、就活の話があって、確かに実際に人事の人とも結構仲良くさせてもらってそういう話をしました。「ぶっちゃけ、分かるんですか!? 就活生は本当にオンラインで分かるんですか!?」ということも聞きました。リアルに結論から言うと、分かるみたいです。やっぱり熱意だったりとか、伝えられる人は伝えられるし、伝えられない人は伝えられないという感じで結構人事の人でも分かると言っていました。逆にそういう環境は皆同じなので、オンラインで面接になったからどうやって対応出来るかっていうのが大事で、そこで対応ができたならこの人は仕事出来るかなという感じでいい印象が持たれるよ

と言っていました。一番大事なのは、80%位は身なりだと言っていて、ちゃんとした髪型をしていて、ちゃんとした服装をしているかだそうです。余談になってしまいましたが、経済のお話をする、先程もあったようにアルバイトとかインターンとか個々で飲食店をやっていたりだとか出版社とか色々と変わってきてしまうのでそこは言いづらい部分だと思います。

共通している場合でいうと、明学が学費を5万円給付したお話をしたいと思います。今まで大学の学費とかそこまで深く考えたことがなくて、大学に行くためにはこの額を振り込むとか払わなくてはいけないという印象があって、当たり前のように大学に行っていたように感じます。コロナになったことで、はじめて学費ってこれくらいかかって、1コマの授業でこれくらいの金額なんだなと考えると、しっかり(授業に)受けないとかなと思いました。今までももう少し受けとけば良かったなと思う所で、経済とかお金の価値観は改めて理解できたというところがありました。でも、実際にオンラインになると、例えばもう少し高いスペックのパソコンを買わなければならないだとかそれこそWi-Fiの環境を整えないといけないだとか意外とコロナになって今まで必要では無かったけれども新たに買わないといけないものがあって、その面で言うと、意外と学生の経済面の負担というものは大きかったのかなと思います。

高橋：ニュースの報道を見ていると、経済が停滞している状況が分かるので、就職活動がとても心配です。でも、先程のお話にもあったように、服装が大切だったり、審査でどこを見られているかということを知ることができて良かったです。経済の面で言うと、Go Toキャンペーンは果たして日本全体として良かったのかということを考えさせられます。経済をまわすといった面では良いと思うのですが、感染を地方に広げるのではないかとという危険もあるので、複雑な問題だと思いました。

伊藤：ありがとうございます。私は、(バイトを)飲食店と本屋さんを掛け持ちしていましたが、3月～5月はずっと社員さんだけでまわすといった状況で、パートもバイトも入れないといった状態でした。書店の方は全く問題ありませんでした。出版社みたいにリモートとはいかないのですが、普通に本が売れていました。自粛中の暇潰しに塗り絵を買っていくといった人も多くて、飲食店とこんなに差があるものなんだと感じました。それから飲食店の方は、休業手当が出たのですが、もし、ブラック気味のバイトだったらさらに状況が悪かったかなと思います。あと、実家は神奈川なので里帰りとかが無いのですが、コロナ1人出したら、村八分状態になってしまうというような話を聞きました。バイト先の近くのカフェがお休みだったことがあって、コロナが出たのかという推測だけで大騒ぎになったので、神奈川であっても過剰に警戒されるのかと思いました。地方までGo Toしても行った先でどういう対応をされるのか分からないのも、怖いことかなと思います。

——「これが嫌だった」という話はありませんでしょうか。

栗原：嫌だどうこうじゃないんですけど、早く単位を取りたくて、授業を詰め詰めにしてしまったんですね。これオンラインだったからよかったけど対面だったらどうなってたんだろうと思って。ある意味良かったかなと思っています。それから私は音声を耳から聞かないと集中できないタイプ

なので、文章だけをドーンと出されると集中しにくいという点はありました。

生澤：多分先生方も対面授業として準備してきたものを、一気にオンラインにシフトすることになって、普段から機械とか使い慣れてない方だと、すごく大変だっただろうなと思いました。でも、講義を受けている身としては、資料だけをポンと出されて「ハイ、じゃあレポート書いてね」みたいに指示だけ出るような授業もあったので、「資料見るために授業受けてるんじゃないんだけどな」と思う部分も正直ありました。ただ、その資料を見たうえで、自分がそれをどうレポートで問われているまで発展させていくのかとか、どうとらえて、先生は何を伝えるためどこを強調してたのかとか、そんなふうに見方を変えて論点をちょっと変えながら工夫をするようになったので、良い勉強にはなりました。とは言っても個人的には対面の方が好きなので、無理のない範囲で対面授業ができたらな、と思ってます。

明角：私も生澤さんと同じ授業を取っているのを知っていたんですけど、授業によってクオリティの差がかなり開いていることが一番気になりました。先生方も慣れない環境の中で授業を進めるのは大変だとは思いますが、少し嫌だなと思ったのは、資料のPowerPointだけポンとmanaba(大学のポータルサイト)に置いてあるケースです。先生の声も聞こえない中で授業を受けるというのは、物足りないなと思いました。逆に、音声つきで詳しく解説してくださる先生もいて、3年生になって専門を深く学んでいくなかで、それはすごく役に立ちました。結論としては、やっぱり対面の方がいいなって感じました。

井村：思ったのは、多分社会学科だとある少人数の「専門書購読」っていう10人とか15人くらいの授業を半分くらい取ってみて、もう半分は大人数の授業を取ってみたんですけど、少人数の方がちゃんとやってる感もあるし、最終的に授業を十何回終えて、こういうところは成長したな、受けてよかったなと感じました。でも大人数の授業だとこなしてる感しなくて、結局すべての授業を終えて、何を学べたんだろう、何を得たんだろう

うっていうことは、インプットはしたけれども、自分の頭の中で整理して、「こういう風に役立つ、知識になったな」っていうのを言語化してみるのには難しいなっていう印象でした。そこは個人差があるんだろうなとは思いますが、レポートに関して、毎回毎回課題が出ると思うんですけど、授業のパワポとか動画とかを見て書こうとしても、なかなか理解が難しい部分とかもあって、自分で調べたりして、そこから書く、ということがありました。そこは学生の問題なのか先生の問題なのかっていうところもあるんですけど、もう少し学生に対してフォローがあると、レポートとかもすごく書きやすいしストレスもかからないし、いいのかなと思います。どっちかっていうとレポート書き始めてしまえば時間がかからないんだけど、書くまでにどういうこと書こうとか、そういうのを考えるのが結構時間かかるなっていう印象だったので改善できたらお互いいいのかなっていうところはあるし、字数とかも、何字から何字以上とか、字数制限がないものとかもあったりするんで、そこは難しいところだなっていうのはすごく感じました。

高橋：オンライン授業のメリットは、私が取っていた授業は動画が多かったんですが、動画なので聞き逃した部分を巻き戻して聞き直すことができ、内容の理解が深められたことでした。あと自分の好きな時間に授業内容を確認することができて、自分が集中してるかもって時に、授業を真剣に受けるってことができたかなと思います。対面授業だと友達と一緒に取ってる授業が多いのですが、一人でオンライン授業に向かっている方が集中できたし、いろいろ考えたり課題に取り組みました。

デメリットとしては、前期単位をいっぱい取ろうと思って授業をすごい数履修して、そうするとすごく課題が多くなってしまって、レポート課題が多かったんで、7月の中旬くらいからたくさん出てきてやばいと思って、結構徹夜する時が多かった所です。レポートに取り掛かる時間も、作業する時間もかかったし、取り組む前も時間がかかりました。

井村：すみません、あるあるを一つ言うのを忘れてました。先生からのフィードバックが欲しかったなというのが正直なところあって、それ結構結論なんですけど。というのは、本当に片手で数えられるくらいの先生が、レポートに対して一行、多くても2行くらいのコメントを点数と一緒にくれていて、そっちの授業の方がやる気になったなというのがあって、というのもなんか、レポートがめちゃくちゃ来るんですけど、先生からのフィードバックがないと、その回答が合ってるかもわからないし、単位来るのかも正直…まあ来るんだろうなとは思ってるんですけど、不安だなんていうのもあるし、どれぐらいのことを書けばいいのかっていうこともわからないし。課題は来るのに先生からのフィードバックがないと、やる気にもつながらないし、答えがわからないので学びにもならないし、というところはあったので、本当に一言二言でもいいので、フィードバックとか、リアクションペーパーだったら「5点満点中何点」みたいな感じに点数でもいいので、そういうフィードバックがあったらめっちゃよかったなとすごく個人的には感じました。

——コロナ禍期間で成長できたと思うことはあるでしょうか。

高橋：地方出身で、今実家に帰ってきていて、神奈川では二人暮らししてるんですけど、二人暮らししている時は本当に全く運動しなかったんですけど、実家に帰ってきたら、オンラインを通してのダンスレッスンを受けていて、それを毎日やるようになって、そこから体重が減って、運動不足が改善されるようになって、今も維持できている状態なので、そこは成長というか、体の健康的にはいいかなって思います。あとは自宅で過ごす時間が増えたので、本を読む習慣がつかえました。小学校から中学校、中学校から高校と、高校生の時とかほぼ本を読まない感じだったんですけど、大学に入って、自宅で一人で過ごすようになって、「あ、本読もう」って気持ちになって、本を読む習慣ができたので、そこから新しい知識をつけられ

たのが成長かなと思います。

栗原：心身への影響のところでも言ったんですけど、変化を前向きにとらえようと、できてるとは思わないんですけど、意識はできるようになったかなと思います。あとは、今年の頭らへんから公務員目指してみようかなと思って、コロナの影響で自粛とかもあったので、早く公務員試験の勉強始めてみようと思ったんですけど、就活を始めてやっぱり公務員は違うかなと思って目指すことはやめました。でも、やっぱり時間があるので勉強してみようと思って、自分が興味のあることを自ら勉強してみようという気になるようになったりとか、知識を身につけて成長したかなと思ってます。

井村：ただ単純に成長したなと思うことは、もともとパソコンを使用するようなアルバイトをやっていたので、パソコンは苦ではなかったんですけど、オンラインになってからタイピングほんとに速くなったなと思って、自分本当、レポートをギリギリまで溜めるタイプで、当日くらいに始めても何とかなるし、って思っていて、23時55分とか50分ならまだいけるって思って、「よし3時間」とか決めてやるんですけど、タイピングがめっちゃ早くなったっていうのは感じたのと、Zoomとかもコロナ前は使ったことなかったのに、ちょっとは成長したのかなっていうのはあります。プラスすごく思ったのは、今までほんとに意識したことがなかったんですけど、話す時に結論ベースで話すってことができなくて、例えば就活の面接もそうだったし、オンラインの少人数の授業とかもそうなんですけど、聞かれたことに対して、対面だと自由に話してたような感じだったんですけど、オンラインだとあまり得られるような情報もないので、結論で「こう思います」とか言うてから「なぜなら」って言った方が、聞いている側も理解しやすいし、聞いててもストレスないな、と。「この人めっちゃ話してるけど何言っているかもわからないしいつ終わるの、めっちゃくちゃストレスやん」みたいなのは、何度もあったので、その結論から話すみたいなのはすごく成長したのかなって思います。そういう結論から話して、その

理由を述べられるみたいな人は、就活でも、行きたい会社にほぼほぼ、大手でも、内定もらっているな、という印象です。逆に、簡単にそうに見えて、相手がききたいことに対して、結論から適切に答えられてないと、本当に内定もらえなくて、妥協妥協で「とりあえずここ入るか」になっちゃっているな、っていうところはあったので、そこはすごく思いました。今日皆さんここでお話しされて、結論から話して、理由も答えて、みたいな感じだったんで、「あ、もう就活絶対余裕やん」って思って、めっちゃくちゃ聞いてました。なので本当にすごいなっていうところで、感心させていただいて、僕も3年生の頃そんな感じだったらもっと就活エンジョイできたなっていう風に思いながら聞いてました。ありがとうございます。

明角：成長したことは2点あって、1つ目はタイピングが速くなったことと、2つ目は家でも勉強できるようになったことですね。コロナ禍の授業でレポートの課題がかなり増えたのと、タイピングする機会も必然的に増えてきたこともあって、家でも勉強しなければならぬ環境になりました。私、中学高校からずっと、家で勉強できず、塾や学校の自習室でしか勉強できないタイプでした。理由は、家は後ろにベッドがあったりとかお菓子が置いてあったりして、誘惑が多い状態でやらなきゃいけなかったからですね。それで勉強している内容が全然吸収できなかったのですが、否が応でも家でやらないといけぬ状況になったので、家で集中するって技は身につけたのかなって思いました(笑)。

生澤：私は、時間の使い方や物事に対しての優先順位のつけ方が身についたと思います。レポートもそうなんですけど、締め切りが一週間後の授業もあれば、授業時間内で提出のものもあって、自分が興味あるものから優先してやっていくのか、調べ物で時間がかかりそうなものから手を付けるのか、締め切りが近い順にバツとやっていくのか、というものの優先順位のつけ方とか、時間の使い方。これならどのくらいの時間がかかるのかなとか、その感覚がコロナ前よりもつかめるようになったと思います。あとは、成長とは少し

違うんですけど、コロナの問題とゼミの研究内容をつなげて考えるようになったと思います。私の所属するゼミでは社会保障制度について学んでいるのですが、コロナによる様々な問題を通してよりリアルに、身近に感じるようになりました。

—**外国の対応について、ロンドンに行かれていた、デンマークに行く予定だったけど無くなってしまったというような話がチラホラあったので、外国について耳にした情報があればお聞きしたいと思います。コロナ禍の外国の対応についてどう思われますか。**

生澤：私と明角は、実際には北欧に行けなかったの、行く前に下調べした範囲内での北欧のイメージでしかお話できませんが、北欧は社会保障制度がよく整備されていて、幸福度の高い国が多いと言われます。しかし、一概にはそうは言えない部分もあるっていうのは、下調べをしていて私たちはすごく感じました。コロナに関連した話だと、スウェーデンがコロナ対策に失敗した国としてあげられていました。スウェーデンは「集団免疫」獲得によるコロナ収束を図ったようですが、現状では失敗したとされています。個人的にはとても驚きました。福祉国家と言われている国が、対策を間違えることがあるのだなと感じましたね。その一方で、ニュージーランドとか台湾とかはすごく迅速に対応を行っていて、隔離するのかしないのかとか、するのであればどういう施設を使っていくのかとか、国がどうサポートしていったらいいのかということが、トントン拍子で進んでいたの、素晴らしいと思いました。世界全体を通して、国民の欲している情報提供をしていたり、国民がやってほしい対策と国が行っている対策のマッチングがちゃんとできている国が、結果としてコロナをうまく抑えられていたのかなっていう印象があります。

明角：北欧のことは生澤さんが全部しゃべってくれたので、私は違う国を。やっぱり台湾の初動の速さっていうのは、評価すべきところかなって思いました。日本は感染者が出てから動くってこ

とがすごく多くて、やっぱりそれが内閣の支持率にも繋がっているのではないかと思います。やはり日本は対応が遅かったのが残念でしたね。台湾のように、かなり初期の段階にはもう国が動いていたらもう少し状況は変わっていたのではないのでしょうか。このように、早期の水際対策が一番コロナには有効な対策だったんじゃないかなって思うようになりました。

井村：先ほど岡先生が出ましたが、授業受けたことが多分あって…キリスト教の先生でしたっけ。1年2年前くらいに受けて、めちゃくちゃ優しいと思ったのが印象に残っているんですけど、ヨーロッパの話されていて、その時の授業が、毎年同じなのかもしれないんですけど、ベーシックインカムみたいな、毎月決まった額を国がくれますよみたいな。例えば日本で十万円給付の話があったと思うんですけど、多分そういう感じで、国が一人当たりいくら、一世帯当たりいくらしてくれるみたいな感じの授業をされていたんですけど。コロナになってみると、ヨーロッパとかでも多分そういう感じで、給付金を毎月、日本以上に支援してると思うんですけど、そういうのは、「海外の対応すごいな」とすごく感じました。あとは、就職先が決まったんですけど、そこが商社みたいな感じで、アジアにも支社がたくさんあって、台湾にも会社があるみたいなのですが、面接の時とかも「海外いけますか」「数年後海外に行ってくださいか」という話もあったんですけど、台湾とかコロナで外国の人を入れないみたいな政策とかされたので、仕事の面とかにおいても海外の対応って日本に住んでて関係なさそうなんですけど、意外と、何年後とかに結構重要になってきたりするんだなっていうところがあったので、岡先生の授業とかちゃんと受けとけばよかったなみたいなことは感じつつ、海外ってどうなんだろうみたいなのはすごく考えるの大事だなっていうのは最近すごく感じてます。

栗原：ロンドンにいたとき新聞を読んだ話を先ほどしたと思うんですけど、それを読んだときにやっぱりどこの国かちょっと忘れたんですけど、対応が早いなと思ったのはけっこうあって、

でもそこで他の国と比較して、対応の速さだとか経済的支援の量だとかを比べて、外国の方が手厚いなって思った点がありました。あとは先ほどの集団免疫について、マスクをするとか自粛をするとかってやっぱり自由を奪われてしまうので、私の持っていた、北欧のイメージ的には、自由を大事にしてるなって思って、らしいなってちょっと思ってしまいました。まあ結局失敗はしてしまったんですけど、こう、なんとなく内心、北欧らしいなって思った点がありました。

高橋：似た部分もあるんですけど、アメリカとかイタリアとかが、コロナが始まった時は、マスクの着用率がすごく低いように思ったんですけど、コロナの感染者数がどんどん増加することによって、マスクの着用率も着々と高くなっていて、その変化がすごい人々の考えっていうか、個人主義で自我が強かったけど、それを踏まえつつもマスクを着用するっていう人々の変化は、外国でもそういう変化が見られるんだってというのは感じました。あとはイタリアは、はじめコロナの感染者数がすごい多かったのに、今では少なくなってきていて、その対応とか、いろいろテレビでやっていて、それでマスクの着用率もあがったとか、そのほかいろいろ工夫があって、コロナの感染者数が減ったってというのは、すごいなって思いました。支援金とか給付金とかも、海外には充実してる国があるっていうのを聞いて、日本ももう少し、そんな詳しくはわからないですけど、そういうものの充実ももうちょっとしてほしいな、なんていう風には考えました。

——ありがとうございます。ほかに何か、質問などあれば。

井村：なんか、興味本位というか、個人的に思ったことを。少人数のある授業を受けていて、澤野先生（の授業）なんですけど、それで今日の座談会出てほしいと言われたんですけど、まあいろんな先生がいるのであれですし、人数によってとか、オンラインがいいのか対面がいいのかっていうのも授業の種類によって異なると思うんです

けど、やっぱり少人数だったら、全然Zoomの方がいいです。先生も家で出来るし、みたいな。わざわざ学校来なくていいから今後もできたら継続したいとか、大きい200人とかの授業でも、オンラインでも受けていいし、対面でも受けていいし、みたいな感じに、うまくやっていきたいみたいになっていたんですけど、正直今後、どっちでもいいですよとなった時に、みんなどっちがいいんだろうというの、来年冒頭に卒業しちゃうのであれなんですけど、3年生とかまだ授業あつたりすると思うんで、どう思っているんだろうみたいなのはすごく、先生と話していて思ったところがありました。

生澤：私は、人数が多い授業や、先生が資料をもとに音声をつけて進めるという形であれば、オンラインでもいいかなと思います。ただゼミは、対面がいいなと思っています。ゼミの良さは、少人数で集まって意見交換や文献を基に議論することだと思うんですよ。間接的にはZoomでもできますが、積極的な発言ができる生徒とそうでない生徒の間に差が生まれてしまい平等な意見交換が難しくなったり、個人的に聞きたいことがあっても、この場では話せないじゃないですか。そう考えると、少人数でいいので対面は欲しいかなと思います。

栗原：私もやっぱり少人数は対面がいいかなと思っていて、画面共有はもちろんできるんですけど、手元で資料一緒に見ながら議論をすすめた方がすごいやりやすいなと思っていて、オンラインでゼミやっていてそういうところをすごく感じました。あと、大人数の授業で対面かオンラインか選べる場合だったら、以前、学校の授業ではなくイベントなんですけど、対面でもオンラインでも参加できるものにオンラインから参加して、他の方からの質問が全く聞こえなかったり、いろいろとトラブルがあったので、そのような機材が整っていればオンラインでもいいかなと思うこともあります。もしこのような状況が続くのであれば、やっぱり心配なのでオンラインから参加したいなと思ってて。もしこの状況が改善したら直接対面でいきたいなと思っているんですけど、コロ



ナの状況下だったら機材次第かなと思ってしまいます。

明角：私は、大人数でも少人数でも対面がいいなと思っていて、少人数のディスカッションは対面で実施した方がより議論が深まるのではないかと思います。大人数の授業ではその場の雰囲気を大事にしたい派なので、家で授業を受けているとかなり孤独感が強いんですね。わからないところも友達や先生に聞けなかったりするので、どうしても一人で孤独に勉強している感じがします。大人数で対面となると、友達に聞けたり先生にその場で質問できたりするので、どちらも対面がいいかなと思います。

井村：すいません貴重な意見を聞いて良かったです。対面とかでも、今話聞いてて思ったのは、大学生あるあるかもしれないんですけど、前の方とかあんま座んないじゃないですか。大教室とか。パワポとかめちゃくちゃ見づらい、見えない先生とか、僕が目悪いからかもしれないんですけど、実際にどっちでもいいですよってなって、パソコンにPDFとかになってパワポとかで資料送ってもらえると見やすいので、今後も、オンラインならなかったとしても、毎回資料配ってくれた方が、いいんじゃないかっていうのもあるし、あとノートとかも、ほんとに書く必要あんのみみたいなところはすごく感じて、いままでだったらまるまる全部テスト100%とかだったら書いてたりとかしたと思うんですけど、もうパワポとか配って

ればそこに補足で何か書く程度とかできたりするんで、書いて、聞いて、考えてっていう作業は要らなくなって、聞く方に集中できたりするんで、その辺も先生が円滑にやってくれたらこっちも勉強しやすくなるとか、熱とかで休んだりとか、どうしても学校いけないときに、そういう救済措置みたいな感じでやってくれるとめっちゃいいなっていうのは考えていて思ったので、(意見を聞けて)すごくありがたかったです。ありがとうございます。

生澤：資料の話でちょっといいですか。一人暮らしをしている人は、家にコピー機を置いていない人が多いので資料を利用するのが大変だと思います。対面授業では、先生が資料を印刷してきてくださって、そこにメモをとる形で授業してたと思うんですよ。それがオンラインになると、「各自で、PDFのつけとくから、準備してね。」というのがけっこうあって。私は実家で印刷できるので、そこまでお金もかからないし、苦勞しなかったんですけど、一人暮らしの人はわざわざコンビニとかに行ったりしなきゃいけないだろうし、それが毎週ほかの授業分も必要となると、お金もかかるし、時間もかかるしで、大変なのかなと思いました。

伊藤：印刷は外でやろうとすると、1枚10円だから5円だからするし、家でやっても紙代はかかる…。

生澤：失敗した時とかすごいショックですよ。10円！みたいな。(笑)

伊藤：辛いですが、それ。ほんとに。

井村：ぜひ澤野先生とかに教えてあげてください。多分何かしら、上の人に言ってくれると思うので。

生澤：ほんとですか。

井村：澤野先生とか個別でちょっと雑談とかするんですけど、学長とかとも全然、コロナで今どういう状況なのかとか、生徒がどういうふうにいるのかとか、結構共有してるって言うので、ぜひ、お願いします。

——最後に、今後の社会の変化について、どう思うでしょうか。働き方、イベント、生活については。

栗原：よく両親とも話したことがあったんですけど、わざわざいい土地に会社を構えてお金を払うよりは、全部オンラインにしちゃって、建物にかかるお金少ない方がいいんじゃないかという話が出たことがあったんで、働き方がそのように変わっていくと、働く側も会社側も負担が減るんじゃないかなというふうな話はしました。やっぱりコロナがあってからみんな、心の余裕がなくなったと思う場面が多いじゃないですか。いじめが起こったり、帰省した人に「来るな」って言うたり、そのような面で、もう少し変わっていかないかなって思う点はあります。

生澤：私は、これを機にオンラインにできる職業もあれば、一方で、元に戻さないとやっていけない職業あると思うので、内容によるのかなと思います。私はアルバイト先が予備校なので教育の話をする、教育現場とか教育関係は、対面式に戻っていくんじゃないかなと思っています。あとは、コロナの影響は、感染が終息したところで終わりではなくて、そこから後遺症がある人の再就職どうするのかがったり、その時に医療現場がどうなっているかわからないんですけど、疲弊しているのであったらどう立ち上げていくか、コロナに感染したことでいじめや村八分のような嫌がらせを受けた人をどう社会復帰させていくか、などそういうところまで解決して、やっとコロナが終

わったって言えるのかなと思っています。だから、社会福祉学科に所属する身として、今後自分がどう支援をしていけるのか考えていきたいなと思っています。

明角：私も生澤さんと似たようなことになってしまうのですが、アフターコロナの世の中で、被害を受けた人、傷ついた人をどうカバーしていくかっていうのは一番大事な論点になるかなと思います。例えばさっき言ったようにコロナに罹って村八分にされちゃった人、そのせいでそこから出ざるを得なかった人を、新たな土地でいいスタートを切れるようにどのようにアドバイスするか考えることはすごく大事だと思います。また別の点から言うと、テレワーク化がより進むかなと思います。直接会わなくてもいい業務っていうのは確かにあると思うのですが、それをやっぱり家でやることによって業務の効率化が進むのではないかなと思いました。

井村：僕なんかは、今テレワークのお話あったんですけど、内定いただいた会社は何社かあって、全部広告系の会社だったので、例えばみんなが知っているような40階建てのオフィスだったりとか、恵比寿ガーデンプレイスの中にあるオフィスとか、構えていて今まではほんとにキラキラしてるから働いてみたいよね、という感じで、優秀な人欲しいからっていう理由で、駅近でみんなが知ってるビルにオフィスを構えていたんですけども、今実際に聞いてみると、週3は在宅だったりとか、フルリモートで週5在宅でやってるって感じだったので、オフィスの必要性ってどうなの？っていうところはすごく感じます。でも実際に、例えば月・水・木は在宅でもいいけれども、週2は上司の人に報告だったりとか、社内会議とかをまとめてやっちゃうので、みたいな感じで、週1とか週2はけっこう来ているっていう印象はあるので、何だかんだ言ってもオフィスはけっこう大事なのかな、と思いつつあります。で、最近コロナになって、会社の人とかとも話してたのは、差別的な広告が最近SNSとかに多いよね、と。例えば、最近買い物に行かなくなってきたりとか、化粧品をわざわざ百貨店に買いに行かなくな

るとか、というときに、例えば広告に「デブだ」とか「二重顎」とか、差別的なやつをやって、それが「サプリメントを飲むと改善できますよ」みたいな、太ってることがよくないこととかそういう感じの、差別的な用語の広告が結構あると言っていたので、それを今、改善しようと。今までお店に買いに行った人が、オンラインでけっこう買いに行くようになったから、意外とそういう広告がすごく増えてるという感じで、コロナによって、そういう悪影響が身近なところで、SNSとかであるんだなっていうことはあったので、今後そういう社会の変化として、そういうところも改善してくれるとすごく嬉しいなと思います。

栗原：生澤さんにちょっと伺ってみたいことがあるんですがよろしいでしょうか。先ほどの教育関係のアルバイトのお話なんですが、以前行ったインターンで、学習塾なんですけど、できるだけもうオンラインに移行しちゃおうっていう話をされて、それで気になったんですが、オンラインと対面でどのような違いを感じられるのかなと思ひまして…。

生澤：生徒さんの受け止め方としては、オンラインの方がいいとか、対面の方がいいとかさまざまだと思うので、そこは本当に個人差だと思います。他の点でいうと、オンラインだと居場所がな

くなってしまふという声をききます。例えば、私の働いてる塾は浪人生が多くて、授業も朝から晩まである予備校なので、そこでの居場所がなくなってしまうという不安や寂しさを感じている生徒さんもいるみたいです。あとは添削をする際に、時間がかかってしまうということ。本来であれば先生に見せて添削してもらおうという直接的なやりとりができたんですけど、そういうのが一切できなくなって、まとめて郵送という形になってしまふ。封入作業が全部アルバイトに回ってきたり、添削を送るにしても、個人情報に関わる確認を細かく行う関係ですごく時間がかかってしまふ。こういう点からすると、その場で答えが返ってくる対面の良さがなくなってしまうと感じることはあったと思います。あと講師の先生は、生徒さんの表情を見ながら授業の中で表現方法を変えていくことが多いのですが、それが全くできない状態にあるので、本当に教えた内容が届いているのか不安に思う部分があったみたいです。

栗原：ありがとうございます。やっぱり居場所とかコミュニケーションという面で、対面の場が重要ってことと、郵送とかの手間が増えてしまふってことですね。

生澤：そうですね。

栗原：ありがとうございます。

学校とは何するところであったか

—コロナ禍における教育社会学オンデマンド講義から—

元 森 絵里子*

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、全国・全世界の多くの大学教員・学生が学習管理運営システム(LMS)やウェブ会議システムを利用した遠隔講義に半強制的に取り組みされることとなった。明治学院大学では、2020年3月27日、新学期を2週間遅らせて4月20日からとすると同時に、「遠隔授業」を導入することが決定された。2週間は、通信環境格差等に配慮し、オンライン双方向は推奨されず、オンデマンド配信をして課題を回収する形が原則とされた。当初は5月からの「対面授業」への移行も検討されていたものの、筆者周囲の教員間では4月冒頭時点ですでに、1学期間すべてオンラインになる可能性を視野に入れた状態で準備が進められることとなった。

幸か不幸か、筆者の春学期の担当科目の1つは「教育社会学」であった。通常、前半では、国民皆教育や学年制、一斉教授の教室空間が歴史的なものであることから説き起こし、教室構造や試験などの仕組み、年齢主義による同輩集団の形成などに触れながら、学校の社会化・配分機能や生徒役割、隠れたカリキュラム、生徒文化などの諸概念を講義していく。テーマは「学校とは何するところか」である。高等教育はかなり仕組みが異なるので、初等中等教育を中心に話している。ちなみに、後半はそれらの概念を踏まえて、現代にいたる教育問題とされる論点を紹介し、それらを見る視角を検討していく。

学校のあり方が激変して混乱している最中に、

「学校とは何するところか」！教室講義ではないのに教室秩序！しかし、内容を練り直す余裕など当然ない。通例通りの講義を配信しながら、筆者自身が学校とは何するところかを改めて心底実感しながら進める1学期となった。

本稿は、その右往左往を書き残しておく意図で記す記録である。

2. ドキュメント「教育社会学2020」

(1) いつもとほぼ同じつむりのコンテンツの提供

筆者の講義は、過去数年も、文字中心のレジメを配布しつつ、それにビジュアル資料を盛り込んで重要な点に色づけを施したパワーポイントを投影して、レーザーポインタで示しながら話すというスタイルをとっていた。授業後数日以内に、授業を咀嚼し次の回に備えてもらうようなコメント課題を旧e-learningシステムに書き込んでもらい、その内容を紹介しながら次の回を始めるということも行ってきた。教室に座っていたか否かではなく、コメント課題を規定回数提出しているかで試験受験を認めるとする一方で、どんなに提出が多くとも、試験が悪ければ相応の成績をつけるという形をとってきた。それが、大教室講義なりに、知識を生きたものとし考える力を身につけてもらうために、現時点の筆者の能力と時間で用意できた仕掛けであった。コメントの往復は自分で思考するための仕掛けという意図であり、成績は、態度や主体性ではなく、論述主体の期末試験重視でつけると明言していた。

このような講義であったため、課題の回収を要件とせねばならないオンデマンド講義への移行に

* 社会学部教授(社会学科)

際し、大きな変更を行う必要はなかった。原則として例年相当のパワーポイントに音声吹き込んだ動画とレジュメをオンデマンド配信し、コメント課題を例年通り集め、興味深いコメントに色を付け、手短なコメントを書き込んだファイルをフィードバックした。教室での教師／生徒の関係について、実際の教室で実演・実感しながら学ぶということはできなかったものの、筆者としては「いつもどおり」にかなり近いコンテンツを提供しているつもりだった。しかし、学生の反応はいつもとは大きく異なっていた。

(2) 期待以上の課題応答

初回講義をアップロードしたそばから、一気に閲覧数が跳ね上がった。短くてもいいと公言すると、レジュメをサラッと見ただけで適当に1文書いて逃げる学生がいるので、字数は「任意」としているのだが、たまたま本年度から導入されたLMS (manaba) の仕様を把握しきれていないという理由でコメント欄を大きくしたのもよくなかったのか、1000字級のコメントが続々と返ってきた。どの授業も同様のようで、教員間では、授業に飢えていたのだろうか、熱心なコメントが多くてよいという話も出ていた。

ただ、すぐにそうではないことが見えてきた。筆者の講義では次回に反映させる第1次期限のほかに、最終課題(期末試験の代わり)受験条件のための最終提出期限を学期末近くに設けていたのに、途中から履修登録した学生が今から課題を出せるか問い合わせしてくる。小テスト機能を使っている先生は、復習を兼ねて受験したかどうかだけチェックすると述べているにもかかわらず、漢字か平仮名かで自動採点で×になった学生から、○にならないか問い合わせが相次いだそうだ。

教員側から見えるのは、提出物の流れと稀に個別の問い合わせをくれる学生の様子だけではある。その向こうに想像できたのは、オンデマンド講義という前代未聞の状況に不安になり、学習の内容そっちのけで、指示もろくに読まずに、先生への提出物は細かくチェックされてすべて採点されていると身構えている学生が相当数いるらしい

気配だった。通常でも、インストラクションを聞かず、授業のレジュメも読まず、適当な質問をする学生や、課題の期日後提出を打診する学生はいるが、それとは雰囲気異なっている印象があった。

5月にはすでに、各講義の総和としての課題量の調整がうまくいっておらず、学生が課題に追われているという問題が、SNS等では話題になっていた。実際に、教員のほうも、さしたるインストラクションしてもらえないまま始まったオンデマンド講義の要領がわかっておらず、毎回数千字のレポートを書かせるような講義もあっただろうし、これまで座っているだけでよかった大半の授業にまで、何らかのレスポンスが要請されたこと自体が学生には負担であったかもしれない。しかし、対面状況でもないのに、集団ヒステリーかのように学生が「課題」に過剰に反応しているムードはあった。

(3) パノプティコンへの共感

折しも、5月の教育社会学では、学校は、教室の構造のみならず課題等を通して、教師／生徒＝見る／見られるという関係がつくられることで成り立っているという話をしているところであった。ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』(1977)を参考に、近代監獄として構想された「パノプティコン(一望監視装置)」の原理が学校にもあてはまるという説を紹介し、意見を集めていた。

毎年、一定の反響があるところだが、通常の学校のみならず、今の状況はまさにこれだという反応が相次いだ。パノプティコンとは、大まかにまとめれば、監視塔に看守がいるかどうかはわからないが、いるかもしれないと思わせる建物の構造をつくることで、囚人に自発的に規律に沿った行動をさせるという仕組みである。一人ひとりの学習状況や課題が事細かに記録されているであろうLMSで、学生側からは教員が何をしているか見えていないため、課題を通してやる気を見せておくという形でふるまっている自分たちの状況は、まさにいるかいないかわからない看守に規律に従っていることをアピールしている状態だというので

ある。

看守ポジションであるはずの教員（筆者）からすれば、学生の学習状況は、manabaの閲覧記録と課題の提出記録という形でしか見られない。そして、小中学校とは異なり、そもそも百人単位のクラスで一人ひとりを監視して規律訓練しようという気もない。全講義が課題を回収するようになったのは、単にそれがオンデマンド型講義の成立の制度上の要件だからである⁽¹⁾。だが、学生側には、LMSを通じたオンデマンド講義と課題の回収という仕組みが、そのような一望監視装置に見えることが察せられた。

(4) 二極化する取り組み状況

そうこうしているうちに、緊急事態宣言が解除され、小中高で対面授業が再開されていった。大学だけが再開せず、学生が孤独に課題に追われていることが、SNSで話題となり、マスメディアでも取り上げられるようになった。一部対面授業を再開する大学も出てきていたものの、本学は春学期はオンライン講義継続と決定され、入校制限が解除されたのも7月であった。

教育社会学では、6月以降、課題提出数が急下降していった。筆者は春学期、学生の通信環境や万が一の感染可能性を考慮して課題の期限には配慮をせよという但し書きをかなり真に受け、先述のように毎週の課題の最終期限は学期末としていた。そのため、全講義に手が回らなくなったり、オンライン講義継続の気力がなくなったりした学生は、教育社会学を後回しにしたと思われる。他方で、出し続けている学生は、相変わらず強迫的に何行も書き続けている。第1次期限までに回収されたコメントは開示しているので、提出数が急減していることは、少し注意して見ればわかるのだが。

(5) 学生・教員間の観察のおぼろげな共有

このような状況に筆者自身も息苦しさを覚え、現状に関する振り返りを授業冒頭に余談的に吹き込んでみたりするようになった。6月末には、遅ればせながら、この授業の課題はこういう意

図で、何百字も書くことは期待していないというメッセージに加え、授業とは別に「オンライン講義をやっていると思ったこと①②」という文章を掲載しておいた。看守に擬されている教員から見える光景として、こちらの期待以上にがんばりすぎている学生が目立つ一方、毎週の学習という自己管理を放棄した学生も、例年より多いという事実を示した。そして、学生諸氏が高校までで学校的なふるまいを身につけ、課題＝評価されると「過剰社会化」されすぎているように見えるが、友人同士のインフォーマルなコミュニケーションが欠落していることや、教員の様子が見えないことが、これを助長しているのではないか、つまり、知識伝達以外の要素や授業のインフォーマルなコミュニケーションといった、学校が実は持っていたバノプティコンらしからぬ部分がそぎ落とされているのが今の状況ではないか、という仮説を書いておいた。ついでに、教員も学生の様子が見えなくて不安なのだというぼやきとともに。

これにより、教員側の雰囲気はわかって肩の力が抜けたと書いてくる学生に加え、コメント課題の予備欄に自分なりの分析を重ねてくる学生が現れ、一部の学生と筆者の間で、コメントとコメントへの応答というメタ講義的なコミュニケーションが展開されることとなった。春学期終了時点までに、現状認識のゆるやかな共有が教員と履修者の間で成立していったという印象を持っている。

その間、授業を理解するという面では、動画を巻き戻したり、止めてインターネットで調べものをしたりする形や、コメント課題を真剣に考える過程でより深く勉強することになったという意見があった一方、時間割が曖昧で友人との流れで行動できない分、通常以上に自己管理が必要とされているという意見や、オンデマンド講義では教員の様子も友達との情報共有も限定的にしかできないことが、一方的に管理され課題だけをやらされている気分につながっているという考察が出てきた。

そのころにはすでに、授業は対面かオンラインかという問題設定が誤っているのではないかと、授業はオンラインでいいが、友達とは会いたいの

はないか、学校には教育機能以外に社交機能があるという類の意見がSNS等で頻繁に見られるようになっていた。だが、学生との間接的なやりとりからは、単に授業外に友達と交流する時空間(学校の機能)がなくなっただけが学生側の息苦しさの理由ではないのではないかと思われた。かなり一方向性が強い大教室講義ですら、教室授業という時空間の存在やそこでの友人との些細なコミュニケーションが、多様な学生の学びを明に暗に支えており、それが失われたインパクトは小さくないのではないかと推察された。『『今から先生が試験の説明するよ』と起こしてもらえないのは痛い』(改編のうえ要約)というコメントは至言である。

3. 対面の学校はパノプティコンなのか

(1) パノプティコンは必ず失敗する

一定年齢の年少者が1日の相当の時間通い、ある程度枠にはまった生活をする学校という制度＝施設を説明する語として、フーコー(が紹介したベンサム)の「パノプティコン」やアーヴィング・ゴッフマンの「全制施設」(ゴッフマン 1984)の概念が用いられることがしばしばある。とりわけ1970～80年代の日本では、高校教育までがユニバーサル化し、閉鎖的な学校空間での管理教育やいじめ・不登校、偏差値で序列化し過熱した受験競争などの学校問題が耳目を集めていた。規律権力論は学校化批判、近代教育批判の文脈でさかんに取り上げられた。

だが、しばしば誤解されているが、フーコー『監獄の誕生』が描き出したのは、「パノプティコン」と呼ばれるある種の空間の配置が、自ら服従する主体(subject=服従=主体)をつくり出す作用は万能ではないということである。(その点は筆者の講義では一応は説明している。)単なる法律違反者への罰則を超えた規律訓練(矯正)という技術は、間接的に「非行者」を生む。規律への反発を掻き立てられたり、監獄で犯罪を教え合ったりといった逸脱を生む点でパノプティコンは「失敗」を宿命づけられている⁽²⁾。

それでいえば、空間としての学校は、監獄同様に、自律的にルールに従い学ばいい子をつくりだ

すと同時に／それ以上に、友達と騒いだり適度に手を抜く方法を教え合ったりする場にもなっている。通常の対面状況の学校よりもLMSを介したオンデマンド講義のほうが理念型としての一望監視装置に近いと感じられる学生が一定数いたのは、授業場面においてもこのような「失敗」こそが重要な役割を果たしていたからであろう。

(2) 解釈的アプローチが投げかけるもの

学校という場の仕組みをめぐるのは、フーコーと同時期に流行した「新しい教育社会学」(解釈的アプローチ、ミクロ社会学)の文脈で、教師が生徒に一方的に教え込むという常識的理解が問い直されている。生徒(子ども)も教師(大人)同様に社会的行為者であり、状況を観察して行為する力(エイジェンシー)がある。ただし、そこに教師と生徒という非対称の役割関係が入り込み、生徒も生徒役割を演じながら教室秩序が成立していく。そのように状況を読みかえて分析するのである⁽³⁾。それは、学校に子どもを社会化し、社会を再生産する機能を過剰に見出す構造機能主義的な発想を問い直し、かつ、教室秩序の持つ社会性、権力性を明らかにするものであった。さらに、生徒戦略研究と呼ばれる、教室秩序における、教師が代表する学校文化に対する生徒集団の同調や抵抗の様子を明らかにする諸研究もある。(これらの点も講義ではちりちりと話している。)

これをもう少し敷衍すれば、まさに教室という時空間においては、教師が生徒を観察するのみならず、生徒も教師を観察しているのである。監獄の比喩でいえば、看守(教師)は囚人(生徒)から丸見えなのだ。そして状況に応じて、生徒は先生を甘く見て騒いだりすれば、先生の目の前でいい子のふりもするのである。その戦略自体が、生徒集団のなかで学習されたりしていく。さらに、教師と関わり、見守ってもらっていることに喜びを感じるタイプの生徒もいる。

オンデマンド講義は、生徒集団のインフォーマルなコミュニケーションだけでなく、生徒が教師を観察することも難しくする。この先生は厳しそうなのか、やさしそうなのか、手掛かりが異様に

少ない。とはいえ、大学生ともなると、すでに学校のふるまいは身につけている。コロナ禍以前から、宿題などの状況を通して、今は目の前にいない先生の目を意識しつつ自律的に学習するしかないことを体得している。そのため、今回の事態に際しても、まったくの手探りで新たな秩序がつくられるのではなく、それぞれの学生がすでに身につけた既存の学校イメージにヒントを求めながらオンデマンド講義に対応することになる。その結果残ったのが、まさに理念型としてのパノプティコンかのような、教員に監視されているかもしれないからやらねばならないという気分なのではないだろうか。そして、それを監視とも思わず自己管理して学習できる学生も、抑圧性を感じながらこなす学生も、自己管理を放棄して脱落していく学生もいる。「オンライン講義は〔コロナ禍以前からの〕規律権力がうまく働いているかどうか試される場」(改編のうえ要約)という考察は、的を射ている。

4. おわりに

実態としての学校は一望監視装置ではなく、まさに実態としての監獄がそうであったように、様々なインフォーマルなコミュニケーションを生んでいる。さらに、教室という空間において、教師と生徒は監視する／されるという一方的な関係ではない。そこでは、役割関係としてパノプティコンと呼べる原理を組み込んではあるが、実際にはモデル上の看守と囚人よりはるかに複雑なコミュニケーションがなされている。オンデマンド講義という空間性を欠いた学校でパノプティコン論への直感的な共感が集まるという事実が逆説的に可視化したのは、これらの当たり前といえは当たりの事実であった⁽⁴⁾。

コロナ禍が続くなかで大学が対面授業を再開すべきかについては、未だ様々な議論がある。そもそも大学という高等教育機関が、小中高までと同じように、多様な役割を果たす必要があるか否かは議論の必要があるところだろう。とはいえ、高等教育までもユニバーサル段階にある現状では、大学生が「生徒化」している点は否めず、そのニー

ズを無視して教育機関としての使命を果たせるのかは一概には言えない。

ただ、同時に、オンライン講義が継続される中で、秩序が再編成されていくであろうことも容易に予想できる。すでに秋学期に入り、人の行き来の制約が減り、一部対面講義も再開されたことで、学生間での情報共有も進んだように思われる。教員側も課題量の調整を呼びかけ合ったりした。筆者も後期の講義では課題の意図をかなりしつつ動画に吹き込んだと同時に、教員を可視化するために、動画に「ワイプ」をつけてみることにした。課題の意図を理解することで、課題を押し付けられ授業を詰め込まれているという感覚が低減したというコメント、先生の顔はなくても学習はできると思っていたが思いのほか安心感があったというコメントが印象的であった。コメント課題では、過剰にがんばってコメントを書く学生はいなくなり、面白がってコメント課題で能力を見せつけようとする学生、教員とささやかなコミュニケーションをとろうとする学生、適度なさぼり方を覚えた学生、脱落傾向のある学生が、通常授業と同程度の割合でいるという印象を持っている。

コロナ禍が収まったあとも、オンライン講義を一部恒常的に取り入れる大学が増えていくかもしれないが、その時、学生・教員双方が持ち込む学校イメージと、教室ではなくオンラインLMSという装置との間でどのような秩序に到達するのは、もう少し見守っていく必要があるだろう。

5. 補章——学生による分析

2020年度春学期「教育社会学」では、試験代わりの最終課題で、通常試験同等の記述問題に加え、よければ加点するおまけの問題として、オンライン講義を教育社会学で学んだ知識で分析せよという問題を課した。それまでのやりとりを踏まえて書かれた考察のごく一部を、わかりやすい言葉に要約・改編して紹介する。数年後、この考察がどう見えるのだろうか。

・パノプティコン型監獄以上にパノプティコンのような学校になっている

学校とは何するところであったか

- ・ 結局、授業が詰め込み型の教育に感じられる。
- ・ 対面以上に自主性や自律性が求められる
- ・ いつも以上に生徒役割を果たそうと追われてしまう
- ・ 様々な交流や知識共有の場としての機能が失われている
- ・ 規律権力が通常以上に作用する学生と作用が抑制される学生とで二極化する
- ・ フレキシブルな学習が可能となり、いじめなどの改善にも繋がる
- ・ これまで大学の授業や環境に適応できなかった学生に機会を与える可能性がある
- ・ 他の学生の存在が見えづらく、家庭の影響が強くなり、文化的再生産が起こりやすくなる
- ・ 勉学のみが重視されるため、文化的再生産に対抗できる
- ・ 社会性や道徳性、新学力観で強調される能力の習得には向かない
- ・ 社会性習得より専門的な学習を旨とする大学はオンライン講義でよい
- ・ 新たなツールは生きる力などを身につける上で大きな役割を果たす可能性がある
- ・ 個人の能力に即した教育が可能になる
- ・ 新たな意味で「教育の正統性」が問われる

〈注〉

(1) 大学設置基準において、教室対面型授業以外のオンラ

イン講義は、平成13年文部科学省告示第51号に基づき、同時双方向型か、オンデマンド型ないし課題提示型で、「インターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答による十分な指導を合わせ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの」と定められている。課題は、各教員の意図とは無関係に、この要件を満たすために毎回授業に設定されているのである。

- (2) フーコー自身の力点は、そのような「失敗」も含めて許容される逸脱と排除される逸脱の範囲を示すことで、規律化し自由で自己管理できる主体であることのモデル（権力）が社会を包み込んでいくことの方にある。このかなり強い社会モデルについては、賛否があろう。
- (3) たとえば、Mackey (1974) が有名である。
- (4) なお、少人数ゼミのオンライン同時双方向型の授業だと比較的対面に近いが、それでも学生間の私語や筆談にあたる行為がしづらい点がやはり学びを難しくしている印象がある。学問的対話の訓練を受けた大学院生の場合とはともかく、それを身につける途上の学部生は、やはり有象無象の些細なコミュニケーションに支えられて、それを身につけていくのであろう。

〈文献〉

ゴッフマン, I., 1984, 『アサイラム：施設収容者の日常世界』（石黒毅訳）誠信書房。

フーコー, M., 1977, 『監獄の誕生：監視と処罰』（田村淑訳）新潮社。

Mackay, R. W., 1974, "Conception of Children and Models of Socialization," R. Turner ed., *Ethnomethodology*, Penguin, pp.180-193.

第2回座談会

開催日時 2020年8月22日（土）10：00～

参加者 石川さやね（社会学科3年）

鈴木 菜々（社会学科3年）

鈴木穂乃花（社会学科1年）

山田 梨穂（社会福祉学科2年）

主催者 石岡里佳子（社会学科3年・学内学会）

東野 好花（社会学科2年・学内学会）

澤野 雅樹（社会学科教員）

——まず、いつからコロナウイルスを意識し始めましたか。意識し始めたタイミングなどはありますか。

石川：私が意識し始めたタイミングとしては3月、4月くらいで、それまではそんなに深刻に受け止めていなかったのですが、お父さんから、「うちにはおばあちゃんが住んでいるからちゃんと自覚を持って行動しなよ」と言われた時から、「私だけの問題ではないんだな」と思って、コロナを意識し始めるようになりました。

石岡：家族のことを考えたということですね。ほかにはありますか？

山田：私は2月くらいまでサークルの活動があったのですが、大学の場所が横浜じゃないですか。それで、横浜にダイヤモンドプリンセス号が停泊したときに、そこに乗船している方が公共交通機関を使って自分の住んでいるところに帰っていると聞いたときに、母親から「横浜の近くだったら、気をつけて帰ってきてね」という風に言われた時から意識し始めたので、2月中旬から意識するようになりました。



鈴木(菜)：私は課外活動が出来なくなった3月頃から、深刻に受け止めるようになりました。

東野：具体的にいつ頃から活動は出来なくなったのですか？

鈴木(菜)：3月上旬から一切学校で活動が出来なくなりました。

鈴木(穂)：私は2月の終わりごろまで大学入試があったので、入試の終わりにタクシーなどで帰るのですが、その時に少し不安に感じる事があったり、入試終わりに志望校の大学からホテルに帰るまで歩くときに不安を感じた時がありました。

——生活面で変化したことはありますか。

石川：私は、家にいる時間が増えて家族と一緒にいる時間が増えたことです。今まで姉が大学院に行っていて、ずっと研究で帰ってこられなかったのが、緊急事態宣言が出てから帰ってこられるようになって、その時に徐々に家族みんなで揃い、家族と話すようになりました。

山田：私は、私の姉が仕事に行っているのですが、自粛で家にいることが多くなり、父も東京に毎日お仕事に行っていたのですが、緊急事態宣言が出てから今までずっと家にいるので、春休みや夏休みは家族4人ずっと家にいる状態になったのが変化ですね。

鈴木(菜)：私自身が2月末まで家にいなかったことが多かったので、急に家にいるようになって生活が変わりました。

鈴木(穂)：私も家で過ごすことが多くなりましたが、家で過ごすことが多くなったからこそ早寝早起きなど規則正しい生活をしないといけないなと思い、早寝早起きを心掛けるようにしています。

——この生活の変化によって悪影響などはありましたか。

石川：個人的には、家で課題など、やることをするようになった分、あまりメリハリがつかなくなった面はあります。ずっとだらだら作業をしてしまって、そこがマイナスな点かと思いました。

山田：友達に会えない、習い事やサークルにも行けないということも悪影響だと思います。

——アルバイトはしていますか。また、新型コロナによってアルバイトに何か変化はありましたか。

山田：私は千葉から東京にアルバイトに行っているので、緊急事態宣言の時などは東京に行くのが怖くてバイトをしていませんでした。私は商業施設の中で働いているので、今でもシフトを減らしたり、たくさんシフトを入れたとしても、売り上げが良くないため減らされます。そこは経済的にも大変でした。

石川：私は100円ショップで働いていて、他のもっと大きい店舗だとお店自体が閉まっているのですが、私のところは営業時間を短縮する程度で、むしろ通常より混んでいました。

鈴木(菜)：私は短期で申し込んでいるものが多いのですが、2月に申し込んだ短期バイトには「来なくていい」と言われて、60%ほどお金だけもらえました。

澤野先生：100円ショップは私の近所でも列を作っていて、ものすごく混んでいた印象があって、緊急事態宣言の最中や宣言が解除された後も混んでいた気がします。

もう少し具体的に100円ショップの様子を教えてくださいいただけますか？

石川：マスクやキッチンペーパーに個数制限がかけられて、最初は一人1点までだったのが、一家族1点までになっていたり、距離をとって並んでいるというのもあって、今まで見たことも無いほど長い列ができました。あと売れるものとしては、家にいる時間が増えたこともあり、園芸用品や、収納グッズが売れていました。

澤野先生：飲食系のバイトの様子としては、お客様が来なかったのか、時間的に集中して来るのかなど、どのような状況でしたか？

山田：お客さんはほぼ来なかったです。夏休みやお盆のシーズン売り上げは4分の1くらいだったと思います。テイクアウトやお土産も売っている

のですが、お土産も普段よりは売れないですし、テイクアウトも対策はしっかりしているのですが、敬遠される状況です。

澤野先生：売り上げに関してかなり深刻ですね。

山田：最近は、だんだん売り上げは上がってきています。

澤野先生：人が戻ってきて、山田さんの危機感はどうですか。みんなの危機感が薄れている感じなのか、山田さん自身も危機感が薄れているのか、逆に人が増えて怖いと思うのか等、どうですか。

山田：私が働いているところで、もしコロナが発生したら…という危機感があります。自分のお店だったら営業停止しなければいけないですし、商業施設の中で発生したとしてもそれがどんどん広まっていくので、バイトに行けなくなるし、行きたくないなと思います。

澤野先生：他の方もバイトの状況を教えていただきたいです。鈴木穂乃花さんはどうですか？

鈴木（穂）：私はまだバイトをしていなくてわからないのですが、買い物に行くときなどに思うのは、緊急事態宣言の時よりは人が増えていると感じるので、お店に行くときは自分がきちんと対策をしないといけないなと思います。

澤野先生：どんな対策をしていますか？

鈴木（穂）：常にアルコールや、マスクの替えを持ち歩いていたりしています。

澤野先生：新型コロナに関して何が怖いですか？

鈴木（穂）：自分が感染源になって、関わった人に辛い思いをさせてしまうのが一番怖いです。

澤野先生：外に出るとマスクをしている人が大量にいるじゃないですか。マスクにはどのくらい予防効果があると思いますか。例えば、人気（ひとけ）がないからマスクを外している人たちに対して、マスクポリスみたいなのが発生していて、「マスクをしていない人は人間じゃない」というような扱いをする人がいる一方、全然不用意極まりない人もいないじゃないですか。このように、ものすごく不注意な人や、注意しすぎる人もいる中で、どのように気を付けていますか。どちらかという、感染予防というよりは、変なエチケットみたいな感じになってしまっている気がします、石

岡さんはどう思いますか。

石岡：私は、マスクをしていなかったら冷たい目で見られるので、それを防ぐためにマスクをしているというのもあります。

——オンライン授業を受けてみて、どうでしたか。

石岡：私は、本来ディスカッションやプレゼンをする授業があったのですが、オンラインになったためそれらは出来なくなり、課題が提示されてレポートを出すという作業だけになってしまったので、その点が一番期待していたものではなかったなと思いました。

澤野先生：他の授業で、Zoomなどで行った授業はありましたか？

石岡：ありました。語学系などです。

澤野先生：Zoomでの授業はどうでしたか。

石岡：ブレイクアウトセッションでグループを作って行ったので、それはあまり対面と変わらず出来たので、良かったです。大人数の授業もZoomで行ったのですが、チャットを使ってリアルタイムで質問が出来たので、普段よりも質問が出来たと思います。

澤野先生：なるほど。他の方は何かありますか。

東野：私はメリットとしては、Zoomで授業を行うことによって遠くにいる人を簡単に呼べるので、今までなかなか呼べなかった方を呼んで授業を行ってくださった先生がいて、様々な方の話を聞けたので、その点では良かったと思いました。デメリットとしては、通信回線の影響で話が聞き取れなくて、もう一度聞き直す場面もあって、時間がかかってしまいスムーズに授業が進まなくなってしまったので、直接話し合った方がもっと議論が弾むかなと思いました。

澤野先生：今日は通信回線が良いですね。全員がマイクをオンにしているのに、ハウリングが起きないのは結構すごいですし、日々進化している感じがしますよね。

ゲストが呼びやすいというのは面白いですよ。僕が感じたメリットとしては、多少体調が悪くても出席できるのがメリットだなと思いました。

し、出席率が高かった印象でした。例えば、心の病で大学になかなか行けないという人もZoomであれば参加できる、顔出ししなくてよいなら声だけの発言で参加できるというパターンが多かったと思います。他の方も聞かせてください。

鈴木 (穂) : 私は1年生になっていきなりZoomでの授業だったので、レポートや課題の出し方も全然わからない状態で、最初は不安の方が大きかったのですが、Zoomでは聞きたいことがあったときにすぐ先生に聞ける点が良いなと思ったし、同じクラスメイトの顔が遠いけどつながっている点ではとても心強かったです。

石岡 : 今年の1年生は、Zoomの授業でしか学生と出会う機会がないですね。

澤野先生 : まだ対面の授業は一度も経験してないわけですね。鈴木さんの要望としては、毎週対面の授業があった方が良いのか、あるいは対面の授業に参加したい人だけ参加するべきなのか、あるいはまだオンライン授業で進めるべきなのかなど、どうですか？

鈴木 (穂) : 今はまだ1度も大学の雰囲気とか授業の雰囲気がわからない状態なので、毎週とまではいなくても2週間や3週間に1回は授業を大学で受けたいなという思いはあります。

澤野先生 : 難しいですね。クラス全員が一つの教室に集まってしまうとまさに3密の状況が生まれてしまうので、どういう風に集まればよいかとか、例えば発表するグループだけが来るとなれ

ば、教室に4、5人、残りはZoomになるので、それほどリスクなく大学に登校する経験は出来るかなと考えたりしています。もし、一部を対面でと提案する先生がいたとしたら、鈴木さんは来てみたいのか、来るかどうかは自分の意向に委ねてほしいと思うのか、どうですか。

鈴木 (穂) : 私の個人的な意見なのですが、私としては発表するグループだけ来るとか、少人数での対面があったほうが「もっと頑張ろう」と思えると思います。

石岡 : 今の1年生は一度も横浜キャンパスに通わずに白金キャンパスに移る生徒が出てくる可能性があるということですね。

澤野先生 : そうですね。僕としてはとりあえず一度でもよいから横浜キャンパスを歩いて教室の中に入ってみるという経験をさせてあげたいですね。ただ全員を毎週登校させるのは無理だし、暴力的ですね。だから、そのあたり石岡さんはどう思いますか？どのような形で実現させるのが適切だと思いますか？

石岡 : 行きたい人は行ってもいいし、行きたくない人は行かなくてもいいという風に変更できる環境があればよいと思います。

澤野先生 : 他の方々はいかがですか。学年によっても印象が違うと思いますし、特に鈴木穂乃花さんのように1年生の場合、1度も学校に行っていない、「果たして大学生になったのだろうか」という気分で1年の半分が終わってしまった人もい



るはずですよ。それと2、3、4年生とでは、かなり印象が違と思いますので、学年ごとに聞かせていただきたいです。

石川：個人的には、横浜キャンパスも白金キャンパスも行きつくしたので、もういいかなという気持ちもあるんですけど、就活に関してキャリアセンターにも行けないし、友達と情報共有が出来ないので、そういう面で不安があります。

山田：私は個人的に、1年生は大学受験と被っていて、大学の校舎にも行けなくて、3、4年生は就活があるので、2年生が一番影響が少ないのかなと思います。しかし、私は社会福祉学科で、2年生から約半分の学生が白金キャンパスで授業を受けることになるのですが、まだ白金キャンパスで授業を一度も受けていないので、その点では寂しいなと思います。

澤野先生：福祉学科は必修の授業は対面である程度実現すると思いますが、楽しみですか？

山田：楽しみです。まだ会ったことのない人もいるし、春学期中Teamsで授業はやっていたんですけど、対面ではないから知らない人同士は敬語になってしまうんですね。質問も全然活性化しないし、プレゼンもあったのですが、プレゼンが終わった後に先生が誰か質問はありますか？と聞いてもみんな黙っていて、質問があったとしても敬語で話して、堅い雰囲気が終わってしまうので、秋学期に対面で会えるのは楽しみですね。

澤野先生：Teamsでのオンライン授業は活性化しなかった感じですか？

山田：あまりしなかったですね。

澤野先生：教育効果もあまりなかったですか。

山田：でも、プレゼンを1人1回ずつしたので、そういう意味では教育効果はあったのかな…。

澤野先生：鈴木菜々さんはどうですか？

鈴木(菜)：私のゼミは15人で、Zoomで行っていて、授業はできたんですけど、一度も会ったことがないので仲良くなれないというか、授業内の会話はできるんですけど、他人という感じがします。多分、先生もそれは感じていて、授業が終わった後にZoomを開いてくれて会話できるようにしてくれるんですけど、それをするのもみんな、早

く終わらないかな…という感じで…(笑)。

澤野先生：先生の好意が全然伝わっていないわけね(笑)。教員抜きにして、ゼミ生だけでZoomでやろうとしたことはない？

鈴木(菜)：ないです(笑)。

澤野先生：そうか～。どうしてそうなってしまうのか僕もよくわかる気がしていて、ゼミコンパが出来ない、ゼミ合宿が出来ないとなると、それに向かって何らかの形で親睦をはかろうとする機会がごとごとくなくて、できたとしてもZoom飲み会とか、たいして授業と変わらないような空気の中で飲み会をやるしかないの、親近感を抱く機会がないままここまで来てしまっていますよね。先生の好意を離れて皆さんで1回、Zoomで集まるというような機会を設けるしかないのかな…。

石岡：難しいですよ。多分ゼミ生だけで集まっても話が弾まないで終わってしまうと思うんですよ。

澤野先生：10人程度だとそうかもね…。たくさんの人が全員集まって話をしようとなると、それ自体が緊張感を持って臨んでしまいますよね。3、4人ならもうちょっと楽なんですけどね。どうすればよいですかね。

石岡：私はゼミでLINEグループはあるんですけど、そこも連絡事項だけになってしまっていて…。

澤野先生：ゼミ合宿は大事ですよ。それに向かってというのと、その中でという両方があるので、それがないのはきついですよね…。

——オンライン授業になってからの課題については、どうでしたか。

石川：私は、「オンラインでもここまでちゃんとやってくれるんだ」と感動した授業があったんですけど、全部の授業で(感動した授業のように)クオリティが高いと、バランス的に課題の量も結構大変なのかなと思います。私の授業で多かったのは、資料を読んで400字程度のレポートを書いてくるという課題が多くて、それらを全部一生懸命やろうとすると、キャパオーバーになってしま

うと思います。あと私のゼミの先生が「みんな課題大変だろうから」と言って、課題を2週間に1回にしてくれたり、気を遣ってくれる先生も割といました。

鈴木(菜)：レポートを書くのに、図書館で本を借りることは出来るのですが、実際手に取って見ないと、どういう内容かがわからないので、結局使うのは、インターネットで調べた情報が多くなってしまうことが、レポートを書く上で難しいなと思いました。

石岡：レポートが多くなったけど、本が借りづらいというのはありましたよね。

澤野先生：レポートを出す側の配慮の問題ですよ。図書館に行って本で調べないとわからないのだけど、そもそも外出できない中でそれを指示されちゃうと話にならないという話は聞いたことがあります。だから、課題の提示の仕方が適切かどうかという点についてもお聞きしたいです。不適切な課題の出し方とか、適切な課題の出し方とか感じたことを言っていただけるとありがたいです。

山田：私も授業の中で1つレポートが出されて、そのレポートの参考文献が本だったのですが、その先生は、国立図書館のネットで見ることが出来る本を指定してきたので、今では当たり前かもしれないですけど、1年生の時は実際に図書館に行って、その本を探してその本を借りて、それを重いのに持って帰って、読んだら返してという段取りがあったけど、それが省かれたという点では、今考えるといい課題だったなと思いました。

澤野先生：それはどうやってそこにアクセスしたらいいのかというノウハウまで教えてくれたということですよ？

山田：それは自分で調べる感じでした。あと、掲示板に質問が出来ると思うのですが、すぐに返って来ないことがあって、1週間後に返事が来る先生もいたので、ちょっと遅いな…と思いました。

澤野先生：manaba(註：大学のポータルサイト)の掲示板は活用できなかった？

山田：私たちはしたんですけど、返してくれない先生もいましたね…。

石岡：掲示板の返事が授業の数時間前にしか返っ

てこないことがあるので、授業前にしかチェックしていないのだと思います…。私も質問があるときには、一応掲示板に書き込むんですけど、(返ってこなかったら)どうしよう…という気持ちになります。

澤野先生：掲示板だとみんなに自分の質問が知られちゃうのが嫌だという人もいるのかな？

石岡：それはありますね。

澤野先生：その他オンデマンドの授業で思うところ話してください。

石岡：1年生の鈴木さんはどうですか。

鈴木(穂)：オンライン授業で特に不安とかはないんですけど、課題が多い授業があったので、1日座って課題をやっていたら1日が終わるみたいな日があって、そういう時は正直に言うのと疲れるなと思うことはあります。

澤野先生：1年生だと一般教養の授業が多いと思うんですけど、課題が多いという印象は、どういう授業で感じるのか教えてください。

鈴木(穂)：どちらかというと言学系の方が課題が多くて、英語の授業で発音の課題を自分で録音して提出するものがあったんですが、最初は何に録音したらいいのかも分からなくて、それを先生に聞いてみたり…戸惑うことの方が多かったです。

澤野先生：対応はしてもらえましたか。

鈴木(穂)：はい、対応はしてもらえました。

澤野先生：講義科目はどうでしたか。

鈴木(穂)：講義科目はリアルタイムのものよりは、先生が配信してくださった動画を見るものや動画ではなくて資料を読んで感想を書くものも多くて…「ここが分からない」というところをリアルタイムじゃない授業では(先生に)聞きづらいというのが正直なところですね。双方向の授業だったらリアルタイムでチャットとかで分からないところを言えるんですけど、資料を読んで書くだけの授業だと聞けなかったです。

澤野先生：資料が多いと何を見ればいいのか分からないという声があるんですけど、そう感じていますか。

鈴木(穂)：それもあってんですけど、予備知識を必要とする授業があって、それは予備知識として何

を入れたらいいのかわからなくて、どうやってこの資料を読んでいけばいいんだろうという不安がありました。

澤野先生：資料だけの授業はやはり不親切な印象を持ちますか。

鈴木(穂)：そうですね…。

澤野先生：おそらく資料を配布する側にはその予備知識を前提に配っているところがあって、講義だったらフォローアップができるはずなんですけど、それができなくて一方通行の形が出来上がっちゃっている感じなのかな。

鈴木(穂)：そんな感じですね。

澤野先生：やはり語学とかはクラスがありますけど、講義のものは一方通行になりやすいかもしれないですね。

——コロナを経験して成長できたと感じたことはありますか。

石川：Zoomで話し合う時とかブレイクアウトセッションとかで話し合うんですけど。私は授業内の話し合いであまり発言できる方ではなかったのですが、やはりみんな慣れなくて、誰かが発言しなきゃってなった時に自分から積極的に発言するようにはなりましたね。それが成長できたところです。

鈴木(菜)：レポート書くことが多かったので今までよりは文章を書くことに慣れたと感じました。今までのリアクションペーパーとかだと時間内に書かないといけないというのがあったんですけど、時間制限がなくなって文章の構成とかも考えられるようになったと感じました。

山田：鈴木(菜)さんと同じになってしまうんですけど、自分の感想とか意見を書く機会が多くなったので、それにじっくり時間を掛けられたというのはやはり大きくて、自分の意見を持つという意味で成長できたのかなと思います。あとは、石川さんと同じようにサークルでリーダーシップを取ったり、進めなければいけない時に、やはりオンラインだとシーンとなくなってしまいうんですけどそこで進める勇気はついたのかなと思います。

鈴木(穂)：私は元々積極的に自分から発言する

タイプではなくて、高校の時も分からないことがあっても質問するタイプではなかったんですけど、大学でオンライン授業をやるようになってからは、疑問に思うところや、もっと知りたいと思うところが高校の頃よりも出てきたので、先生や友達に自分発信で質問できたのは成長できたと感じています。

石岡：オンラインになったからこそ自分から動くことが大切になったと感じますね。

——コロナで社会や生活の仕方が変わったと感じることは何かありますか。どう行動していけばいいと思いますか。

石川：人によってコロナの危機感に差があるなと感じていて、私はおばあちゃんがいるので、慎重になったりするんですけど…。やはりインスタとかを見ていると遊んでいるなど感じることはありますね。身近な変化としては、地元が賑わっているというか、みんな遠出はしなくなって近所の公園に行ったりとか商店街が賑わっていたりとかそういうプラスの面もあるのかなと思いました。

石岡：インスタで遊んでいるのをたくさん見てもやはり自分は我慢しようという感じですか。

石川：そうですね。ニュースで見たんですけど、50代くらいから重症化のリスクが高まるというのを見て、おばあちゃんだけでなくそろそろ親も危ないと感じて…若者でも後遺症があるという不安もあるので、やっぱりいざコロナになったら自分ひとりの問題じゃないなという想いが強いですね。

鈴木(菜)：いつもより社会を知ること、例えばニュースを見るようになったかなと思いますね。今までは自分のことで精一杯だったのでニュースはあまり見てなかったんですけど、情報を得ないといけないのでニュースを見ると、みんなの意見を知るようになったのは自分自身だけでなく、みんながそうだったから誹謗中傷とかも多くなったのかなと思いますね。

山田：緊急事態宣言が出てから、とにかく自粛しようとなっていたところから、「Go Toトラベル」

で対策して外に出ようとなったのは大きな変化だし、やはりインスタを見ると旅行に行っている人もいるし…そういう意味ではもう自分で気をつけるしかないし、みんなで防ごうというよりは、雇るか雇らないかは自分次第になっているのかなと思います。

鈴木(穂)：私は今までより周りを想う気持ちとか協力し合う気持ちを持って生活していくことが大事なんじゃないかなと感じていて、自分だけの責任じゃなくて自分発信で大切な人まで傷つけてしまうのはよくないかなと思います。

澤野先生：普通の暮らしに社会的責任が伴うようになる一方、先ほど誹謗中傷と言っていましたけど非常に無責任な人も増えている。要するに自分の日々の暮らしに責任を持つ人と無責任な人の二極分解になっているところがあるのかなっていうことと、あと気になっているのはオンライン授業と関連するんですけど、先進国だったはずの日本がいつのまにか周回遅れになっていたという事実です。日本が遅れている部分だとか、停滞している部分とか、ひょっとするとこの社会が再生できるのかとかいろんなことを考えさせられました。

——身近な生活を離れた部分で感じたことはありますか。

石岡：外国はロックダウンで強制的に外出を制限していたけど、日本は日本人の特性を活かしてなのか自粛という形で強制はしなかったというのと、日本人はこんなにSNSとかメディアの情報に流されやすいんだと感じましたね。

山田：日本はコロナの感染率が低いファクターXのようなものがあるじゃないですか。その中にマスクをつけるとかがあった気がして…。日本人は自粛してくださいと言ったらちゃんと自粛するとか、マスクを公共でつけると言われたらつけるとか、日本人はそういうところはすごいと思いました。

澤野先生：ファクターXで言われたのが、マスク、手洗い、室内で土足をやめる、の3つだったと思いますね。マスクと手洗いに関しては、元はヨーロッパ由来だったんですけど、それが日本に来て

日本人はこれまで愚直に守り続けていて定着した国なんですね。不思議なくらい(笑)。

山田：不思議ですね。

澤野先生：そのいい部分の原則みたいなものは、学校教育と家庭教育の賜物かもしれないですね。それがファクターXを全部満たすかは分からないですけどね。

石川：私も同じように、国が緊急事態宣言出してすぐ「Go Toキャンペーン」をやったり、緩みがあるような感じがして、ロックダウンまではいかないにはしても、もう少し緊急事態宣言みたいなものをやるならやる、やらないならやらないと決めた方が、トータル的にはズルズルとするよりは飲食業の方にもプラスだったんじゃないかなと思いました。あとは、国民性というか、過敏になる人と過敏でない人とで極端になっていて、例えばパチンコに並んでいる人のインタビューでも「怖い人は家から出なければいいじゃない」というような感じで、人によって考え方が違うんだと感じました。

鈴木(菜)：コロナがあるまでは、急いで何かを開発しないといけないということが日本はあまりなかったもので、長いスパンで問題を解決してきた日本が急に何かをしないといけないってなった時にうまく進まなかったという部分は大きいかなと思いました。

鈴木(穂)：政府が緊急事態宣言を出して、守らない人もいたとは思いますが日本人の多くは守っていたし、そういうところは評価すべきだと思うんですけど、マスクや10万円の給付金が配達される時期が地域によって遅かったりして、言ってからすぐに動くということが政府はあまりできていなかったんじゃないかなと思いました。

澤野先生：大学で最初に教わることは多分「調べる」という行為なんだよね。意外にみなさん調べないんです。調べましょう！そうすることで調べた一個一個の事実からこの社会を感じられると思いますし、先ほどの責任ある行動につながっていると思います。僕から伝えたいことは調べれば調べるほど調べがいのある世界が広がっているので、いろいろ分かることがあると思います。

コロナ禍における医療ソーシャルワーカーの相談援助の変化

下 田 尚 子*

1. はじめに

新型コロナウイルス (COVID-19) の国内の感染者数は、厚生労働省健康局結核感染課のデータによると、11月15日現在で陽性者数115,327例、死亡者数1,882名、新規感染者数は1,722名。入院治療等を要する者は11,759名で、うち重症者は243名となった⁽¹⁾。

2020年の1月に中国で「肺炎」が流行し始め、その一方で中国人観光客が春節で日本を訪れているというニュースを見た時に、「新型コロナウイルス」を認識した記憶がある。

映画の「コンティジョン (Contagion) (2011年公開)」で原因不明のウイルスと戦う主人公と、パニックに陥った人々は都市封鎖の中、為す術もなく見えないウイルスに怯える場面を、武漢の医師がメディアに向かって「未知のウイルス」の恐怖を訴える映像を見た時に思い出した。それでも映画を見ているような感覚で、遠い国の出来事として眺めていた。

2月に入り、日本でもダイヤモンド・プリンセス号のニュースが連日ワイドショーを中心に溢れ出した後、2020年3月2日からは政府は全国の公立の小中高に対し、学校臨時休校要請を出した。未知のウイルスは医療現場だけの問題ではなくなり、日本でも社会全体の空気が変わっていく。緊急事態宣言による外出自粛や休業要請、かつて経験のない事態が次々と起こり、その結果、日本でも社会全体で、今まで当たり前に行っていたことが、できなくなっていくことは、周知のことで

あろう。

筆者は2020年2月に明治学院大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻を受験、3月に合格通知を受け取った。4月の大学院の入学式に引き続き、入学時のオリエンテーションも中止。ようやく授業が開始されたのは4月20日。対面授業は行えず、オンライン授業開始のお知らせを大学から受け取る。最初の授業の時には、先生を始め、入試の時に解答用紙を埋めていた前後の「受験生」と画面越しに、ぎこちなく挨拶した。図書館はおろか、大学のキャンパスにも足を踏み入れることができない事態に、戸惑いというより、この病気の不気味さを感じ始めていた。

この時期は全国で入学式や入社式を心待ちにし、普段なら新しい生活に胸を弾ませていたはずの新入生や新社会人が、新しい友達や同僚に会えないまま、ひたすらパソコンの画面越しに授業や研修に一人で向かい、不安な日々を過ごしていたであろう。東京から地方に行くと、「東京から来た」とは言えないと聞いた。感染した人への差別、目に見えない攻撃があるからだという。

当たり前が日常が、送れなくなることへの苛立ちもまた、人々の心に重くのしかかっていた時期でもあった。

今も電車に乗ると全員マスクをしており、検温や手指消毒はスーパーでもデパートの入り口で普通に行っている。まだこの生活を送るようになって、実は1年経過していないことに愕然とする。

2. 見えないからわからないこと

世間の多くが自宅待機、外出自粛となっていた

* 社会学研究科 社会福祉学専攻 前期課程1年

時期、筆者は医療機関に所属し、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）の仕事についていたため、オンラインで勤務や授業を自宅で受けている家族を横目に、3月以降も電車を利用し、勤務を継続していた。

勤務先の回復期リハビリテーション病院で、第一波の時期の現場は、とにかく目に見えないウイルスへの恐怖との戦いだだった。急性期の医療機関から紹介された患者さんが転院して来られ、数日後に発熱した患者さんの報告が上がると病棟に緊張が走る。PCR検査と同時に、保健所への相談、濃厚接触者の確認が必要になる。MSWは初回入院面談に必ず同席するため、何分面談していたか、同席者の確認、発熱患者の家族への連絡、次々と確認事項が増える。

発熱者が発覚した日に、同室者が施設へ入所したことがある。迷った末に施設に連絡したケースでは、報告を受けた施設側も半ばパニックになり、一度入所した方を病院に戻す戻さないと揉めた（結局施設で発熱しないことを確認するまで、一定期間施設側の個室で隔離で決着）。発熱者を急性期の病院に搬送する際には、感染予防対策をした救急隊員が到着した。

外出訓練などの制限によりリハビリが進まず、精神的に不安になられる方が増えていった。家族の面会も感染予防対策でほとんどできなくなり、一人病室で黙々と食事をとることが続いた影響からか、早期退院を申し出る患者さんも多くなっていった。

退院先が施設の方は、受け入れ先が新規入所をストップしてしまったために、自宅にも戻れず、長期のリハビリ入院となってしまった（リハビリを長く受けられ、患者さんにとっては良い場合もあった）。

3. コロナ禍での支援の変化

コロナ禍の自分の業務の中で一番変化があったのは、MSWにとっては「面接」だった。

月に1度の定期面談では通常、医師からの病状説明、リハビリの進捗報告、病棟生活の様子を踏まえ、退院後の方向性を確認して行く場であっ

た。原則オンライン面接、環境が整わない場合は電話での報告に限定された。退院前カンファレンスでは今までは担当ケアマネジャー、福祉用具業者、訪問看護師、時には訪問診療の医師、施設担当者や地域包括職員など、とにかく「人」に病院に来てもらい、患者さんの退院に向けて何が必要か、何を調整すれば良いか、本人も交えて話合ってきていた。それは合意形成の場でもあった。それも原則家族だけ、電話越しとなってしまった。

患者さんが高齢の場合、ご家族も高齢の方、耳が遠い方が多い。コロナ前はゆっくりと大きな声で話すよう心がけていたものの、コロナ禍ではマスク着用、一方でソーシャルディスタンスも取らなければならず、飛沫感染予防でどうしても小声になってしまう。こちらの表情が見えないため、患者さんやご家族から聞き返されることが多くなった。

電話での定期面談は、次々と職員に電話を代わってもらい、リハビリの報告を家族にするのだが、本人の姿を見ることができない状況で、「言葉」だけでリハビリの進捗を報告しても、理解していただくことは難しい。面接終了後にデイルーム（食堂）や自室、時にはリハビリ室で患者さんが歩行している様子を見ていただき、直接本人と話せば、自宅に帰れるか、自分たちで介護ができるか、自然に家族が理解する場面だったことに、改めて気づいた。

面接に参加している多職種の同僚も「電話先の家族が、報告に対しどう反応しているかわからない」と苛立つ場面も見られた。全ての家族がオンライン対応ができる訳ではない（一方対応できる家族は月に数回、画面越しに本人の面会も行っていった）。

格差とまでは言わないが、持てる者、持たざる者の違いを見せつけられた印象が今も残っている。

4. 会うこと、話すことの大切さ

本人の姿は見えず、専門職が「言葉」だけで本人の様子を伝達し、自宅退院を決められても困る

と言う家族もいる。一方で自宅退院が厳しいと思われる患者さんの家族が、「会っていないからわからない」と施設入所を決めることをためらうケースも増えている。

入院時の面接で、前の病院での様子を尋ねると「前の病院では、会えなかったから様子がよくわからない」と話される家族が増えた。患者さん本人に数ヶ月ぶりに「やっと会えた」と涙ぐむご家族も少なくない。

「会う」ことで我々が得られる安心感と情報量は想像以上に大きい。同時に「言葉」で伝えることの限界も痛感している。MSWの「武器」とも言える面接が十分にできない時に、どうしたら伝わるか、何を工夫すれば良いか、考えながら面接の場に臨んでいる。

退院前カンファレンスは、退院後に関わる多職種のスタッフと、患者さんと顔合わせする場である一方で、今までリハビリを行ってきた療法士や、病棟で看護に当たっていた看護師にとっては「引き継ぎ」の場でもあり、地域の多職種のスタッフには、伝えておきたいこと、本人の希望や家族の気持ち、背景を伝える大切な「場」であった。

冬に向け、第三波が到来しつつあるとも言われている。新型コロナウイルスとの戦いは、いつ終

わるか先が見えないが、コロナ禍でMSWの相談支援の手段が制限されたことによって、逆に見えたこともある。

MSWにとっての「面接」の大切さを思い知らされ、電話やオンライン面接で、どこまで伝えられるか。退院支援で関わる地域のスタッフと協力し合い、患者さんが退院して、以前の生活を少しでも取り戻せるように、MSWができることは「言葉」を使って、患者さんの「今」を伝え、退院後に必要なことを、誠実に丁寧に伝えていくこと。

それはコロナ禍であってもソーシャルワークにとって「変わらないこと」であると、日々痛感している。

〈注〉

- (1) 厚生労働省ホームページ 報道発表資料(2020年11月)「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について(令和2年11月15日版)」
(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_14860.html)

〈参考文献〉

- 北川清一・久保美紀編著(2017)「ソーシャルワークへの招待」,ミネルヴァ書房
尾崎新(1997)「対人援助の技法 「曖昧さ」から「柔軟さ・自在さ」へ」,誠信書房

働きかた、働く場所の変容を考察する

沼田 元明*

新型コロナウイルスの流行は、過去に経験したことのない勢いで全世界に蔓延し、人びとの移動制限や、物やサービスの流通においても制限を加えられるという事態を引き起こしている。今まで当然のことだと思われてきた生活習慣や個人の考え方を早急に改善しなければ、人類はコロナ禍に打ち勝つことができない状況に追い込まれている。社会の各階層で、そして世界中の人びとが新しい生活様式を学び、従来の習慣と異なる考え方を模索し、新価値観を登場させ、それを多くの人びとに共有を促していくことが、求められている。

グローバル化に依存した世界中の国々にとって、グローバル化した現在の生活スタイルが引き起こしたとも言えるコロナ禍は、一国や大陸内での改善努力や協調、連帯だけでは収束する見込みが立っていない。持続可能な社会を今後も継続していくためにも、労働や働きかた、働く場所等の分野に範囲を絞り、現状がどのように変化し、今後も変容していくのか考察する。

コロナ禍は何をもたらしたのか、以前とその後の変化

新型コロナウイルスは、人を介して感染を拡大していく仕組みであることから、政府や都道府県の長は、国民や市民への外出自粛を呼びかけ、さまざまなメディアが感染拡大防止策を連日のように報道した。コロナウイルス対策として、全員が一致団結した行動をとれば、ウイルスはやがて力

を失っていくという感染症対策専門家の発言は、国民が協調行動をとることによって、コロナ禍を乗り越えようという、インパクトのあるメッセージを国民に与えた。

この流れによって、従来から世の中に先行して「在宅勤務」がおこなわれていた業種、職種に加えて、より多くの働く人びとが就業形態を短期間のうちに、在宅勤務へ切り替わっていくことになった。会社、事業所に勤務するためには、通勤することや客先への出張が当たり前であり、移動することは仕事の一部と考えられてきた世間での常識は、この一年間で大きく変化し、これからも加速していく勢いである。

学校においても、小中学校と高等学校、特別支援学校の全国一斉休校を、安倍晋三首相(当時)が要請し、休校(3月～5月)が実施された。この決定は、科学的、学術的観点からの根拠もなく、法的拘束力もない、一政治家の判断で突然かつ長期間にわたり実施された。この休校要請に対しては、当事者である児童・生徒、保護者、学校関係者に大きな困惑が広がり、対応に追われていくことになった。この決定に関する反響は大きなものがあった。

厚生労働省の発表によれば、新型コロナウイルスの感染拡大に関連する解雇や雇止めが、見込みも含めて八万八千三百三十六人(2021年1月13日発表)となり、業種別では、製造業が最多の一万七千九人、続いて飲食業でも一万人を超え、小売業を合わせた上位三業種で全体の約半数を占めたとされ、大きな影響を受けている。この調査は、厚生労働省が2月から、全国のハローワークや労働局

* 2017年大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程満期退学

に相談があった事業所の報告を基に集計したもので、実際に解雇された人数は、もっと多いとみられる。

コロナ禍によって課題が浮上した働きかた

日本でも、情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働きかたであるテレワーク（在宅勤務）が、新しい働きかたとして注目されている。テレワークは、働く場所によって、自宅利用型テレワーク（在宅勤務）、モバイルワーク、施設利用型テレワーク（サテライトオフィス勤務など）の三つのタイプに分類される。在宅勤務は、自宅とオフィス間の通勤をとまわず、新型コロナウイルスへの感染リスクを低減できることと、仕事やコミュニケーションは、主にパソコンとインターネットを介して行うことが出来る職種の場合は、コロナ禍を機に急速に導入が進んでいる。しかし、課題も指摘されている。

厚生労働省は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言下にテレワークを実施した企業などを対象にした実態調査の結果を公表した。テレワークの課題として、労働時間の管理の難しさを挙げる企業が三割に上っている。主な課題としては、「社員からの労働時間の申告が適正か」、「勤怠管理の難しさ」などが挙げられており、コロナ禍の緊急事態宣言を機にテレワークを導入した企業においては、体制が十分に整っていないこともその背景にある。

厚生労働省では、テレワークのさらなる推進に向けて、今年度中に労働時間管理などに関する指針を新たに定めるとしているが、企業と社員間においても見直しが必要である。コロナ禍では、通常の勤務時間よりも長時間労働になったとの声も上がっており、労働者が必ずしも望まない場合でも、使用者側の準備が充分でない状態で始めたケースでは管理が不十分になりやすい背景がある。

今後検討すべき課題の一つは、労働時間の把握と管理方法を、合理的に労使双方で合意できる仕組みと体制を整える必要がある。在宅勤務やサテライトオフィス勤務などでは、労働時間とそれ以外

の時間との境目があいまいになりやすく、例えば、労働時間外に電子メールや電話での対応を依頼されるケースもある。この場合は「労働時間外は対応しなくて良い」と指針で明確化し、周知する必要がある。

そして、オフィスや事業所外での働きかたが常態化していくと、精神的な影響を受けやすくなり、ストレスの増加による就業意欲の低下が在宅勤務者などのリモートで働く人びとにとっては、孤独感や孤立感をより深めていく労働環境になる。このような状況を予防していくためには、日常業務におけるコミュニケーションとチーム内の「場の共有」化を図ることで改善することも必要である。

コロナ禍後の社会の変化

コロナ禍によって、今の日本が抱える弱点が見えてきた。政治体制にも経済活動にも、働きかたにも学校教育にも表れている。共通するものの一つが、デジタル化の遅れである。新型コロナウイルスの感染拡大を抑え込むことに効果を発揮したアジアの国々、韓国・台湾・中国での情報通信技術を駆使した管理手法は、日本も取り入れるべき点が多いのではないかと。今後、仕事の進め方やコミュニケーションの取り方が、テレワーク・リモートワーク化の方向で拡大していけば、情報の高速化や情報保護などの通信インフラなどの整備が急務となる。

そして、「感染拡大を予防する新しい生活様式」のなかで、人びとが密閉・密集・密接のいわゆる3密を避けることが個人に求められていることと同様に、人びとが集まる、集団を構成する社会のあり方も大きな変革が要求されている。日本においては、大都市への人口一極集中型から、地方都市への分散型にシフトしていくべきだという議論が以前から繰り返されてきたが、それは実現しなかった。新型コロナウイルスの感染拡大を今後も抑制していくためには、人と人との間を適正に保ち、ウイルスを感染させない社会の構成が必要である。今まで成し得なかった大都市への人口集中から、地方都市への人口分散への転換を、コロナ

働きかた、働く場所の変容を考察する

禍を契機として、実現の方向へ向かう第一歩を踏み出すべきである。

これによって、働きかたや働く場所の選択肢を拡げて、リモートワーク・テレワークによる自由で弾力的な働きかたを模索し、仕事・家庭・育児・介護等が両立しやすい社会を目指していけば、デジタル化と働きやすさ、健全な社会の構築が推進

されるはずである。

しかし、それと同時に、人びとが賃金にあまり頼らずとも生活できるようにする仕組みを考えることも必要である。人が生きていくためには収入を得なければならないという発想から転換し、人びとが協業し助け合う労働環境の構築も必要となる。

「フィルター X」とは何か —身体性向としての社会的距離に関する一考察—

岩 永 真 治*

はじめに

「ウィズ・コロナ時代あるいはアフター・コロナ時代の空間的諸形態」に関する研究が重要になっている。この研究において重要なのは、研究対象としての「空間」が「物理的空間」であると同時に「社会的空間」でもあるという認識である。こうした研究対象は、既存の社会学的研究の領域で言えば、「アーバニズム（生活様式としての都市）の研究」「親密性の変容に関する研究」「社会的相互行為やコミュニケーション行為の社会的な構築に関する研究」などにふくまれていたものである。

1) 物理的密度と社会的密度

問題になっているのは、「身体」の「物理的密度」と「社会的密度」(E・デュルケームの言葉を借りれば「道徳的密度」)の関係である。「人間本性の志向」である「社会的密度の強化」(intensification of social density)と、「物理的密度の距離化」(physical distancing)が、同時に課題になっている。コロナ・ウイルスをめぐって「回避すべき3密空間」とは、厚生労働省の定義では「換気の悪い密閉空間」「多数が集まる密集場所」「間近で会話や発声をする密接場面」のことであり、英語の定義は 1) Closed spaces、2) Crowded places、3) Close-contact settingsとなっている⁽¹⁾。ひとつづかみに言えば、「密な空間に身を置かない」ことが日常的な課題になっているのである。

他方、コロナ禍でZoomなどICT技術が日常生

活におけるオンライン・コミュニケーションを拡大している現状は、A.ギデンズが指摘するようなコミュニケーションの「場所」からの/への「脱埋め込み」(disembedding)と「再埋め込み」(reembedding)の過程において、「物理的な距離の拡大」が「コミュニケーションの密度すなわち親密性の増大」を生み出している局面があるとも言えるであろう。新型コロナウイルス拡大の現場で、「脱-領域化」(de-territorialization)と「再-領域化」(re-territorialization)の過程が「存在」(presence)と「非-在」(non-presence)を混交させながらアイデンティティの場所(=係留の場)を流動化させているのである。

いずれにせよ、「身体」(σῶμα, body)の「物理的密度」と「社会的密度」の関係は、社会学において伝統的な主題であるとともに、コロナ禍の現下きわめてホットな主題になっている。

2) 行動性向と現実の行動の区別

ところで、「3密をつくらない」という「状態=行動性向」(ヘクシス)と、その「状態=行動性向」の「現実態=現実の行動」(エネルゲイア)は、同じではない。それは、たとえば市民権の理念(citizenship)と、その理念を背景とする(その理念に担保された)市民の多様な現実の行動や活動(citizen's activities)が同じではないのと、同様である。また、人がいま一般に「健康」であると考えることと、じっさいに健康である行動や活動の多様性は、必ずしも一致していない。しかし、分析上大切なことは、両者、すなわち「行動性向」と「現実の行動」は、相互に影響しあっているというこ

* 社会学部教授(社会学科)

とを見落とさないことである。

ここで「行動性向」(ヘクシス、古典ギリシア語で‘ἐξίς προαιρετική,’ 英語で‘a settled disposition or state of the mind with regard to choice and decision,’ ドイツ語で‘eine Verhaltensweise oder Verhaltensdisposition bei der Wahl,’ フランス語で‘une disposition comportementale du choix,’ スペイン語で‘una disposición conductual de elección,’ イタリア語で‘una disposizione comportamentale di scelta,’ ウクライナ語で‘поведінкова диспозиція вибору,’ ロシア語で‘поведенческая склонность выбора’ などと表現できるもの。トマス・アクィナスは、この古典ギリシア語の言葉ヘクシスを、ラテン語で‘habitus sunt secundum quos ad passiones nos habemus bene vel male’ と説明している。Summa Theologiae, I-II, 49, 2c) とは、人間の行動とその行動の対象物との間にできる「物理的または文化的・社会的に構造化された習慣」のことであり、また「行動によって習慣化する社会構造」のことである。そこにはフランスの社会学者ピエール・ブルデューが分析する「場」(champs) が形成されている⁽²⁾。これは「物理的空間」であると同時に「社会的空間」でもあり、ここに「強化された密度」あるいは「強化されない密度」というものが発生するのである。そしてここに、日本におけるコロナ感染の拡大が欧米に比べて緩やかな理由、すなわち「フィルター X」の正体がある。

3) 「分析する行為」とその対象

「分析する」ということの基本は、「物事を分ける」ということである。「分ける」ことは、分けられたものを「結びつける」ことであり、最終的に、分けられたものが再度結びつけられた「全体」について「分析=考察する」ことである。「分ける」ことは「結びつける」ことであり、われわれの日常生活における「分類」や「整理」といった日常的行動も同様の特質を持っている。ここで「持っている」というのは、「相互行為的に習慣化された社会構造」を意味しており、まずわれわれはここで現代的な所有概念から解放される必要がある。

「持っている」というのは、「ひとつの相互行為的な運動」なのである。

また、「分類するという行為」は、マルセル・モースも指摘するように「身体的技術」(techniques du corps) のひとつであり、「分類する行為」と「分類される対象」の間にある「往復運動的なひとつの構造」であり、それが「社会規範」を生成し再生産し続けている。たとえば、フェミニズムにおけるジェンダー研究では、「社会規範」としての「女らしさ」や「男らしさ」が「女性」や「男性」の「分類」を生み出していると説明され、批判されることが多いが、「社会規範」は実際には身体技術とその対象物の間にあるものであり、身体技術とその対象物との間の往復運動の中でそれは生成され維持されているのである。擬似ジェンダー分析が提供するような「社会規範」と「分類された現実」の間の単純で一方的な因果関係は存在しない。むしろそこにあるのは、「循環的な因果構造」ともいえるべきものであり、一定の往復運動の中で原因が結果になり、結果が原因になるような「所有構造」なのである。

そして、この論文で言う「行動性向」の分析も、こうした「因果循環的な所有構造」の分析のことである。

以下、コロナ禍で問題になっている「社会的距離を保つ」(social distancing) という人間の事象を、「ヘクシスの社会学」の観点から5つの次元に〈分けて〉みよう。

4) 「社会的距離」はどのような次元で発現するか

a. 言語的な距離

第一に、「言語的な距離を保つ」(ヘクシス・メタ・ログー、ἐξίς μετά λόγου) という次元である。これはコミュニケーションの距離を保つという意味である。英語やフランス語やイタリア語では近づいて口をはっきり開けて発音するのに対して、日本(語)ではその丁寧さにおいて口を閉じ気味に話し、時に手を口にあて発話表現や周辺に対して口元の顔表情を隠すことも多い。話しの合間にあくびやくしゃみが出そうになると、周囲に醜い表情をみせず、唾液の飛沫がとんで迷惑をか

けないように開いた掌で軽く口元を隠す。こうした言語－身体的行為は、ヨーロッパだけでなく東アジアや東南アジアの列車や地下鉄に乗っていても、洗練された発話行為間の「振る舞い」(sich verhalten gegenüber=自らに向かって、他者あるいは対象物に向かって振る舞う、という意味)として、「わたし日本人のそういうところが好きです」と突然言われ、評価されて、びっくりすることがある。2020年7月24日金曜日のお昼前に目黒川沿いの舗道を歩いているとき、後ろから自転車が来たので身体を寄せて道を譲った。乗っていたのは外国の若い女性で、「ありがとうございます」を示すために、頭を下げ言葉を発せず、軽にお辞儀をして通り過ぎた。彼女はマスクをしていたが、この「日本人らしい行為」は、マスクをしていなくても多くの飛沫をとばすことはなかったであろう。

日本語の発話行為における他人との「距離の取り方」は、「社会的な距離の取り方」(social distancing) であると同時に、「物理的な距離の取り方」(physical distancing) にもなっている。もちろん、その個人的な文化資本の蓄積の差(=国民文化の中での振る舞いにおける卓越性の差)もあるし、その「クラスター(集団、群れ)」としての世代による差も存在するであろう。「日本人」の振る舞い方も変わってきているからである。

b. 倫理的あるいは道徳的な距離

第二に、「倫理的あるいは道徳的な距離を保つ」(エーティケー・ヘクシス、*ἠθικὴ ἐξίς*) という次元である。これは感情や思いやりの距離を保つという意味である。出会いや再会の歓びに両頬にキスをしたり抱擁したりする(イタリア、スペイン、フランス、ロシアなど)、出会いの挨拶として頻繁に握手したり再会の歓びの表現として抱擁したりする(米国、ドイツ)のに対して、距離をとってお辞儀で挨拶する、肌の触れ合いに敏感な感覚を持っている(「袖振り合うも多生の縁」という微妙な距離感覚が「社会的に距離をとる/区別する感覚」にもなっている)日本との違いである。

ウクライナ正教会やロシア正教会など東方正

教系の教会にはキリストやマリアのイコンがたくさん置かれており、お祈りに訪れた敬虔な信者は、木彫り装飾がある枠とガラスの板の内側に納められたその似姿に優しくそして次々に、時に同じ場所に代わる代わるキスをしてゆく。一方、神社に行きお参りをするときには、お礼をして拍手を打ち、鈴を鳴らして神殿の奥を距離を維持して見つめ、祈りごとをした後で礼をして立ち去る。これは、人に会って「こんにちは」とまず頭を下げ、別れる時も「今日は、ありがとうございます」と言って再度頭を下げ立ち去る、日本人の行為の原型になっている。お寺でも、お御堂に入ると仏像を遠くから眺め、掌を合わせてお祈りをしお経を唱え、再度遠くの仏の似姿に恭しく頭を下げその場を去る。ここでも、関係している対象との間に「一定の距離を取る」ことが自然な行為になっている。

また、日本でいう「おもてなし」は、「物理的な距離を保ちながら社会的な距離を調整しそして尊重する文字通り社会的な技術(social technique. 古典ギリシア語の意味ではpolitical technique)」である。これは別の局面で、他者へのいたわりにおける「距離の取り方」にもなってくる。「マスクをする」という、自分と他者に対する「距離の取り方」(=皮膚感覚 τὸ αἰσθητικόν) も、この次元にかかわっている。

こうした日本人に特有の「空間の取り扱い方」における「社会的な距離の取り方」(social techniques of distanciation) は、最近グローバルに哲学、心理学、社会学、開発経済学、教育学、法学の領域で関心の的になっている、社会目標としての倫理的課題「適度な富の取り扱い」(moderation in wealth) にも関連している⁽³⁾。

c. 知性的な距離

第三に、「知性的な距離を保つ」(ディアノエーティケー・ヘクシス、*διανοητικὴ ἐξίς*) という次元である。これは適度で適切な理解の距離を保つという意味である。「互いに意見を言い合って議論をするヨーロッパや米国の伝統」に対して、近年アクティヴ・ラーニングの推奨などでいくらか

変化も見られるが、「先生の話に黙って聴くことが尊重される教室文化」が依然支配的な日本の知的コミュニケーションの空間が、コロナ感染症の拡がりの少なさに関連しているかもしれない。また、これは、ひとつの神への一体化を強く強制される宗教文化と、多様な神々の間で距離を取り合いながら生きる道を選ぶ宗教的感覚との違いと表現してもよいものであり、このことが第四の次元とも結びついている。

そして、場の雰囲気^{アトモスフィア}を尊重して発言を控え慎むという行為も、「ひとつの卓越した振る舞い」として日本では受け入れられている。こうした行為は、ゼウスが与えた既存の秩序を支持し尊重するという「伝統社会に典型的な行為」とこれまで理解されることが多かったが、西欧における文芸復興(ルネッサンス)以降の人間本性(ラテン語で *natura humana*、英語ではその伝統を引き継いで *human nature*) の理解の「穴を埋める」あるいは「外延を拡げる」ような「卓越性」(ἀρετή) や「人間としての美しさや立派さ」(τὸ καλόν) と理解することも可能である。宮崎駿をそのシンボルとする日本の漫画やアニメのグローバルな理解と浸透は、古典古代的かつ近代西欧的な人間理解の外延の拡張あるいは再考を物語っていると思われるのである。

一般的に言えば、「卓越性」とは、「言葉(λόγος, reasoning)をとともなう選択性向」(choice disposition with linguistic and meta-linguistic activities) であり、「原則より多いもの (the more) と少ないもの (the less) のあいだの中間性向 (disposition hitting the mean)」のことである。それはカント的な「言葉 = 言語に導かれた選択と決定 linguistic choice and decision」 (= 定言命題) ではなく、またベンサム的な「市場原理を準則とする選択と決定 utilitarianism」 (= 功利主義) でもなく、「言葉とともに現れるが、言葉がなくても行動に現れるような、言葉以前に決定されている、構造化された身体技法 (bodily techniques)」のことであり、「身体性向」(bodily hexis) の一類型である。

たとえば、「思いやり」(thoughtfulness) や「品

格」「高潔」(decency) といった人間の行動は、一般には「言葉をとともなう選択性向」(ヘクシス・メタ・ローグ) として現れてくるが、日本人のように言葉をとともわずに行動に先立ってすでに決定されて現れてくる場合もあり(日本人が世界から称賛されることの多い「思いやり」や「人への配慮」はこの類のものである)、いずれにしても行為の実践(プラクシス)とともに身体技法によって制御調整されて出てくるものである。「言葉もなく差し伸べられた援助の手」と、その「距離の近さ」は、この類の行動性向の発現である。これは倫理的な卓越性であると同時に、知性的な卓越性でもあり、人間として適度で適切な距離を保っているという意味で、「知性的距離を保っている」と表現できるであろう。

d. 美的で感覚的な距離

第四に、「美的・感覚的な距離を保つ」(アイステティケー・ヘクシス, αισθητική ἕξις) という次元である。これは感動を共有する距離を保つという意味である。「散りゆく桜を眺める」時のように、美の感動を距離を保つ身体的感覚や感動として味わう伝統のある日本人の距離の取り方は、「共感する」という次元で自然に「社会的に距離を保っている」(social distancing) ことになっている。

「生け花」の場合にも、眺める時の距離感が大事であり、また生けられた草木や花の間の距離やかたちの調整がとても重要であり、それが美的・感覚的な対象それ自体とその対象から生み出される「感覚や知覚としての美しさ」を生み出す根拠 = 根源(アルケー)になっている。日本の美学研究者である木幡順三は、芸術作品における「高品位空間」の生産に関して、つぎのように述べている。「空間の量的規定については過剰への制限が付せられるが、感覚の強度についても同様の制限がみとめられる。〈派手〉や〈けばけばしさ〉に対しては、これを適当にひきしめ統御する精神的集中力がなければならない。高品位をたもつためには感覚的刺激を抑止し、むしろ控え目に表現しなければならないであろう。」⁽⁴⁾

この木幡の指摘は、日本人が好む芸術的な高品位現象、たとえば生け花や能の舞台の完成度などにあてはまるだけではない。じつは食事の時の箸の上げ下げや茶碗の持ち方、くしゃみや笑いの時に口元に掌をおく仕草や身体の捻り方にも応用可能な、「倫理的、知性的、場合によっては生物学的（公衆衛生的）な距離」空間の、柔軟で日常的な生産のプロセスをめぐる視点でもあるだろう。

また、フランス国境のサン・ジャン・ピエ・ド・ポーからピレネー山脈を越えてスペインのガリシア地方サンチャゴ・デ・コンポステラまでの巡礼の歩きの旅の果てに、大聖堂の前で人々は旅の達成を称えあい、国籍、民族、人種、宗教、使用言語などを超えてとにかく跳び上がって周囲の人々と互いに抱き締め合い感動を共有している。家族であってもなかなか生じない「物理的かつ身体的な密接」を「（神に祝福された）喜びと共に」味わっているのである。他方、四国八十八ヶ所霊場巡りの「お遍路さん」では、巡礼の旅の達成を味わうために人は他人と距離をとりながら一人座り込み、旅の身体的な疲れを癒し、同時に瞑想気分をじつと味わっている。ここでも、「感動を共有する距離の保ち方」がちがっている。

e. 生物学的な距離

第五に、「生物学的な距離を保つ」（ピュシケー・ヘクシス、φυσική ἕξις）という次元である。これは、文字通り物理的身体の距離を保つという意味である。これは公衆衛生の観念を通じた、物理的であると同時に社会的そして文化的でもある「空間の生産」に関わっている。たとえば、受付やレジにビニールの壁を創る感覚や、公共空間である歩道でも「自宅の前はきれいにしておく」という意味で掃き掃除をする「公衆衛生」（*υγίεια*, public health）の「感覚」（*αἴσθησις*、英語ではsense = 感覚でもありperception = 知覚でもある）⁽⁵⁾は、日本に独特であると言われることが多い。

また、2020年7月末に富山湾で問題になった、倉庫や漁船の無地壁面への〈落書き〉に対して、地元の人や漁師が「船は自分たちにとっていわば商売道具、それを〈汚された〉」と言っていること

も注目に値する（フジテレビの番組「情報プレゼンター とくダネ！」2020年7月30日朝の報道から）。この〈落書き〉行為への憤りや批判は、「文化的な批判」（他人の建物や持ち物（=倉庫や船）に対してこんな（=意味の分からない）〈落書き〉をするなんて許せない）であると同時に、「公衆衛生的な批判」（無地の壁にこんな落書きをして〈汚い〉）でもある。ここでも文化・社会的行為が、瞬時に「公衆衛生的かつ物理的な距離の取り方」の言説に横滑りしている。ここには、見続けることができず、耐えられない「生物学的、物理的な距離の取り方」が皮膚感覚として露出しているのである。この〈落書き〉への反応は、「新型コロナウイルスによって〈汚染されているかもしれない〉他人の身体やその周辺環境」に対する日本人の、通りですれちがう時にさえ発現しているかもしれない「社会的な距離の取り方」である。

最初に「言語的な距離を保つ」次元でとりあげた、発話表現中に掌を口元にあてる行為も、じつは「衛生観念の身体化された表現 = 身体性向」である場合が多い。口に手をあて飛沫の拡散を防ぐとする行為や、身体を正面から外して両手で口を隠してくしゃみを抑えようとする心掛は、日本人によく見られる「身体性向」であるが、それらの行為も「生物学的な距離 = 物理的な距離を保つ行為」であると同時に「社会的な距離を調整する行為」（social distancing）になっているのである。

「生物学的機能としての身体性向」には、「人間特有の快楽」が備わっている。これは「快楽主義」（hedonism）と言う時の「快楽」ではない。それは有徳で卓越した行為を、たとえば勇気であるとか節制であるとか気前のよさであるとか温和であるといった行為を選択性向に基づいて行う時に感じるような、人間に自然的・本来的で、また生物学的かつ生理的に心地よい快楽の感覚（*ἡδονή*, pleasure）のことである。このきわめて「人間的な実践感覚」は、それに特有の心の満足感や精神的充実感をともなっている。これは、「人間的な活動に〈付随する〉人間的な目標」であるとも言えるだろう。

ちなみに、「言葉あるいは言語機能をともなう身体性向」(ヘクシス・メタ・ロゲー)の研究は、身体の生物学的機能の研究として、脳科学分野などと接続が可能なものである。たとえば、「生物学的ヘクシス」としての「ミラーニューロンの共機能」の研究は、「身体性向」研究の一分野であるだろう⁽⁶⁾。

5) 身体的、社会的な実践感覚としての「フィルター X」

以上の「実践感覚」が「フィルター X」の正体である。これを世間で話題になっている「ファクター X」⁽⁷⁾と言わずに「フィルター X」というのは、これらが「ひとつのファクター X」でも「5つのファクター Xs」でもなく、複数の身体間に構造化されまた構造化する「媒介物」であるからである。また、身体と身体の間だけでなく、身体とそれを取り巻く物理的環境との間にも作用する、「社会的、建築環境的な媒介物」であるからである。それが、いわば「柔らかな格子状のフィルタリング効果」を生んでいるのである。ちなみに、「フィルター」(filter)という言葉は、中世ラテン語の *filtrum* がフランス語の *filtre* になり、それが英語に入ってきて *filter* になった言葉で、動詞や名詞の基本的な意味は周知の通り「不純物を濾過する」ということである。

これは、時に受動的に時に積極的に形をあらわす社会的条件 (passive and active social condition)⁽⁸⁾ であり、「社会構造の一部としての相互行為的な行動それ自体であると同時にその条件」であり、その関連する構造全体としていわば「社会的環境」(social environment) とも呼べるものである。

ところで、第二の「倫理的あるいは道徳的距離」に関しては、東日本大震災の際など尊敬すべき日本人の振る舞いとしてグローバルによく話題になるので、ここでは、第三の「知性的な距離」に関してもう少し掘り下げてみたい。

6) 行動性向としての「知的距離」

「知性的な距離」あるいは「知的距離」(intellectual

distance/distancing or intellectual hexis) とは、まず、「場を理解する力」や「物分りのよさ」(古典ギリシア語で *σύνεσις* (=comprehension) や *εὐσυνεσία* (=good comprehension) に該当するようなもの)、すなわち日本でよく言う「空気を読む (understand well what is going on) 力」のことである。さらにそれは、一般的な状況や特殊な状況における判断力 (同前 *γνώμη* = 'judgement in general or particular')、思慮深く丁寧に親切であるという意味での良き判断 (同前 *εὐγνώμων* = 'well-judging')、自分だけの判断ではなく他者の立場に立った判断すなわち同情、寛大さ、他者の受け入れなど (同前 *συγγνώμη* = 'judgement with', 'judgement on the side of others'; sympathy, lenience, forgiveness, etc) をふくんでいる⁽⁹⁾。日本人にしばしばみられるこうした知性的判断力に関わる身体的かつ社会的な距離の取り方 (social distancing) においては、「問題が起こっている状況の中で他者との関係においてどう振る舞うべきかを理解し、判断し、行動する心理的かつ身体的な力」、すなわち「行動性向」が、現実の行動になっている。

同時に、以上のような行動性向がウィズ・コロナあるいはアフター・コロナ時代の「新しい生活様式」において、ZoomやTeamsなどICT技術が日常生活においてオンライン・コミュニケーションを量においても質においてもさらに拡大・深化させている現状は、どのような新しいコミュニティのかたちを提案していくことになるのか。それに「参加するかどうかを決める」(to decide whether to join or not) ことができる時代は過ぎ去ってしまった。Web上の多くの文化的、経済的、政治的、象徴的な資源によって、身体の「物理的な選択肢」に比較して、われわれの「再帰的な選択肢」(reflexive options) はすでに限りなく拡大しているのである。

この状況が、東西冷戦終了後1990年代にすでに芽吹いていた「脱伝統的な諸共同体 (post-traditional Gemeinschaften) への欲求」⁽¹⁰⁾ をさらに高めることになるのかどうかは、いまのところははっきりしない。しかし、その欲動の渦巻きは社

会 (Web) の至るところに現れている。日本人に特有の「社会的距離」を創り出す「行動性向」への着目も、もしそれが十分に意識されることになれば、そのようなグローバルな欲動のまなごしの先にあるもののひとつなのかもしれない。

結論

いずれにせよ、日本や東アジア、東南アジアの国々で「コロナ感染の拡大がそれほど多くない」のは、以上の5つの次元を持つ「構造化され、構造化するヘクシス」としての「社会的距離の取り方」(social distancing)が、ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、また南米ブラジルとは決定的にちがうからである。

謝辞

「身体性向の構造化された形態としての都市環境」というこの論文の視点は、2017年10月20日に、ウクライナのタラス・シェフチェンコ国立キープ大学社会学部の大学院社会学方法論専攻の講義で、初めて集中的に論じたものである。当日の講義タイトルは、“Hexis, or on the Urban Milieu as a Structured Form of Bodily Habitus”であった。

講義の主要論点は、ブルデューのようにトマス・アクィナス由来のhabitusという概念を中心に用いるのではなく、hexisという古典ギリシア語をなぜ社会学で再びとりあげようとするのか。hexisという概念によって社会学における都市社会研究にどのような新しい視点が開拓されるのか。ブルデューが、馴染みのあるラテン語habitusを社会学的人間理解の中心に持ち込むことによってもたらされた、ヨーロッパ的な人間理解のバイアスとはどのようなものであったか。それは、マックス・ヴェーバーが「エートス」(ἦθος)という、やはり古典ギリシア語由来の言葉を社会学においてとりあげたことと、どのように関わっているのか。以上であった。

さらに、スラヴ社会からヨーロッパ・ラテン社会へと復帰しようとしているウクライナ人やその社会にとって、日本の社会学者がP.ブルデュー

やM.ヴェーバーの議論のバイアスを論じることの意味は何か。当時客員教授として滞在していたパリ大学(アクィナスがその昔教鞭をとっていた大学(1269-1272)で、かれはその後ローマに移動して人間本性の研究のために古典古代の著作、とくにアリストテレスの著作『ニコマコス倫理学』を読み込んだ)からキープに移動しての講義でもあったので、歴史の空間と地理的な空間をパリ、ローマ、キープ、そして東京の間で行き来しながら、それらの文化的な差異にも言及しながらの講義になった。同じ年、わたしは5~7月にハンブルク大学でも研究滞在をしていたので、ゲルマン文化とロシア・スラヴ文化の間にある緊張を感じながらの国立キープ大学における講義でもあった。

1時間半の講義と質疑応答であったが、わたし自身、論点を深めるのにとっても有益な時間であった。機会を与えてくださったアンドリー・ゴルバチュク先生(国立キープ大学社会学部長)に、ここに記してあらためて感謝の意を述べたい。

〔注〕

- (1) 世界保健機関(WHO)が2020年7月11日に発表したメッセージでは、回避すべき「3密」とは、“1) Confined and enclosed spaces、2) Crowded places、3) Close-contact settings”とされ、1)の定義が英語ではやや厳密になっている。
- (2) ピエール・ブルデュー(1990、石井洋二郎訳)『ディスタンクションⅡ』藤原書店を参照。なお、本稿の基本視角「ヘクシス」をめぐる諸論点に関しては、拙著(2008、2013)『グローバリゼーション、市民権、都市ヘクシスの社会学』春風社および明治学院大学社会学部社会学科編(2020)『社会学とはどのような学問か』Web完全版(とくに「〈ヘクシスの社会学〉における研究対象について」の部分)を参照。

「ヘクシスの社会学」(A Sociology of Hexis)には、その社会的まなごしを構成する鍵概念がある。以下、それを紹介しておこう。「始原・端緒-始まり」「終局-目的・目標」「質料-材料」「形相-かたち」「可能態-可能性」「現実態-現実の行動」「完全現実態-完成された姿」「卓越性-優秀性あるいは徳」「原初的な卓越性-生まれもった卓越性」「最高の卓越性-完成された卓越性」「卓越性と劣等性の争い(=闘争)-優秀性をめぐる争い(=闘争)」「倫理的卓越性-性格・人柄の優秀性あるいは徳」「知性的卓越性-思考の優

秀性」「行動性向－振る舞いの特性や実現方向性」「魂の性向－心理的な行動性向」「身体性向－フィジカルな行動性向」「選択性向－選択の特性や傾向」「文化的身体」「価値－値打ち」「比例－算術的比例、幾何学的比例」「比例的互惠行動－比例に応じた相互援助行為」「ロゴスを持つ魂－言語的な精神・心理」「ロゴスを持たない魂－非言語的な精神・心理」「それ自体として反している－本来的に対立している」「付帯的な仕方ではあり得ないもの－必然性原理」「それ以外でもあり得るもの－偶有性原理」「魂の自然認識的な対象－自然科学的な研究対象」「魂の事象認識的な対象－人文・社会科学的研究対象」「すぐれた精神－幸福」などである。

2つある場合、最初のものは古い哲学用語であり難解であるが、2番目のものは現代文の中でも使用可能な言葉づかいである。ただし、2番目の用語であっても、使い方に説明が必要な場合があるかもしれない。

- (3) McCally, K., 2014, p.37.
- (4) 木幡, 1975, p.47.
- (5) アリストテレス (2001) (中畑正志訳)『魂について』京都大学出版会の補注Cを参照。
- (6) クリスチャン・キザーズ(2016)『共感能－ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換－』麗澤大学出版会。また、浅野孝雄・藤田哲也(2010)『ブシューケーの脳科学－心はグリア・ニューロンのカオスから生まれる－』産業図書、ジョシュア・D.グリーン(2015)『モラル・トライブズ－共存の道徳哲学へ－(上下)』岩波書店も参照。
- (7) ノーベル賞受賞者の山中伸弥氏(京都大学iPS細胞研究所所長)は、「今後の日本人と新型コロナウイルスとの闘いの行方を左右する重要な要素」は、「ファクター X」の解明にあると述べている。日本におけるコロナ感染の拡大が欧米に比べて緩やかなのには、絶対に何か理由があるはずで、それをかれは「ファクター X」と呼んでいる(「なぜ日本の新型コロナ死者数は少ないのか?－山中伸弥が橋下徹に語った”ファクター Xの存在”」『文藝春秋』2020年6月号)。

医学分野では方法論のイメージがややずれるかもしれないが、「ファクター・アナリシス」(factor analysis)とは通常、数学や統計学で言う「因子分析」のことで、「クラスター・アナリシス」(cluster analysis)、すなわち「クラスター(集団、群れの)分析」で把握しようとする「空間内の集合性」を個別因子に分解したときにその因子内に共通に発現している現象を捉えようとするものである。これはライブニッツ的な「モノド」(μονάς, monas, 単子)の分析やデカルト的な「エゴ」(ego of 'cogito ergo sum,' 私)の分析の発想であり、「ファクター」(factor)という英語はもともと、ラテン語の動詞faciō (do, make)の過去完了分詞factus (done, made)から来ていて、その人称形factor

(a doer, maker, performer.日本語で行なう人、作る人、遂行する人)が原型になっている。これ以上分解できない「一人の能動的な主体」を単独にイメージしている言葉である。

一方、「行動性向」(ヘクシス)の研究は、「モノドやエゴとしての身体間の相互作用」および「相互行為する身体の間と物理的および社会的環境との関係」を対象とする研究である。

- (8) ここで採用している「積極的な条件としての行動性向」(hexis as an active condition)という概念は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』のJoe Sachsによる新訳(2002, Nicomachean Ethics, Hackett Publishing Company)の解釈を参考にしている。
- (9) 「知性的卓越性」が創り出す「身体性向としての社会的距離」の理解に関しては、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第6巻第10, 11章を参照のこと。ここで列挙された古典ギリシア語の現代英語における解釈に関しては、H.Rackham (1934), Harvard University Press, pp.358-359の訳注c、およびT. Irwin (1985), Hackett, pp.164-166を参照した。また、「物分かりのよさ」(εὐσυνεσία)という日本語訳は、高田三郎訳、岩波文庫版と渡辺邦夫・立花幸司訳、光文社文庫版を参考にした。
- (10) 当時の呼称で、Greens, new religious movements, punk, radical lesbianismなど(Berking, H. und Neckel, S. (1990)参照)。東西冷戦終了とともに姿を現したこうした「新しい政治文化」は、当時の文脈では「再帰性の民主化」(democratization of reflexivity)の試みでもあった(Melucci, A., 1989を参照)。

〈参考文献〉

- Irwin, Terence, trans. (1985), Nicomachean Ethics, Hackett Publishing Company.
- 浅野孝雄・藤田哲也(2010)『ブシューケーの脳科学－心はグリア・ニューロンのカオスから生まれる－』産業図書。
- アリストテレス(2001)(中畑正志訳)『魂について』京都大学出版会。
- アリストテレス(1971, 1973)(高田三郎訳)『ニコマコス倫理学(上下)』岩波文庫。
- アリストテレス(2015, 2016)(渡辺邦夫・立花幸司訳)『ニコマコス倫理学(上下)』光文社文庫。
- 岩永真治(1992)「アフター・フォーディズム時代の空間的諸形態－(情報型発展様式)のインパクト－」三田哲学会編『哲学』第93集所収。
- 同(1999)「〈研究ノート〉アリストテレスの所有論－社会形成の原理の探究－」明治学院大学『社会学・社会福祉学研究』第106号所収。
- 同(2008初版, 2013改訂版)『グローバリゼーション、市民権、都市－ヘクシスの社会学－』春風社。
- 同(2020a)「〈ヘクシスの社会学〉における研究対象

「フィルター X」とは何か

- について」明治学院大学社会学部社会学科編『社会学とはどのような学問か』Web完全版所収。
- 同 (2020b)「卓越性の涵養と教育目標としての〈公共善〉—まちづくりのアクティヴ・ラーニングを支える理念—」明治学院大学ホームページ『明学について』「MG⁺: ARCHIVE」11月所収。
- 加茂英臣 (2009)「習熟による欲望の変貌—ヘクシスとフロネーシス—」千葉大学教育学部編『研究紀要』第57巻所収。
- キザーズ, クリスチャン (2016)『共感能—ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換—』麗澤大学出版会。
- Giddens, Anthony (1990) *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press. 松尾精文、小幡正敏訳 (1993)『近代とはいかなる時代か? モダニティーの帰結』而立書房。
- グリーン, ジョシュア・D. (2015)『モラル・トライブズ—共存の道徳哲学へ— (上下)』岩波書店。
- 木幡順三 (1975)「技巧と品位」『美学』第25巻第4号所収。
- 小林信行 (1999)「Hexis論のための基礎的考察—アリストテレス『ニコマコス倫理学』研究—」福岡大学総合研究所編『人文論叢』第31巻第3号 (大学創立65年記念論文集) 所収。
- 斉藤日出治 (2019)「空間的身体の発見—コンメンタル『空間の生産』—」『近畿大学日本文化研究所紀要』第2号。
- デュルケーム, エミール (1980) (小関藤一郎訳)『分類の未開形態』法政大学出版会。
- フジテレビ番組『情報プレゼンター とくダネ!』 (2020/7/30) 朝の報道「防カメに犯行瞬間…大量〈落書き〉に漁師怒り」
- ブルデュー, ピエール (1990) (石井洋二郎訳)『ディスタンクシオン I II』藤原書店。
- Berking, H. und Neckel, S. (1990) “Die Politik der Lebensstile in einem Berliner Bezirk: Zu einigen Formen nachtraditionaler Vergemeinschaftung,” *Soziale Welt*, 7.
- Mauss, Marcel (1934) “Les techniques du corps,” *Journal de Psychologie*, XXXII, ne, 3-4, 15 mars - 15 avril 1936. Communication présentée à la Société de Psychologie le 17 mai 1934.
- McCally, Karen (2014) “Seeking ευδαιμονία,” *Rochester Review*, March-April.
- Melucci, A. (1989) *Nomads of the Present*, Radius. 山之内靖・喜堂嘉之・宮崎かすみ訳 (1997)『現在に生きる遊牧民 (ノマド)』岩波書店。
- 山中伸弥・橋下徹 (2020)「なぜ日本の新型コロナ死者数は少ないのか?—山中伸弥が橋下徹に語った”フィルター X の存在”—」『文藝春秋』6月号所収。
- Rackham, H., trans. (1934) *Nicomachean Ethics*, Harvard University Press.
- Sachs, Joe, trans. (2002) *Nicomachean Ethics*, Hackett Publishing Company.
- 渡辺明照 (2010)「性起と性具—アリストテレスのキネーシス論とヘクシス論—」『比較思想研究』第37号所収。



講演会

特集 コロナ禍における変化

エッセイ

明治学院大学社会学部機関誌の歩み

.....丸山 義王

エッセイ

卒業生インタビュー

卒業論文タイトル一覧
社会学部

修士論文・博士論文タイトル一覧
社会学部研究科

明治学院大学社会学部機関誌の歩み

丸 山 義 王*

1 最初の機関誌『社会事業研究会雑誌』

1928(昭和3)年4月に田川大吉郎明治学院総理により社会科が高等学部設置された。1934(昭和9)年4月には、社会科は「社会事業科」と改称されたが、この時の研究の軸となって活躍したのは、明治学院社会事業研究会であった。この会は、三吉豊太郎教授の指導により組織され、1936(昭和11)年1月には『明治学院社会事業研究会雑誌』を発刊したが、現存するのは、第2輯(昭和12年12月10日)と第3輯(昭和14年2月20日)である。当時の学生生活の核となっていたのが、学生セツルメントであり、第1回は1930(昭和5)年2月に大崎町居木橋に開設、1936(昭和11)年12月には、第2回セツルメントが荏原中延に開設された。『社会事業研究会雑誌』第2輯には「明治学院セツルメントの日誌」(当時はセツルメントと表示)が特集されており、当時の児童の作文として「明治学院せつつるめんと 二年菅原敏子」が掲載されている。

「私たちは、明治学院せつつるめんとへいっています。そこは、はじめて出来た日よう学校です。けふの日よう日は、とごしこうえんにいきました。そして、とくなが先生と、中村先生がめかくしをしていました。私たちは、手をつないでまろくなりました。とくなが先生と、中村先生と、じゃんけんぽんをしました。中村先生がかちました。そしてとくなが先生がおばあさんでにげました。中村先生がおじいさんです。おじいさんが『おばあさん』といひますと、おばあさんが『はい』と手をたたきます。めかくしをしていますから、み

えませんので、あっちこっち、さがしてもなかなか、つかまれませんでした。だがとうとうつかまりました。みんな知らない人がきていましたが、あまりおもしろいので、まわりをかこんで、みんなで見っていました。『おばあさん』『はいよ』といって手をたたくので、みていた人やまろくなつて手をつないでいた私たちも、おもしろく、おもしろくて笑いました。先生たちがやめると、こんどは私たちがやりました。(小略)かえるとき一人の先生に、五人ぐらいづつ手をつないで、歌を歌ひながらかへりました。それから先生たちは、うちへとかえるので、みんなで、『ぐつとばい』といって、手をあげて、かえりました。」とくなが先生とは「徳永清」後の明治学院職員、中村先生とは「中村光明」後の名古屋Y・M・CA所属であった。子供の目を通して見た日曜学校の記述は他にはなく、当時の状況を知るには貴重な資料なのである。

しかし、1937(昭和12)年6月には、第2回セツルメントは閉鎖され、7月には北京郊外盧溝橋で日中両軍衝突し日中戦争が開始された。1941(昭和16)年12月には太平洋戦争が始まり、1942(昭和17)年4月には社会事業科は、「厚生科」と改称した。昭和19年4月の戦時下においては、「経営科」とさらに名称を変えた。1945(昭和20)年8月には敗戦、1946(昭和21)年4月には経営科は伝統のある「社会科」と戻され、天達忠雄が社会科教授に就任するのであった。

2 戦後の社会学部研究部の機関誌

終戦直後の学生の活動を『記念樹とともに』(明治学院大学社会学部50年記念特集)において見たい。同書の95頁では、1946(昭和21)年時点での課

* 1963年社会学科卒業・卒業生部会名誉会員

外活動の主体となった12の文化団体をあげている。「文学部(50名)、中国研究部、映画演劇研究部、英語部(50名)、経済学研究部、共済部、音楽部、新聞部、社会科学研究部(80名)、商業研究部(90名)、宗教部(40名)、雄弁部であった。特に社会科の学生は学園民主化の担い手となったサークル『社会科学研究部』に入って大いに活躍した。(略)昭和23年2月には全学生による学園民主化をめざす運動として、学生自治会が設立された。これらの運動の中心は社会科学研究会であり、これに入会していた社会科の学生であった。」

ここに、1949(昭和24)年社会科卒の今井洋一氏の提供による明治学院社会科学研究部機関誌『自由旗』創刊号1947(昭和22)年5月がある。そこには「自由旗」と題する長い詩が掲載されているので、第1節を挙げたい。「自由旗のヘンボンと繻へるを見よ。朝の陽はわれらの旗を藍色に染め、午後の陽は、金色にかがやかし、落日にわが旗は眞紅なり」とある。さらに「社研の足跡」(唐澤建男)によると「一昨年十一月学友会の発足に先立って社会科学研究部(当時は社会科学研究会)が同志数名によって設立されてから既に一年半を経過した。爾來我々は一貫して真理に対する激しい憧れを学究的良心に忠実たるべく努力してきた。この間部員も約五十名を数えるにいたった」とあり、学生が「社会科学研究部」を組織して活動を開始する経緯がよくわかるのである。しかし『自由旗』は翌年1948(昭和23)年5月15日には、『真理』(『自由旗』改題 増大号)となる。巻頭言には「其の意図するところは部員の研究発表の機関たらしめ相互の理論的水準を高めることにある」と述べられている。2号は同年6月20日発行の特集「19世紀ロシヤ経済学の発達」元本学院講師戸田武雄であった。3号は1948(昭和23年)年9月10日発行であり、「内外時評」においては、渡辺昭雄社会科三年「世界連邦案に対するソ連の見解」と題する論文がトップに掲載されている。第5号から『真理』は『あゆみ』と改題されている。

1952(昭和27)年4月には文学部社会学科が成立するが、同月15日には『社会学研究』が創刊第1輯として、社会学研究同人会により出されている。し

かし「この機関誌も第6号を発行する事になり、第6号より『社会』と名を改め、広く社会学、社会福祉学から原稿を集め、現代の問題を取り上げました」と編集後記(昭和33年2月9日)に書かれて、社会学研究部の部誌として再出発をするのであった。

3 『明治学院高商論叢』から『社会学会誌』への歩み

高商論叢の直系の前身は『商科会雑誌』であり、1926(大正15)年12月15日に創刊された。創刊の辞で石橋近三商科会会長は次のように言う。「我が商科会が、在学生、卒業生間の親睦を図り、堅実なる校風的美を發揚せんが為に生まれ出たのは、今から6年半前、商科第1回卒業生諸君が、将に学院商科の先駆者として、白金の丘より、實社会に巢立ちせんとする間際の大正11年2月末であった。」その表紙には右上隅には当時の3号館の円柱と石段のカットが掲載されている。そして1928(昭和3)年に高等学部商科が分離独立して高等商業部となったため、この商科会雑誌も同年12月18日発行の第3号(創立拾周年記念号)から「学友会雑誌」と改称した。石橋近三教授は巻頭言「創立拾周年を迎えて」において「高等商業部の前身である高等学部商業科が、神の特別使命を帯びて大正七年四月白金台上の狭隘な發電所式の建物に設置されてから、本年四月改称独立をなすに至るまでの過去の星霜は、実に我が学部の建設時代であると云うことが出来やう」と言う。さらに「学友会雑誌」は、第4号をもって、「高商論叢」へと発展するのであった。1931(昭和6)年2月23日には、明治学院高商学会により『明治学院高商論叢』第1号が創刊される。創刊号の論説のトップには「累進的課税原理と我が国の租税政策」嶺岸忠之助(編集委員)、「ダムピングに就いて」齋藤茂夫(編集委員)、続いて校友、研究生等5名の論考が掲載されている。後11号1940年(昭和15)まで刊行され、1941(昭和16)年12月8日には対米英宣戦布告がなされるが、その12月23日には、同誌名を『明治学院論叢』と改題し、明治学院報国団によって、第12号を刊行した。巻頭言は、「新情勢に処しつつ」矢野貫城、論叢には「金融新体制

の意義」服部文四郎他5篇の論文が掲載されている。1943(昭和18)年9月21日には『明治学院論叢』第14号を刊行したが、以後、印刷事情悪化のため休刊した。12月1日には第1回の学徒出陣が遂行されている。しかし、1945(昭和20)年8月15日には終戦を迎えるのであった。

1949(昭和24)年2月15日、明治学院専門学校文経学会により、『明治学院論叢』復刊第1号(通巻第15号)を刊行する。神学者としての「イレナエウスの研究1」園部不二夫、「明治学院論叢の回顧」齋藤茂夫等8論文が掲載されている。2月21日には大学文経学部設置が認可され、第2部(夜)について3月18日に認可が下り、4月1日には、大学最初の入学式を挙行した。6月25日においては、文経学部の設置に伴い、明治学院大学文経学会により、『明治学院論叢』第16号を発行する。内容は「英国派社会主義の独自性」嶺岸忠之助、「社会革新の倫理的基礎」金井信一郎、「E・Jヒューズ著『ローマ教会と自由主義社会』について」磯部浩一、前号からの続篇として園部論文が掲載されている。編集後記で次のように述べる。「編集委員らは、磯部浩一、金井信一郎氏ら新進少壮の学者が競って本号に参加せられた労と好意とを謝し、併せて、我が学院に颯々たる新風をおくりつつあられることを、読者諸氏と共に学園のために喜びとしたい。」本号の編集は高谷、中島、平林、これに当たった。

1952(昭和27)年4月には、文学部社会学科となる。1953(昭和28)年11月は社会学科創立25周年に当たり、社会学会設立発起人会が開かれ、社会学会は、1954(昭和29)年11月10日に設立され、規約には「明治学院大学社会学科の卒業生、教員、並びに在校生を以て組織され、会員相互の研究及び親睦を図ると共に、明治学院大学社会学科の発展に寄与することを目的とする」とある。特に同窓生との結びつきを大切にするのは社会学会であり、この特色は今においても続いている。

1955(昭和30)年2月10日に、『明治学院論叢』通巻、第36号第1輯を『社会学・社会事業特輯』(明治学院大学文経学会)第1号として発行し、第25号まで発刊される。1970(昭和45)年10月15日刊の第26号(通巻165号)から同誌名を『社会学・社

会福祉学研究』と改題。1979(昭和54)年7月15日、同第50号(通巻第273号)を明治学院大学社会学会刊として発行する。

1956(昭和31)年12月1日付けで『社会学会会報』第1号が発行、社会学会設立総会の記事が掲載された。『社会学会誌』創刊号は、昭和33年3月に発行され、若林龍夫学長の「発刊の辞」をトップにして、4名の投稿があり、70頁ほどの学会誌であった。第2号は休刊とし、3巻から『社会学と福祉学』と名称を変更する。一方で社会学会では『記念樹とともに』(社会学科創立30周年特集)を昭和34年3月28日に発行した。その「30年記念事業計画メモ」には『社会学会誌』の記念特集号の編集発行として「これは論文・随想・三十年史・資料等を広く集め、苦節三十年の歩みを回顧し、将来への発展への契機ともなるようなものにした」と、その標題も『記念樹とともに』と決定した」と述べられている。この号の「社会学科年表」には、1938(昭和13)年1月「雑誌『社会事業』に学院社会事業科学生による『夜もすがらルポルタージュ、ルンペンと語る』を掲載、好評を博す」と報じられている。さらに、この号の最終頁にはこの「ルポ」の抜粋が掲載された。この筆者は徳永清であった。「父親を一つの時、母親をはたちの時失った。上京して浅草のヤスリ屋の伯父さんのところで育った。そこで11年働き、追い出されてとうとう芝公園の共同便所の裏にやってきた。彼はそこで一匹の猫を相手にして、『どうなってもいい』生活に馴染んだ。朝早くと夕方遅く公園の弁当屋の店先を掃く。すると残飯にありつける。猫を籠に入れてバタヤもやる。だが楽天主義は三銭か四銭稼ぐともう厭になってしまう。そこで共同便所裏の我が家に帰る。寒さにふるえながら一枚の筵をかぶる。『どうなってもいい』と云うのが唯一の哲学である彼は、全くの『名もなくせりふを持たざる浮浪人』である。もう泣くことなどは忘れてしまった。猫があくびをする。彼もやる。そこで主従はまるくなって寝る。それだけである。それだけの人生である」と述べて浮浪者の人生を世に伝えている。前述のように学会誌は、創刊号が『社会学会誌』(1958(昭和33)年3月)で、第2号が欠、

そして、30周年を契機に学会誌として『社会学と福祉学』が第3号（昭和35年3月26日）として発刊された。若林龍夫文学部長は巻頭言『『社会学と福祉学』の刊行を喜ぶ』において「明治学院大学社会学会誌の第3号を今、会員諸氏の手許にお届けできることは、特に喜ばしいことである。（略）そして34年の一カ年は全く大学院社会福祉学専攻の設置準備に費やされたが、昭和35年3月10日その認可を得たのである。これは東京で最初の社会福祉学専攻の大学院であり、しかも新装なった附設の児童相談所においてケースワーク、グループワークの基本的訓練をなしうるユニークな研究教育の機関である。この時に当たり会員諸君の調査研究をまとめ出版できることはまことに喜ばしく意味深いものがあるといわねばならぬ」と述べられた。『社会学と福祉学』は、第6巻までは年1回の発行であったが、1964（昭和39）年2月10日発行の第7巻から年2冊発行となる。第7巻第1号の巻頭言において若林龍夫社会学会会長は「（前略）2回のうち1回は、従来型式を踏襲して、主として在学生会員の研究業績を収録し、いま1回は、卒業論文を編集掲載することになった。こうすれば、在学生は、先輩がいかに卒業論文と懸命に取り組んだかを知ることが出来るばかりでなく、これを常に左右に置くことによって学習上の示唆激励を受けることが大きいだろうと思われるからである」と述べられた。さらに第8巻2号、1965（昭和40）年3月27日では、巻頭言において若林龍夫社会学会会長は「2月1日文部省から社会学部（社会学科・社会福祉学科）の正式の認可証が交付された。これによって、学内外よりひとしく希望されていた社会学及び社会福祉学の研究教授の中心機関として同学部は、大学院社会福祉学専攻とともに、ここに確固とした基礎を置かれることとなったのである」と述べられた。

1965（昭和40）年9月10日には、『明治学院報』が発刊されたが、この学報において社会学部の開設について、「学部・学科の増設および学生入学定員変更が認可さる。昭和40年1月25日に、社会学部社会学科（入学定員80名）社会学部社会福祉学科（入学定員80名）および社会学部第2部社会

学科（入学定員80名）の増設が認可され、昭和40年4月1日より同学部・学科が開設された」と大きく報じられている。このように社会科は社会学部として昇格して独立した。そして『社会学と福祉学』は、「社会学部新設 社会学会10周年記念」（第9巻第1号）として明治学院大学社会学会により、1966（昭和41）年2月に発行された。若林龍夫明治学院大学学長は社会学会会長として巻頭言で次のように述べた。

「昭和40年4月からいわゆる『社会科』は画期的な発展を遂げた。これまで文学部社会学科であった『社会科』は社会学部となり、その中に社会学科と社会福祉学科を置いて専攻分野を明らかにし、社会の要請に応ずるとともに、新世代に生きようとする若い人々の向学の熱望にこたえることとなった。このことは『社会科』に学ぶ諸君、学んだ諸君または関係者一同にとって深い感動と大きな喜びをもたらすものであるばかりでなく、明治学院大学の研究と教育にとっても大きな前進の一步であるといえるであろう。」

1968（昭和43）年3月11日には、11巻1・2合併号発行、さらに11月には12巻1号を発行した。大学紛争が10月に始まり発行は中断。館学部長の時の1972（昭和47）年5月には改めて12巻を発行、1973（昭和48）年9月に13巻が発行された。この社会学会誌においては表紙のタイトルを平仮名で『しやかいがつかい誌』と改めている。編集後記には「『社会学と福祉学』として発行されていた前年度までの学会誌が卒業論文集として編集されていたのに比して、私達は現実に学会活動を担っている諸個人、諸集団が追求している諸課題 - 運動に視点をおいて本誌を編集したと云える」と述べられた。しかし、1974（昭和49）年には会費を徴収すること自体が問題となり、会費の徴収を中止したため学内学会は活動ができなくなり、『社会学会誌』の発行も中止してしまった。1980（昭和55）年1月には「社会学部友の会」が発足した。『社会学部20年の歩み—記念樹とともに—』（1986（昭和61）年刊）には、「学会誌からみた明治学院大学社会学会の歩み」が掲載されており、当時の渡辺雅子助教授が、『社会学会誌』の内容を昭和33年3月

発刊の1巻から13巻(昭和48年9月)まで精しく記述されている。なお、1996(平成8)年2月23日には、『社会学部30年の歩み—記念樹とともに—』が発刊された。なお、別冊として学部設立以前の1951(昭和26)年度から1996(平成8)年度までに提出された全卒業論文の表題と氏名を載せた冊子「社会学部卒業論文一覧」も共に出版されている。2015(平成27)年11月14日には『社会学・社会福祉学研究』145号が、『社会学部50周年記念論文集』として発刊された。「社会学部50周年記念エッセイ」の冒頭には、野沢慎司社会学部長の「50周年を迎えた社会学部の現在 - 伝統の継承と革新」という記念号に即した一文が眼を惹く。その掉尾において次のように言う。「社会学部がそのアイデンティティと連帯に関して感じる危機感は、20年前に比べて遙かに強まっている。厳しい外部環境の下では、そして内部的に連帯が拡散していく状況下では、二学科がそれぞれの核を明確にし、かつ連携し、その上で学部が統合体としてのアイデンティティを維持し、この先の10年、20年と前進していくことが、少なくとも過去50年間よりも難しくなっている。困難を乗り越えるためには、内部的に情報を集めて分析する自己評価だけでは不十分だ。より広いネットワークがもたらす革新的な知恵の融合が必要である。そのために、これまでに明学に関わった多様な人たちの声を広く集め、それに耳を傾けるべきではないか。そのような考えに立って、この特集号(そして学内学会誌『Socially』の特集号)は編まれた」と述べられた。明治学院社会学部の未来への発展のために耳を傾けるべき御発言を多としたい。

なお、上記のように、2016(平成28)年3月12日には『Socially』24号(明治学院大学社会学部創設50周年記念号)が発刊されている。この両方を併読することにより、明治学院社会学部の功績を実感できるのである。

4 大学院紀要としての『社会福祉学研究』と『社会学専攻紀要』

1965(昭和40)4月に社会学科は社会学部として独立し、その2年目に1967(昭和42)年4月

には、大学院社会学研究科(修士課程)が開設された。これを機に『社会福祉学研究』が大学院社会福祉学研究会によって創刊された。その編集後記には「我々は、研究室にいる者も、現場にいるものも、都内近辺の人々を中心に月例研究会をやっていたが、今後は遠くに去ったものも合宿により、研究成果を出し合い、年1回、レポートを出そうということになり、いよいよ創刊号をだすことになった」とある。

『社会福祉学研究』第2号は、1968(昭和43)年10月に発行の予定であったが、学園紛争のため中止となった。1965(昭和40)年4月には、文学部社会学科を独立させ、新たに社会学部(社会学科・社会福祉学科)、第二部社会学科を開設した。その後1971(昭和46)年12月1日には、『社会福祉学研究』(社会学研究科社会福祉学専攻10周年記念号)が刊行され、編集員を代表して天達忠雄教授は「まえがき」で次のように言う。

「大学院に文学研究科社会福祉学専攻修士課程が設置されたのは、昭和35年4月であり、丁度昨年で10年目を迎えたこととなります。その間、昭和42年には社会学専攻修士課程が増設され、また翌43年4月には、社会学・社会福祉学博士課程も設置されたことによって、研究科の体制が一応確立することができました。そしてこの10年間に修士課程修了者は48名を数え、その大部分の諸君は社会事業の研究実践活動にはげまれています。(中略)とくに今回、この記念論文集の編集に当たって考慮したことは、次のことにあります。それは従来、卒業生諸君の自主的、積極的な研究活動が多方面に進められてきておりますが、その一連の研究成果を中心に発表することによって、これからの社会事業研究の歴史と伝統を築いていく礎石になることは疑いないと思います」と述べて、卒業生の功績を謝するのであった。

1972(昭和47)年11月1日には『社会福祉学研究』2・3号合併号が発刊された。若林龍夫教授は「巻頭の言葉—再刊を祝いて—」において「第2・3合併号は見らるる通り、創刊号とは異なって面目を一新し(小略)なににもまして実践的な立場から調査研究されている。あるいは地味で華々しく

ないといわれるかもしれないけれど、しかしこの汲めども尽きない滋味を味わいつつ、一步一步進むところに科学的前進がある」と述べている。

1976(昭和51)年には『社会福祉学研究』は『社会福祉学』(復刊第1号・重田信一教授退任記念号)として大学院社会学研究科・社会福祉学専攻により発行された。巻頭言の後尾において、福田垂穂社会福祉専攻主任は次のように述べている。「時あたかも、専任者としての先生にご指導いただいた最後の院生諸君を中心にして、数年ぶりに研究誌発刊の運びとなった。40年代の我が国における、福祉施設や従事者の数の増大が、石油ショック以後の社会情勢の中で、改めて福祉の本質とそれに応える従事者の養成に我々の関心を呼び戻している。処を異にしても重田先生が益々お元気で、引続き後進の指導にお当たり下さるよう祈るものである。」その後は1978(昭和53)年のみ休刊、1994(平成6)年には17、18合併号として、2007(平成19)年度には第32号が刊行されて、今に至る。そして一方では、1967(昭和42)年4月に誕生した社会学専攻修士課程の設立10周年を記念して1977(昭和52)年2月には、『社会学専攻紀要』が創刊された。表紙には「明治学院大学大学院社会学研究科『社会学専攻紀要』一創立十周年記念論文集—1」とあり、「刊行の辞」においては川本彰教授が次のように述べる。「明治学院大学大学院社会学専攻課程は昭和四十二年四月に誕生した。いまふりかえって草創からの十年間を回顧すれば、よくぞいくた山坂をのりこえてきたの感がする。(略)いま十周年を迎えてその記念に『大学院紀要』が発刊された。本年は時あたかも本学院百周年にもあたる。われわれとしては思いをあらたにして、本学院の歴史と伝統をさらに榮あらしめるために、本学院の一翼たる大学院を一層充実していかなばならない」この紀要により研究の場が大きく開かれたのであった。

記念論文集の第2回は、1987(昭和62)年11月21日に『社会学専攻創設立二十周年記念論文集』として発刊された。相川書房版の298頁にわたる論文集であった。「序」の掉尾において社会学専攻主任の三浦恵次教授は次のように言う。「とにかく、

歴代の主任教授を中心とする内外の教授陣のご協力と六十二名の修了者の研鑽により、この種の学問的伝統を築くことができ、その上で社会学専攻二十周年を迎えることができました。本紙の刊行に当たって、今後の社会学専攻の教育、研究活動にはこの伝統を継承し、『人類の文化と福祉の増進』に寄与する決意を新たにしたい。」

第3回目は、1998(平成10)年3月30日に『社会学専攻紀要』第21号を『社会学専攻創設立三十周年記念論文集』として発刊した。記念挨拶「祝賀のなかで」大場健治学長は次のように言う。「とりわけ社会学、社会福祉学の大学院は、旧来のアカデミズムの枠を破る新鮮な学際的発想をその根底に置いていたから、全国の大学から畏敬をもって仰ぎみられる存在となった。社会学専攻設立三十周年を、全学あげて祝賀する所以である。」

2008(平成20)年3月7日には大学院社会学研究科『創設立四十周年記念論文集』(社会学専攻「紀要」第31号)を発刊する。この第31号においては、創設30周年の第21号の企画を継いで1968(昭和43)年度生から2006(平成18)年度生まで、125名の「修士論文タイトル」を特集した。この時の編集については西坂仰教授のご指導のもと、大学院特別研究生としての筆者が携わっている。これらの記念論文集により社会学専攻創設以来の院生の研究成果を顧み、今後の研究成果の基とすることを願うのである。

5 「社会学・社会福祉学会」と『Socially』

「社会学・社会福祉学会」の設立については、学内学会設立準備委員会は次のように言う。「これは、昨今の学生諸君に対して必要かつ体得してほしいと考えられる自主的な学習・研究能力の向上それによる学習・研究活動の活性化を企図するものであり、又、卒業生の皆さんに対しても、それぞれの社会諸分野での実践的研究的活動の促進・充実の一助ともなり、これらが相互に交流し合いつつ、より一層の充実発展を目指し、学生、卒業生、教員の三者の友好関係の中で、ユニークなよりよい社会学部を築いて行きたいと願っているものです」(「通知」1991年4月20日)以上のようにし

て、学園紛争のために解散した社会学会は、1991(平成3)年6月1日には設立総会を開き「社会学・社会福祉学会」として出発した。

1993(平成5)年3月31日には、『Socially』が創刊された。加藤雄司社会学部長は「社会学・社会福祉学会誌『創刊』に寄せて」において「ここに学会誌を発刊するに際し、『再刊』ではなく『創刊』とするのは、20年の長きにわたった発刊停止期間のためではなく、前会誌が主として、学術文科系のサークルを中心とした調査研究を掲載することが多かったのに対して、新しい学会がより広範なメンバーを会員としているために、会誌の投稿者も多様であり、一方で研究的なレベルを高め、一方で学生の勉強意欲の向上をはかるという多面的な意図、企画を持つが故である」と述べた。再建した「社会学・社会福祉学会」は教員、学部学生、大学院生、卒業生までを包含した新しい組織に対応するのであった。

現在、『Socially』は2020(令和2)年3月16日には28号が発刊されて、「社会学・社会福祉学会」の活動の内容を克明に伝えている。

明治学院社会学部機関誌の変遷(文責・集者)

- 1925(大正14)9月 神学部にて科外講演として社会講座開設。
2月25日 『明治学院神学部学報』第1号発行。
1926(大正15)12月15日 明治学院高等学部商科會『商科會雑誌』創刊。
1928(昭和3)4月 高等学部には社会科を設置(3年制、第1回入学生は25名)。高等学部商科が分離独立して高等商業部となり、12月18日に明治学院高等商業部學友會『商科會雑誌』創立拾周年記念3号を発行し、『學友會雑誌』と改称して、4号まで発刊。
1930(昭和5)2月 荏原郡大崎町居木橋に第1回「明治学院セツルメント」を開設。
1931(昭和6)2月23日 『明治学院高商論叢』創刊。
1932(昭和7)3月 社会科第1回卒業式(12名卒)
4月 セツルメントを品川区東広町移転。
1933(昭和8)12月23日 『高商論叢』第4号高等商業部創立拾五周年記念論文集発行。
1934(昭和9)3月 セツルメントを閉鎖。
4月 社会科を社会事業科に改称。
1936(昭和11)1月 『社会事業研究会雑誌』発行。
12月 第2回セツルメントを荏原中延374番地に開設。
1937(昭和12)6月 セツルメント閉鎖。2輯『社会事業研究会雑誌』12月10日発行。

- 1938(昭和13)1月 雑誌『社会事業』に社会事業科学生による「夜もすがらルポルタージュ『ルンペンと語る』」掲載し、好評を博す。
12月23日 明治学院高商學會『高商論叢』9号創立20周年記念号発行。
1939(昭和14) 第3輯『社会事業研究会雑誌』発行(2月20日)。
1940(昭和15)4月 高等学部東亜科設立。
12月 『高商論叢』11号(皇記二千六百年)発行。
1941(昭和16)12月23日 『高商論叢』12号を『明治学院論叢』と改名。
1942(昭和17)4月 社会事業科を厚生科に改称。
1944(昭和19)4月 戦時学校統合令で明治学院専門学校となる。厚生科を経営科に改称。
1946(昭和21)4月 専門学校を改組し、経営科を社会科に改称。
1949(昭和24)4月 専門学校から大学昇格。文経学部社会学科設立。二部に社会学科併設。文経学会は『明治学院論叢』通巻15号を2月15日に復刊1号として発行。
1952(昭和27)4月 大学は文学部と経済学部に分離、文学部社会学科成立。『社会学研究』第1輯創刊、社会学研究同人会。
1954(昭和29)11月10日 社会学会設立。12月1日付で『社会学会報』発行。
1955(昭和30)2月10日 『明治学院論叢』第36号第1輯を「社会学・社会事業研究特輯」第1号として発行。
1956(昭和31)3月 『社会学会誌』(明治学院大学社会学会)第1号がガリ刷り仮綴じで発行。5月明治学院大学児童相談所開設。
1958(昭和33)3月に本格的な『社会学会誌』第1号が発行、第6巻まで年1回発行。第7巻(昭和39年)から年2回発行。
1959(昭和34)『記念樹とともに』(明治学院大学社会学科30周年特集)3月28日刊。
1960(昭和35)4月 大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程を設置。『社会学会誌』3号を『社会学と福祉学』と改称し、3月26日に発刊。
1962(昭和37)4月 児童相談所が家庭福祉研究所となる。11月 『明治学院論叢』第72号で文経学会「社会学・社会事業特輯」開始。
1965(昭和40)4月 文学部社会学科は社会学部(社会学科・社会福祉学科)として独立。
1966(昭和41)『社会学と福祉学』9巻1号(社会学部新設社会学会10周年記念号2月刊)。
1967(昭和42)4月 大学院に社会学専攻修士課程設置され、『社会福祉学研究』創刊。
1969(昭和44)4月 大学院に社会学専攻・社会福祉学専攻博士課程設置。8月1日 広報誌『白金通信』発刊。10月大学紛争が起り、学会誌の発行が中断する。
1970(昭和45)10月15日 明治学院論叢「社会学・社会事業特輯」第26号通巻第165号を『社会学・社会福祉学研究』

明治学院大学社会学部機関誌の歩み

- と改題。
- 1971(昭和46)4月 相談所を「社会学部附属研究所」と改組。
10月15日 明治学院論叢「社会学・社会事業特輯」第26号(通巻第165号)を『社会学・社会福祉学研究』と改題。
12月1日 『社会福祉学研究』社会学研究科社会福祉学専攻10周年記念号を出版。
- 1972(昭和47)3月 『研究所年報』創刊。相談所を「社会学部附属研究所」と改組。
11月1日 大学院社会福祉学研究会『社会福祉学研究』(社会学研究科社会福祉学専攻)2・3号合併号。
- 1973(昭和48)9月 『社会学と福祉学』13巻を『社会学会誌』(実物の表紙には「しゃかいがっかい誌」と誌名変更したが、翌年には発行を中止。
- 1976(昭和51)3月 大学院社会学研究科・社会福祉学専攻『社会福祉学』(復刊1号)重田信一教授退任記念号。
- 1977(昭和52)11月1日 『明治学院百年史』刊行。
- 1978(昭和53)2月 大学院社会学研究科では『社会学専攻紀要』(創立十周年記念論文集)第1号を創刊。
- 1979(昭和54)1月13日 社会科設立50周年「社会学部友の会」を設立、同日に『記念樹とともに』明治学院大学社会学部50周年特集を刊行。
6月25日 『社会学・社会福祉学論集』刊行(社会学部76年度生)。
7月15日 『社会学・社会福祉学研究』50号(通巻第273号)を明治学院大学社会学会編として発行。
- 1985(昭和60)4月 横浜校舎開校。
- 1986(昭和61)3月 社会学部20年の歩み『記念樹とともに』(社会学部設立20周年記念事業委員会発行)。
- 1987(昭和62)11月21日 大学院社会学研究科社会学専攻創設『二十周年記念論文集』(『社会学専攻紀要』第11号)発行。
- 1989(平成1)4月 『社会学とはどのような学問か』創刊(社会学部社会学科)。
- 1990(平成2)3月 『学生相談室研究紀要』第1号刊行。
- 1991(平成3)6月1日 社会学・社会福祉学会設立。
- 1992(平成4)4月25日 「学内学会会報」創刊。
- 1993(平成5)3月31日 『Socially』創刊(社会学・社会福祉学会)。
- 1996(平成8)2月23日 社会学部30年の歩み『記念樹とともに』発行。
- 1998(平成10)3月30日 大学院社会学研究科社会学専攻『創設三十周年記念論文集』(社会学専攻紀要第21号)発行。
- 2002(平成14)1月 大学院社会学研究科社会福祉学専攻創設40周年記念『社会福祉学』「転換の10年を振り返って」発行。
- 2005(平成17)7月 社会学部設立40周年記念「卒業生と在学生が語る社会学部」明治学院大学社会学部刊行。
- 2006(平成18)3月31日 特集社会学部40周年記念『Socially』第14号。
- 2008(平成20)3月7日 明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻「紀要」第31号『社会学専攻紀要—創設40周年記念論文集—』発行。
- 2012(平成24)3月31日 『Socially』第20号を社会学・社会福祉学会「設立20周年記念号」として発刊。
- 2013(平成25)11月1日 『明治学院百五十年史』を刊行。
- 2015(平成27)11月14日 『社会学・社会福祉学研究』145「社会学部50周年記念論文集」を刊行。
- 2016(平成28)3月12日 『Socially』(社会学部設立50周年記念号)第24号発刊、特集「社会学部での学び」。
- 2020(令和2)3月16日 『Socially』第28号発行。
6月30日 「学内学会会報」第29号発行。



卒業生インタビュー

ITを活用して問題解決へ

—ICT(情報通信技術)アウトソーシング事業に従事する宇佐美果乃さんにお話を伺う—

.....東野 好花／石川 真衣

自分なりにコツコツと頑張り、ベストを尽くす

—東京オリンピック・パラリンピックに携わる小日向藍菜さんにお話を伺う—

.....石岡里佳子／伊藤 小春

言葉を人に届けるお仕事

—テレビ局員・アナウンサーとしてお仕事される重信友里さんにお話を伺う—

.....伊藤 小春／石岡里佳子

自分たちを通して社会全体を良くしていく

—障害を持つ当事者として勤務される白井誠一朗さんにお話を伺う—

.....木島 夏海／石岡里佳子

ITを活用して問題解決へ

—ICT（情報通信技術）アウトソーシング事業に従事する宇佐美果乃さんにお話を伺う—



面談者

宇佐美 果乃

(2013年社会学科卒業) [写真下段]

※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集

石川 真衣 (社会学科3年)

東野 好花 (社会学科2年)

インタビュー日時：

2020年7月24日 (金)

10時～11時

今回インタビューさせていただいたのは、IT企業でICT（情報通信技術）アウトソーシング事業に従事している宇佐美果乃さんです。

—現在どのようなお仕事をしているのか教えてください。

現在、パーソルプロセス&テクノロジーという会社に勤めています。プロセスとテクノロジーというだけに、IT系のスキルや技術をつかい、業務改善をする会社です。その中で、お客様の職場で、直接お客様の仕事を請負いながら、問題点を見つけて改善する、アウトソーシング（外注）事業に従事しています。

私は現在、セキュリティサービスに特化したIT企業様（お客様）のところに常駐し、エンドユーザーのIT環境に不具合が出ないようにフルタイムで監視したり、ネットワークの攻撃を防御するような設備をマネジメントする部署のサポートデス

クとして、お問い合わせや設定依頼の受付窓口を担当しています。

—直接お客様の元に行って業務を行っているのですね。

はい。他のお客様先だと、通信機器が故障したときに専門的な技術知識を使い改善を行う、2次受けと言われる窓口でのお仕事もあります。仕事内容的にはIT知識を生かした、いわゆる事務的なお仕事が多いです。

—IT企業に就職したきっかけはあるんですか？

実は、IT企業に就職したいと思って就職したわけではありません。もともと、問題解決やコンサルに興味があって、コンサルティング会社を探している中で、今の会社に出会いました。お客様先で仕事をするということは、色々な会社に行ける

ということなんですね。別の会社の人になっている感じがあって、様々な会社様のいろんな姿勢が見えるのが面白いなと思ったのも、この会社を選んだ理由です。ITという意味では私がパソコンに苦手意識がなかったので、あまり意識しませんでした。

—大学の在学中にITの勉強をしていて就職したというわけではないということですか？

はい。資格に関しても、学生時代にITに関する資格は全く取ったことがないです。資格って取って終わりではなくて、その時に必要なものとか、活用できるものって、どう活用するかが重要だと思っています。なので、大学の時にバイトのために取った資格はあってもITの資格は取っていませんでした。

—では、最初から知識がなくてもIT企業に入ってからITの知識を身に着ければ大丈夫ということですか？

はい。私の会社は新卒研修で2か月くらい、ある程度システムを構築できるような資格を取ることを前提として研修が行われています。なので入社前に資格がないといけないということはなかったですね。文系も多いです。私の同期でも文系の子が多いので。

—では、コンサルティングという、人のためになるお仕事をしたいと思ったきっかけは何ですか？

元々友達などの相談役に回るが多かったんです。その時に「ありがとう」と言われることが多く、あとは、私が大学の時にやっていた広報の活動も実は問題解決だったんじゃないかなと思っています。大学の時に白金通信の作成に関わっていました。その時、自分が作成に携わることで、周りで手に取ってくれる人が増えたり、手に取ってくれるためにはどういう企画をすればよいか考えるのが面白くて、実際に形や結果になっていくのが、自分の力になり、意欲になっていきました。

—それを就職につなげようと思ったのですね。

そうですね。自分が楽しかったものとか、出来ることを仕事につなげると、仕事の原動力になると思っています。

—先ほど、ITの資格は取っていなかったとおっしゃっていましたが、他に何か取っていた資格はあるんですか？

社会学部なので、社会調査士の資格は取りました。あとは、色彩検定という、色彩のバランスを見るような資格を取りました。資格はバイトの為に取りました。大学の時に洋菓子店でバイトをしていて、その仕事に活用する為です。商品のウィンドウを見ると、綺麗でかわいいとかあるじゃないですか。綺麗に見えると人が寄ってくるのかなと思って、そういう知識が欲しくて資格を取り、陳列について社員さんに相談したり、許可をもらってデザインしたりしました。それが売り上げとして結果になった時は嬉しかったです。

—コンサルティングや問題解決の部分につながりますね。

はい。実際やっていて楽しいし、やっていくうちに次の課題を見つけ解決したいという欲が生まれてくるので、それが全部、今の自分の問題解決のモチベーションや原動力になってるのかなと思います。

—インターンシップには行きましたか？

インターンシップには行っていません。就活のセミナーには通っていました。そこで出会った社会人の人とのコミュニケーションは、社会人としてのマインドを作る上で、とても学びになりました。就活に備えてという意味では、社会人の皆さんの求める事を知る為、どうしたら相手の立場に寄り添えるか考えて、動いていました。

—インターンに行かなくとも働く世界というのがある程度イメージできていたほうが、就職活動がうまくいくと感じますか？

はい。私の中でですが、インターンシップの目的は、「会社を知る事」「会社で働くを知る事」「社会人という立場を知る事」だと思っています。その「知る」というのが、独りよがりになってはいけないと思っています。例えばラブレター書くときも、相手のことを知ろうとすれば興味を持たないといけないじゃないですか。企業に対してもそういう感覚かな…。インターンシップに行って、その会社に興味を持ったり、知ろうとするのも良いと思うし、社会人がそもそもどんなことをしているのかわからなければ、そういう場に行けばよいし、インターンシップに行かなくても相手側に興味を持てるようになっていくことが、学生から社会人へのステップかなと私は思います。

—では、学生時代に力を入れていたことは先ほど言っていた広報以外に何かありますか？

勉強面では3・4年で取るゼミでの卒業論文ですかね。論文の内容を何にしようか迷った時に、自分の興味のあることをやろうと、テーマを「神社仏閣でJ-POPのライブを開催する意図とその社会的意味」にしました。質的調査で奈良に一週間くらい滞在して1日1人インタビューして調査したんですね。授業1つにしても自分の中に吸収しようという気持ちがあったなと思って。その時に、自分が求めているものもあるけど、相手が伝えたいことをどうしたら論文に入れられるとか、自分だけじゃなく相手の視点も学べることを、授業を通して知ったし、力を入れていたことだと思います。

—相手の視点を学ぶことが今働くうえでも生かされているということですか？

そうですね。問題解決というと、Q&Aで終わりだと思われる方が多いんですけど、私の会社で

大切にしていることは、「相手と一緒に歩いていく」とか「相手に何かあったときに一番相談しやすい相手になるという姿勢」で、そこに私も共感しているんですね。「一緒に歩む」というのは、ゼミの調査とかインタビューするときにも大切だと思うので、そういう学びが自分の今の仕事につながっていると思います。

—一人の視点から考えるというのは仕事につながるだろうと思って意識していましたか、それと特にそういうことは考えてなかったですか？

考えていなかったです。そもそも仕事につながると思って大学に通っていませんでした。何事も人間形成だと思うので、例えばコミュニケーション能力は別に社会人だから、学生だから必要とかではなく、人間として養っていくべきだし、何事もそうなのかなと思って。自分が出来る最大限のことをする中で、これを大切に生きていきたいなと感じた時に、そういう思いを持っている会社で仕事をしたほうが楽しく働けると思います。

—情報系は人との関わりが少なそうなイメージがあったのですが、人との関わりを大事にしている会社さんということでも参考になります。

私の会社は人材から派生している会社なので、ITから生まれたというよりは人に寄り添っていて、人との関わりを大事にしているのかもしれない。

—一人との関わり以外で会社を選んだ際の決め手は、例えば、お休みの制度とか会社の社風などは考慮しましたか？

福利厚生は、ある程度考慮しました。IT企業は男性が8割の会社が多いと思うんですけど、私の会社は男性6割女性4割で女性も多くて、管理職にも女性がいるし、産休育休を取った後に管理職になっている先輩もいます。オフィスもコラボスペースみたいなカフェっぽい、女性が居やすい環境になっていますよ。「私たちが働いていて楽し

くないと、お客様にも楽しく働ける環境を提供できないよね？」というのが会社の考え方なので、私たちが楽しめるために福利厚生や、週休2日などの制度をしっかりと整えていこうという考えが根底にある会社なのは、安心だと思います。新卒研修がない会社もあって、現場で学んでいく会社もあると思うんですけど、私はすぐ現場に入る不安が強かったので新卒研修があった事も会社を選んだ理由の1つですね。

—お仕事をする中でやりがいを感じられたことや、苦勞したことなどはありますか？

やりがいは、お客様にとって良い働きができた時ですね。自分が見つけた問題点を改善したものに、数字や業績という結果がついてきてお客様に感謝されたとき、やっけていて良かったなと思います。苦勞したことは、今もですが、この業界はITの知識も新しいものが出ると次々変わるし、お客様環境も、社会の求めることもそれに伴って変わるので、そこに追いつくために知識を入れたり、資格取得したり、日々学ぶのが大変だと思います。

—現在新型コロナウイルスの影響で、仕事の環境や、やり方が変化したことはありますか？

リモート推奨ではありますが、お客様先のお仕事を請け負っている関係上、現場によってリモートに変わっているところ、出勤しているところなど様々です。リモートからアクセスが出来るかどうか、自宅のPCで出来るかどうかなど、現場によりけりです。私が担当しているお客様先では、リモートを導入されているので、7割程度は在宅勤務です。

—もともとはリモートがメインではなくてお客様先に向く形がメインだったのですか？

そうですね。普段職場ではデスクトップで画面を2台使っていて仕事をしていますが、家のノートパソコン1台でネット回線が重かったりすると、

生産性が悪くなってしまうので、そういうところは自分たちで課題にしています。業務改善も主な仕事のひとつなので、問題をどうしたらミスなくリカバリーできるか話し合いながら調整していて、少しずつ生産性は上がってきています。そして出社は、対面での対応が必要な新人育成など、最低限でおさえるようにしています。

—やはりIT企業だからこそ迅速にリモートに移れるのでしょうか？

そうだと思います。基本的にPCの中でしか仕事をしていないので、PCさえあればなんとかなる部分はあると思います。私はサポートデスクという窓口で、お電話の受付だけはどうしても誰かがいないといけないので、だれか1人は出社しようとか、逆に家で電話受付を出来るようにしようとか、お客様と一緒に考えています。

—これから新型コロナがもう少し続くと思うのですが、この勤務の形態（7割在宅勤務）はこれからも変わりそうにないですか？

今はちょうど閑散期で仕事が出来ているんですけど、お客様先の繁忙期があって、うちの会社はBtoB（会社対会社）なので、ここから繁忙期になるにつれて相手方の会社さんが今までと同じクオリティを求めてくると、現状の処理能力だと回らなくなると思います。そこもこれからの改善課題ですね。withコロナと言われていたほど、経済を回しながら最低限の外出でいこう、ということもあると思うので、最低限の外出でこれからもやっていけたらと思っています。

—現在他の業界だと経営が困難になっている業界も多いと思うのですが、IT企業は左右されにくいと思いますか？

ITはやはり需要もあってか、コロナでの経営困難ということは今のところ少ないかもしれません。しかし、社会は繋がらだと思っているので、ある

会社さんが不振になっているということは、そのシステムの契約が切れちゃって、相手の企業に…、とか色々なところに影響が出る可能性があると思います。そういう意味で、IT企業が安泰かと言われるとそんなことは絶対ないと思います。ですが、部署によって医療関係のシステムを作っていたり、感染検査関連の事業もあるのでIT企業の活躍の場はいっぱいあると思います。相手から必要とされる場所、特に問題解決を必要としているところはどんな環境にもあると思いますし、そこをITが解決できるんじゃないかとか、ITが解決できないなら何が今問題なのかを細かく分析することが私の仕事なので、仕事はたくさんあると思います。地方でドローン業務に携わっている同期もいますし、ガス、電気などインフラ関係のプロジェクトにいる同期もいますし、AIのシステムのコンサルティングをしている同期もいますし、やりたいと声を出せばいろんなところに手が回る会社である気はしますね。

一守備範囲が広いんですね。

そうですね。問題があればそこを問題解決するという感じで、そこにITが携わっているのであれば実行に移します。色々なところに問題があるので、最新の技術を使えないか、その技術でどうにか人が住みやすくなる環境が出来ないか考えています。先ほどのドローン技術もただドローンを動かすだけではなく、地方で防災物資をどうしたら輸送できるか考えた時に、ドローンを使えないかということで地方が動いて、そこで弊社が、ドローンの会社と地方の自治体の仲介役として入っているので、社会貢献の新しい伝え方になっていると思います。

一本当に幅広い企業さんとつながっているんですね。では、特に大学時代にやっておいた方が良いことはありますか？

今この(コロナの)状況の中で言いづらいのですが、本当はいろんなところに行ってほしいな

とっていて、色々な人の感情や思いを理解できる、寄り添える人になったほうが良いと思います。特に社会人になると色々な問題を抱えている人に会ったり、年齢層も幅広くなるけど、仕事をしていたら1日が終わってしまうので、時間があるときにいろんな場所に行って、人と会って、色々な思いを自分の中に吸収して共有して、それを何かしらの形で言葉にするとかアウトプットすることが大事だと思います。

一ちなみに、社会調査士を取ったとおっしゃっていましたが、それは社会に出てから役立ったりしましたか？

役立っているのは、資格を取る過程の経験ですかね。調査士の資格を取る過程で質的調査を行ったことや、統計を取って数式化するときにExcelを使っていて良かったなと思います。あとは、インタビューのやり取りをしているときにその人がどんな問題を抱えているのかの神髄にたどり着けるような質問を出来る点は、普段仕事をする中で重要な点なので、資格を持っていること自体より、実際にやったことが仕事に活かされていると思います。

一取る過程の能力が間接的に仕事に活かされているということですね。何かほかに大学時代にやっておいた方が良かったなと思うことはありますか？

やりたかったことはたくさんあります。もっと外に出て遊んでおけば良かったなと思いますね。遊ぶという言い方が正解かわかりませんが、もっと出かけたりとか、人と出会ったりとか…。大人には会っていて、大人の話しを聞いて共感はしていたけど、それが「仲の良い友達だけ」みたいな、狭い範囲で終わっていて、自分とタイプの違う人と会う機会が失われていた気がします。ですが、何より友達と楽しくしているのも良かったなと思います。私は社会人の年上の友達も多くて、遊びに行けたり、仕事のことを聞いたりできたので。

—最後に明治学院大学の社会学部生にメッセージがあればお願いします。

社会学は自由な学部だと思うんです。社会に携わっていれば何でも研究対象だと思っているので。だからこそ、興味があることに飛び込んでいけば、先生方は絶対に協力してくれるし、そういう先生方が多いので、どんどん動いていってほしいと思います。興味があることを、腰を重くして「ああ面白そう」で終わるのではなく一歩足を踏み出してみたり、足を踏み出すのが不安なら先生に相談してみるのもありだと思います。興味を止

めないことが大切だし、楽しいと思いますよ。今この状況で、社会人たちも同じように外出自粛をされていて、家にいる時間が多いと思うので、今のほうがOB・OGに会いやすいかもしれないじゃないですか。なので、良い意味で今の時代を有効活用してたくさん動いていってほしいなと思います。今を楽しんでください！！

プロフィール(宇佐美果乃)

2009年4月 明治学院大学社会学部社会学科 入学
2013年3月 明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2013年4月 IT系総合人材サービス会社 入社

自分なりにコツコツと頑張り、ベストを尽くす

——東京オリンピック・パラリンピックに携わる小日向藍菜さんにお話を伺う——



面談者

小日向 藍菜

(2007年社会学科卒業) [写真下段]

※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集

石岡 里佳子 (社会学科3年)

伊藤 小春 (社会学科3年)

インタビュー日時：

2020年8月15日 (土)

10時～11時

今回インタビューさせていただいたのは、空手専門雑誌の編集者を経て現在はオリンピック・パラリンピック組織委員会職員として活動している小日向藍菜さんです。

—現在はどうなお仕事をしていますか。

「公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」で東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の準備をしています。スポーツ局という部署の空手競技担当です。オリンピック種目である空手競技の計画・準備をして大会当日は運営をいたします。組織委員会は50くらいの専門部署に分かれており、各部署に国際競技連盟のスーパーバイズのもと空手競技の要求を伝えるのが私の役割です。

例えば、「会場マネジメント」という部署だったら、競技会場だったり、メディアが集まるインターナショナルブロードキャスティングセン

ターだったり、メインプレスセンターという施設を運営するために、建物を借りて契約を結ぶところからいろんな調整をして、大会当日は建物の管理をします。他にも、宿泊担当の部署や食事担当の部署などがあります。これらの各部署に空手のニーズを伝え、実現に向けて調整していくのです。

—この仕事に就いた理由はありますか。

私は現在3社目なんですけど、元々空手専門雑誌の編集者をやっていました。その後、2015年に国際競技連盟の事務所が日本にできて出向することになりました。翌年、空手がオリンピックの種目になって組織委員会の中で新たに空手担当者が必要になってそこに呼ばれて今に至ります。

—オリンピックが終了したら元の仕事に戻るとい
う形なのですか。

はい、そうです。

—学生時代に空手をやっていたということですが、
やはり空手への思い入れが強いのでしょうか。

はい、やっていましたね。高校一年生からやっ
ていてすっかりハマってしまって、最初は空手の
仕事があるとは思わなかったんですけど。ご縁が
あって就職することができて、好きなことに関わ
れているのでとても楽しいし、すごく思い入れの
ある仕事をしています。

—仕事をやる上でやりがいとを感じることは何ですか。

今、勤めているところがすごく大きい組織なん
ですね。人数って意味でも、予算の意味でも、や
るプロジェクトの規模の意味でも、非常に大きい
組織で大きな規模のプロジェクトを動かしてい
るという実感が得られるというやりがいがあり
ます。競技会場だけでオリパラ42会場あって、練
習会場が約50、他にも空港とか選手村とか、試合
をしないけれども、オリパラ関係の組織が日本中
にあるんですね。東京だけじゃなくて北海道とか
東北とか、自治体による事前キャンプを含めたら
もっと広い日本のあちこちで行われるプロジェクト
であり、オリパラ合わせて55の競技大会が実施
されるんですけど、関わっている人数が選手だけ
で約1万人以上、審判とかメディア、観客を入れ
ると東京に新しく街がひとつできるくらいの人数
がやってくることになっているので、コロナ禍で
の開催がどのような形になるかまだ分かりませ
んが、大きなことに関わっている実感を持てるこ
とがやはりやりがいのひとつです。

また、それぞれの部署にその専門分野を極めて
いる方たちがいらっちゃって、優秀な専門家たち
と一緒に働いて、その人たちの働きぶりを吸収で
きるというのもあります。

あと、外国の方々も働いているんですね。とい

うのも、この組織はオリパラが終わったら解散す
る組織であることから、国や自治体からの出向者
と、採用試験を受けて入った契約社員と、派遣社
員と外国から来られた人材と…いろんな人が働い
ているんですね。その人たちの多様な働き方やこ
れまでのキャリアを聞いて、いろんなタイプのい
ろんなバックグラウンドを持っている人たちと一
緒に働く楽しさがやりがいの3つ目です。

—大きな団体で働く上で意識していることはあり
ますか。

チームが細分化されていて、役割分担がされて
いるので、自分の仕事の範囲をしっかりと理解し
て、チームで私は何を求められているのかとい
うことを考えるようにしています。あと、人が多い
分、情報が行き渡らない人がいるということがな
いように気をつけています。

—やりがいについてお聞きしたのですが、大変だ
と感じたことはありますか。

過去に例のないプロジェクトなので、みんな手
探りの部分はあるかもしれないです。それはトラ
イしながらやっています。あと、大きな組織であ
り、かつ税金で動いている組織なので予算執行の
プロセスが民間企業以上に複雑で、時間がかかります。
パートナー企業へのブランディング面での
配慮も必要になります。

あとは、海外の人たちとやりとりするにあたっ
て、文化の違いに苦労したかもしれないです。空
手の国際競技連盟である世界空手連盟の本部は
スペインにあって、スペイン人職員が中心になっ
ているんですね。それで、彼らの物事の進め方、
考え方とかに「こんな反応するんだな」という文
化的な背景の違いを感じる事があって、そのコ
ミュニケーションは苦労したことがあります。

—言語の壁は感じることはないのですか。

言語の壁はないって言ったら嘘になりますけ

ど、ここで働いている人の母国語は何であれ英語は話しますし、コミュニケーションをとろうとしてくれるし、大規模な会議にはプロの通訳さんを入れるので言葉の壁というよりも文化の壁の方が厚かったです。

—文化の違いを感じたエピソードをお聞きしたいです。

3回くらい口頭で合意していたことが、契約書に書いたわけじゃないから合意したわけじゃない、とひっくり返ってしまったことがあったんですね。私は口頭であっても3回も言ったら守るものだという価値観を持っていましたが、この価値観は世界共通ではないのかもしれない、だから契約書が必要なのかと思いました。これは授業で勉強することではなくて、勉強したとしても実際やってみないと感覚をつかめないなと思いました。ただ、外国人が全員こう！スペイン人が全員こう！というわけではなくて、ヨーロッパ人でも日本人とフィーリングが合うような人があるので。口頭で言ったことはきちんと守るというタイプもあるし、逆にアジアの人でだらしない人はだらしないし。最終的にはその人個人のものの考え方、性格、習慣だなと思いました。

—文化の違いを受け入れるためにはどのような姿勢で接していたのですか。

もうこういうものだと受け入れるしかなくて…。逆の方が多いかもしれないです。日本の文化にびっくりする外国のスタッフがうちが多いかもしれないですね。職員のほとんどが日本人で、一部少数派の外国人スタッフがカルチャーショックを受けていたようです。例えば、あるブラジル人スタッフは、日本にはハグの習慣がないので、朝の出勤時などに「ハグをしたいのだけれどできない、モヤモヤした気持ちになる」と言っていたことがありました。あとは、お土産文化に驚いているのもありました。

—コロナの影響が大きい仕事だと思いますが、どのように変化しましたか。

緊急事態宣言が出てからは、在宅勤務を中心に仕事をしていて、解除されてからは基本週1回くらい出勤して、それ以外は在宅勤務にしています。

—今まで計画していたものが変更になってしまうことに対してはどのような苦勞がありますか。

秋以降に決まってくると思うのですが、今はスポーツの大会が軒並み中止になっていて、オリンピック予選も途中で止まってしまっている状態なので、まずはそこからかなと思います。

—オリンピックが終わった後は元の仕事に戻るといいますが、何か活かせると思うことはありますか。

人脈と、これまでは空手界の中の知識しかなかったんですけど、今は国際スポーツ界を相手にしているので、視野を広げてそれを還元できるんじゃないかと思っています。空手以外のスポーツの人とも出会ってかついろんなバックグラウンドを持つ人と出会って、こういう知見があるんだな、働き方、考え方があるんだなと知ることができました。

—では、学生時代のことについてお聞きしていきたいと思います。大学時代はどのような学生でしたか。

取り立てて特に変わったところのない普通の学生だったと思います(笑)。

—社会学部を選んだ理由はありますか。

高校の時に家庭科の授業で、「ジェンダー」という概念を知ってそれを学びたいと思ったからです。

—ジェンダーを専攻していたのですか。

はい。専攻しようと思っていたんですけど、担当の先生がちょうどいらっしゃらなくて、最終的に「宗教社会学」(渡辺雅子先生)のゼミに入りました。最初は卒論を書くつもりがなくて、3年の時はゼミを取っていなかったのですが、「専門書講読」という授業を取って、すごく面白かったので、論文を書いて卒業したいと思うようになり4年生の時に3年生の演習1を取ったんです。3年生と一緒にゼミを受けて、ゼミ論を書いて卒業をしたんです。最後に取ったのが、宗教社会学で使われる調査手法のライフヒストリー聞き取り調査を専攻して終わりました。

—ゼミでは具体的にどのようなことをしたのですか。

演習1では、ゼミ合宿で岡山県の金光教の本部を取材に行きました。そこでインタビュー調査をやって、自分のゼミ論は東京都荒川区に在日コリアンのコミュニティーがあるんですけど、そこに聞き取り調査に行きました。在日コリアンの中でも、濟州島っていう離島から移住したコミュニティーがあって、8人くらいの方にインタビューさせてもらって「エスニックビジネス」というテーマで論文を書きました。

—ゼミの他にサークルには所属していたのですか。

空手部に入っていたんですけど、学生時代は最後まで続けられず、サークルや部活動ではあまり成績を残したということはないです。地域の空手道場での活動は続けていました。大会に出たり、練習したり、指導したり…。

—学業と空手はどのように両立していたのですか。

それがあまり両立できていなくて(笑)。むしろ

社会人になって両立の仕方を覚えたという感じですよ。

—社会学部の授業が活かされていると感じることはありますか。

私の場合は雑誌編集という仕事で、人に取材をしていたのでライフヒストリー聞き取り調査の手法はそのまま役に立っていると思います。あとは、社会学って多角的な見方をするのでそれはなんか折々役に立っていると思います。

—現在のお仕事で英語を使っているということですが、英語は元から得意だったのですか。

私は、英語を専門的に勉強したことはなく、社会学部だし、留学もしたこともないし、海外で育ったこともないんですね。なので、帰国子女の子とか大学が外国でしたという人と比べるとまだまだ努力が必要なんですけど。中学生の頃に近所に帰国子女のお姉さんがいて、英語の発音を教えてもらっていて、中学から英語の授業が始まって高校、大学ときて、空手の道場に外国人の選手の子が練習しに来るので、当時はお手紙でやりとりをして、メールが普及したらメールをして、だんだんFacebookなどのSNSでやるようになってきて…っていう、話す機会があったから身についたのかなと思います。

—就活について聞いていきたいのですが、どのように就活をしていましたか。

就活をほとんどしていなくて、卒業間際になって空手道場の先生に紹介してもらって空手雑誌の編集部に入りました。ですのでエントリーシートを書いたり、説明会に出たりというのはほとんどやっていなくて、1社民間企業を受けたくらいです。

—あまり就活を意識はしていなかったということですか。

周りが就活を始めていく中で、どうも自分は不安の方が大きくて。みんな、黒いリクルートスーツを着始めて、髪の毛が茶色だった子が黒に戻して、みんな同じ姿になって説明会行ったりインターンに行ったり面接に行ったりしていることに、違和感を抱いて…。かといって、なぜ違和感を抱くのか分からないし、自分に何ができるのかも分からないし、何をしたいのかも分からないし、ただ漠然と不安で現実から逃げていたっていう感じです。

—そうですね。何をやったらいいか不安になります。

—そうです。でもそれって、どういう業界があるか分からないから不安だったんですよ。何をしたらいいか分からない以前に、どういう仕事があるか分からなかったから不安だったんですね、今思えば。それでみんなが型にはめられていく感じがなんか嫌で、リクルートスーツになって個性がなくなってしまって、すごく不安感とか違和感を抱いていたんですけど、理由も分からないまままだ漠然と過ごしていました。

—業界を調べることが大事になってくるのですか。

—そこまでいけないという時には、「働くって何だろう」というところから考えるといいと思います。卒業生インタビューでもいいし、家族でもいいし、バイト先の人でもいいし、社会人の方に「働くってどういうことなのかな」「会社や職場に行ったら一日どんなことをしているのかな」というのを聞くだけでも学生である自分に社会のつながり、接点ができてイメージが湧くので不安感が少なくなると思います。

—ちなみに、小日向さんは「働く」ということはどう考えていますか。

—いろんなタイプの方がいらっやって高いお給

料をもらってモチベーションにしている人もいれば、社会に影響を及ぼすことをモチベーションにしている人もいますけど。私の場合は割と後者で、もちろん生活していく必要があるのでお給料はいくらでもいいですとは言えないですけど、どちらかという自分の仕事によって社会に影響があるということに喜びを感じる方だなと最近思いました。Do for othersじゃないですけど、自分の働きが社会に影響するというのがやりがいになっています。

—自分なりに考えることが大事になるのですね。

—そうですね。人からこうの方がいいよって言われてやったことと、人の意見を参考にしながら自分はこうすると決めたこととは全然モチベーションが違うので。

—小日向さんは職の紹介があったということですが、すぐに決めることが出来たのですか。

—はい、そうですね。当初は空手が仕事になるとは思わなくて、プロリーグもないし、普通の会社に入るしかないかなと思ってたんですけど、「空手雑誌の編集部受けてみない？」って言われて、空手関係の仕事があるんだって思って結構即断即決でした(笑)。

—学生時代に力を入れておいた方がいいと思うことはありますか。

—一概には言えないですけど、ベストを尽くす癖をつけておくことはおすすめします。私は社会人になってからいろいろ気づいたことが多かったんですけど、やはり自分の中心になってきたものが空手だったので、試合や練習に出ることを通じて学んできました。ただ、私の場合は学生時代はそんな成長がなくて、仕事が忙しい、でも練習はしたいとなった時に、どうすればいいか考える中で、自分なりにスケジュールの立て方や気持ちの持ち方だとか分かるようになってきてベストを

尽くすことの価値を知ったと思います。

—最後に社会学部生にメッセージをお願いします。

明学はとっってもリベラルで多様性に溢れる素敵な大学だと思うので、明学生であることに誇りを持って、ご自身が興味のあることをコツコツ頑張りたいと思います。陰ながら卒業生として応援しています。

プロフィール(小日向藍菜)

2003年4月	明治学院大学社会学部社会学科 入学
2007年3月	明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2007年	株式会社チャンプ入社 空手道マガジン月刊JKFan編集部所属
2010年	同 副編集長
2014年	同 編集長
2016年	同 編集部長
2015年~2019年	世界空手連盟 事務総長秘書 (非常勤 出向)
2019年	東京オリンピック・パラリンピック競 技大会組織委員会スポーツ局 空手 サービスマネージャー

言葉を人に届けるお仕事

——テレビ局員・アナウンサーとしてお仕事される重信友里さんにお話を伺う——



面談者

重信 友里

(2018年社会学科卒業) [写真下段]

※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集

伊藤 小春 (社会学科3年)

石岡 里佳子 (社会学科3年)

インタビュー日時：

2020年8月10日 (月)

16時～17時

今回インタビューさせていただいたのは、テレビ局でアナウンサーとして活躍されている重信友里さんです。

—最初に、お仕事の内容を教えてください。

宮城県にあるテレビ朝日系列の放送局でアナウンサーとして働いています。

ニュースを読むこと、情報番組のリポーター、そのほか事件や事故、イベントなどの現場に行きニュース原稿を書く、番組で放送するVTRのナレーションを読む…といった仕事が必要な業務内容です。

—次に、このお仕事を選んだ理由はなんですか。

昔から人の前で話すことが好きだったので、将来は人前で何かできる仕事に就きたいと思ってい

ました。中学、高校、大学と過ごしていくうちにだんだんその思いが強くなって、自分が使う言葉で人の生活を豊かにできたらいいな、何かを考えてもらうきっかけになる仕事はないかと思った時に、言葉を使うテレビの仕事はすごく楽しそうだなと思ったのがきっかけです。

—以前からアナウンサーを視野に入れていたんですか。

小学校高学年の時に、テレビに出ていたアナウンサーがすごく楽しそうだったので「こんなに楽しいお仕事ってあるんだな」と思ったのが始まりです。

また、ニュースが好きだったので自分が読むニュースを見て「あ、今こんなことが起きているんだな、自分はこう思うな」と考えてもらえるきっかけを提供できたらいいなと思ううちに夢になりました。

—やりがいに感じることはありますか。

取材で会った人に「ありがとう」と言われるのがすごく嬉しくて。イベントなどでは“宣伝”というお手伝いしかできませんが、その瞬間に立ち会えたときは嬉しく感じます。そのイベントを通して、主催者だけでなく報道を見て足を運んだお客さんにもプラスになることがあったと思うんです。人から「ありがとう」って言われる瞬間が嬉しいです。

視聴者の方からも、取材先で「いつも見えています」と言ってもらえると、頑張ろうと思えます。

—お仕事をしている中で、大変だったことはありますか。

生放送でハプニングが起きてしまったことです。テレビでよく見る「ハプニング大賞」のようなこともよくあって、情報番組の生中継で飲食店に行ったとき、料理が出てこないとか、食べ過ぎてしまってしゃべれないとか。これは自分も悪いけど(笑)。

また、大きな事件や事故が起きると現場に行くこともあるので、生活が不規則になってしまいます。体力は必要な仕事だと感じています。

他にも、新しい土地に慣れるのが大変でした。初めての土地で、地名も読めず、土地勘もないので、視聴者の当たり前が、自分にとって当たり前じゃないことが多々ありました。宮城の地理は特に勉強が必要で慣れるまでは大変でした。

—あまり知らない地域のことを伝える仕事をするうえで、どのように勉強をしていたんですか。

ニュースは朝の地方紙でカバーできますが、実際の雰囲気は歩かなきゃわからないと思って、面接で地方の局に行くときはタクシーを使わずに公共交通機関を使っていました。目的地が遠くて40分ほど駅から歩いたこともあります。夏の面接で、ある会社の最寄り駅でSuicaが使えないこともありました。駅の回りには何もなく、会社も見

えず、スマホを片手に田んぼの横を2キロくらい歩き続けて、汗だくになりながら面接に行った思い出もあります。タクシーを使う学生もいましたが、歩いてこそわかることがあると思っていたので、就活は“空気を感じること”を大事にしていました。

入社してからは、新聞をすみずみまで読むようになりました。当たり前のことでもありますが、地名の読み方や、場所もわからないので、とにかく調べたり、ほかの放送局のニュースを聞いて読み方を覚えたり。自分が取材に行くときも車での移動中はなるべく外を見るようにして、標識を探して今自分はここにいるんだな、この地名はこう読むんだなと勉強していました。

—日常から勉強しているんですね。

最初はずっとそうでした。遊びに行ったりドライブに行く人もいると思うんですけど、そこまで頑張れる自信がなくて。頑張りすぎると疲れてしまうと思ったので、一回で覚えるようにしていました。

—聞いた言葉をメモか何かして詳しく調べるということですか。

メモをしていました。でも、「次は忘れない」と思っていると、メモをしなくても「あ、また出てきたこの土地！」って覚えていられます。特に、よく聞く場所は忘れないように気をつけていました。

—先ほど生放送の話がありましたが、生放送でハプニングが起きた時というのは、どういうことに気を付けて対処するんですか。

私の経験が参考になるかわからないんですけど(笑)びっくりします。想定外のことなので「どうなっているの?」と思うんですが、慌てないようにしています。そして焦らない。ハプニングも楽しむようにしています。

覚えているのは、初めての生中継で、屋外でバーベキューをしていてお肉を食べる時に、偶然風向きが変わり私の顔に煙が来たんです。私のことは煙で見えていないなと思いつつ、それを活かしてしゃべりました。「煙で今まったく見えません」と言ったら、スタジオが盛り上げてくれて。その時はスタジオの「煙も応援してくれるね」という言葉に救われました。「えー見ええない！」となって慌ててしまったらもったいないんですよね。

その状況も楽しめるように、肩の力を抜くというのは大事にしています。

焼肉店での中継でお肉が焼けないこともありました(笑)。終了時刻も決まっているなか、待っていると時間をオーバーしてしまう。とにかく食べてコーナーを終わらせなきゃと思い、カメラがお肉を撮ってる間にそのまま飲み込みました。

—すごいですね。

先輩が「私は困ったら飲み込んでいるよ」と言っているのを聞いていたので、「どうしよう」と考えた時、その言葉がふと出てきて「あ、飲み込めばいいんだ」と。あとはやっぱり…慌てないことが大事。

—そういうハプニングが起こった時に平常心を保つというのはどうやって身につけたんですか。

自分に期待しすぎない。「これだけやったからできる」って思っていると、歯車が狂った時に全部できなくなってしまうと思っています。

アナウンサーの仕事では『とにかく準備を大事に』と言われます。生中継もニュース取材も、下調べをして知識を持って行くようにしています。でも、それを全部出そうとすると、空回りしたり内容を詰め込んでしまうので、「自分はこんなに準備したのに」と思わないようにしています。「まあ、これくらいかな」という気持ちでいた方が、失敗した時や思うようにいかない時にも、切り替えがしやすいですね。

「こうしゃべらなきゃ、こういう風にやらなきゃ」と思っていると、どこかが崩れた時に絶対に切り替えができなくなる。だから、考えすぎないように、(内容を)固めすぎないようにしています。

—その考え方は就活でも役に立つかなと思いました。なにか就活でも役立つようなことってあるでしょうか。

就職活動もそうかもしれないです。面接で、「これをしゃべらなきゃ」と思うと、想定外の質問にびっくりして、言いたいことの半分も言えないんじゃないかな。

考えることももちろん大事ですが、ちょっとリラックスするのが大事。そのために準備は欠かせません。たとえば私は、ポーッとテレビを見ているでも「自分がこの質問をされたらなんて答えるだろう」と考えています。私ならなんて答えるかなと。そうすると、自然と自分の考えの幅が広がると感じています。

自己PRや面接で話す内容を考えるときに、文章にして準備しないことも必要だと思います。

『学生時代何をしていましたか』という質問で「私はこういう風にしていました」と書くのではなく、箇条書きで「サークルを頑張った」「〇〇の勉強を頑張った」とキーワードで書くようにしていました。文章では書かないことは大事にしていたし、「これから中継をします」という時も、キーワードでまとめるようにしています。

—その時出た自然な言葉でつなげていくという感じですか。

そうです。その内容を話すにはどの言葉が必要だろうって。面接などで話す順番を間違えてしまっても、箇条書きだと簡単に話の内容を入れ替えができるんです。「今この話をしなかったから、後で話そう」って。

自己紹介を文章で暗記してしまうと、間違えた時に頭が真っ白になってしまっていて「ああどうしよ

う、どうしよう」と不安になってしまう、準備はするけど、イメージ通り完璧にやろうとしないことが大切だと思います。

準備はリラックスして面接を受けるための安心材料にはなるのかな。文章で書くのもお守りにはなるけれど、そればかり覚えてしまうと自分のいいところが一割も出せずに終わっちゃうから。150%の準備をして、100%の力が出せるように、いろいろな引き出しを用意してほしいです。

—ありがとうございます。覚えておきます。では、学生時代に力を入れていたことについて教えてください。

教員免許の取得を目指して、とにかく授業を受けていました。

—どうして教職をとろうと思ったんですか。

もともと学校が好きで、先生が夢を応援してくれて、楽しい思い出があったから。テレビの世界に行きたいと思ったのも学校の宿題がきっかけでした。

テレビは視聴者と直接つながっているわけではないので遅れて反応が来るけど、学校の先生は、一度にクラスで約40人、学年では200人近い子どもたちを目の前に、この子たちの人生を変えるきっかけを自分にも作れるかと思い、憧れの職業でした。

—中学と高校、どちらでしたか。

中高、両方の社会科免許をとりました。教育実習は母校に行き理系クラスを担当しました。公民にあまり興味のない生徒が多かったものの、彼らを引き付ける授業内容を考えたり、コミュニケーションがとれる内容にしたり楽しい教育実習でした。

先生も言葉を使う仕事。私の授業で彼らの考え方が少しでも変わったら、社会に興味を持ってくれたら、私が来た意味があると思って教育実習をやっていたので3週間はあっという間で辛く感じ

ることはなかったです。

今考えると教育実習は自分の中ですごく大きな出来事でした。先生という立ち位置で高校生と接することができて、言葉の面白さが分かった瞬間でもあったのかな。

拙い内容でも最後まで寝ないで授業聞いてくれたことだけでも、私はすごく嬉しかった。今起きている様々な問題について一緒に考えてくれた時に、やっぱり言葉を使う仕事に就きたいと思いました。

—教員になるだけがすべてじゃないということですか。

私はそう思いました。先生という夢を持つ学生もそうでない人も、教職課程をとることに何か理由や目的があると思います。課程が進むにつれて、将来の優先順位を考えてやめる人も沢山いました。そういう選択肢もありだと思っていて、自分と向き合う時間を作るという意味では価値のある時間だと思います。

私は先生への憧れのほかに、就職活動に失敗したら怖かったので安心材料としても続けていました。

—ゼミでは主にどういうことについて勉強しましたか。

比較的自由なゼミでした。覚えているのは3年生の夏の合宿で、2日間で本一冊読んだこと。グループ分けして、十数章を割り振り、それぞれレジュメにまとめて、みんなで討論した時間は、すごく覚えています。

ゼミは大学で一番勉強したかもしれない。先生の話は発見の方が多いからすごく楽しくて、英語の専門書を訳すのは大変だったけれど、学問に一番触れた時間でした。

—やっぱり終わった時は達成感がありましたか。

ありましたね。ゼミ合宿は、本が厚くてこんな

の2日で読む量ではなく「終わった！」という達成感がありました。

一忙しかったとおっしゃっていたんですが、サークルには所属してなかったですか。

学外のサークルでミュージカルを作っていました。

一自分たちで脚本とかを書いてということですか。

そうです。脚本・音楽・衣装も、全部自分たちで作っていました。

一そのミュージカルのサークルに入って、よかったと思うことはありますか。

何かを作ることがこんなに楽しいんだと思いました。形のないところから仲間と作り上げて、見に来てくれた人に届ける、というのはすごく楽しかったです。作品が大きければ大きいほどかかる時間も長く、感動の大きさも違いました。

自分が本当にやりたかったこと、人に何かを届けるというところは、夢とも通ずるところがあったのかなと思います。

一かなりたくさんのお話をされていますが、休日はありましたか。

休日はなかったです。アルバイトもしていて、3年生からは掛け持ちを始めたんです。そうしたら学校のない日はアルバイト、もしくはサークルになっちゃって。苦ではなかったです。好きでやっていたから全部頑張れたんだと今になっては思います。

(自分に)もうちょっと休めよって言ってあげたいけど充実していたし、楽しかったな。やっぱり大学生って、毎日が自分の時間で、自由に使えるのがすごく貴重だというのを社会人になってから感じました。

どうしても会社に入ると、休みは基本的に土日の2日間。そこでアクティブに動けたらいいけれど、仕事で疲れて、気づいたら土日が終わってしまってます。

自由に使える時間は大事にして欲しいと思います。悔いのないように。だらだらするのもいいんですけどね(笑)。

折角なら自分のやりたいこと、今しかできないことを、学生という立場で、社会に出る前に、いろんなことを経験して欲しい。意外と社会人は時間がない。学生は多分8年くらいあってもいい(笑)。楽しいと思う。

特にこの1年間が学生の大変な1年だったと思います。就職活動もどうなるかわからないし、学校も行けないし。だからこそ今の時間を大切にしてほしいですね。

一社会学部に入った理由はなんでしょうか。

ニュースや政治、時事の話が好きだったので、タイムリーに追いかけてられるところで勉強がしたいと思ったのがきっかけです。いま社会で何が起きているか、世界でどんなことが問題になっているかを勉強したくて。社会学部は何やってもいい、どんなことでも学問になるし、何を勉強しても受け入れられるので魅力的と思っています。

高校生の時はこれといってやりたい学問がなかったんです。ただ世の中を見ているのは好き。政治や、社会の状況について考えることが好き、公民も好きだったなと思い、社会学部だったら自分のやりたいことが見つかるかもしれないと思って選びました。

一コロナの影響で仕事にどのような変化がありましたか。

今まで当たり前に行けていた街歩きのロケに行けなくなったというのが一番大きいです。また、街の人へのインタビューがしづらくなって、「絶対マスクをして」「距離をとって」とか…。インタ

ビューも街歩きのロケも気軽にできたのにほとんどできなくなってしまい、変わったなと思いますね。

あと、こうやってリモートでの収録が当たり前になりました。今まで俳優さんにインタビューするために東京に行くこともあったんです。それもなくなって…。これからはリモートでのインタビューが増えて、それが「商品」になっていくのかなという変化は感じています。

—学生時代に力を入れておいた方がいいと思うことはありますか。

いろんなことに視野を広げて欲しいです。「興味がないから知らなくていいや」ではなく「今は興味ないけど、いつか生きてくるかもしれないから、ちょっと知っておこうかな」という気持ちは大事にしてもらいたいです。

私の就職活動では他の業界は途中まで受けていませんでした。テレビ局に書類も通らなくて不安になったときに、どんな風に仕事を選んだらいいかわからなくなりました。就職しなければいけないという焦りはあったけど、ずっとテレビ局しか見ていなかったんで、自分がどんな仕事をした、どういう業界が合っているのかも分からないという状況になってしまっただけ。その時はもっと早い段階でいろいろ見ておけば…と思いました。

例えば、合同説明会に行ったり、幅広い業界のホームページを見たり。そういうことを忘れないでほしい。4年生で就職活動が始まってからだと焦ることもあるし、その会社に本当に行きたい人たちと比べたら準備も遅くなってしまう。そうなるのは欲しくないですね。まずは、いろんな業界を見てみる。その会社で仕事をしている自分がイメージできないなと思った時にはじめて、扉を開けて欲しいなと思います。

最初から興味がないから全く見ない、ではなく、一歩踏み入れて考えて欲しい。いろいろな業界を見ることに無駄なことはなくて、どこかで繋がってくると思うんです。時間があるうちに、自分の考えを広げてもらいたいです。

今年はいろいろ大変だと思うけど、例年以上に時間はたくさんあると思います。学生時代は自分と向き合える数少ない時間でもあるので、就職活動が始まってから「あの時やっておけばよかったな」ではなく「あの時あれだけ見たから、自信をもってこの道を進んでいいんだ」「合格は出ないけど、私はこれがやりたいんだ」と胸を張って思えるようになって欲しいです。

—とりあえずいろいろなものにつけてみるということですかね。

まずは、かじってみる。それがおいしくなかったら、それはそれでいいと思う。直前にやるより、時間がある時にやっておいた方が「あれだけやったから大丈夫！」という自信にもつながるし。いろいろと挑戦してみて、後悔のしない就職活動をしてほしいです。

—ありがとうございます。最後に重なる部分はあると思いますが、学生にメッセージを一言お願いします。

一番はやっぱり楽しく過ごしてもらいたいです。4年間を自由に使える時間って今しかないから、たくさん自分と向き合って、やりたいことをやってください。何をしても若さには勝てない(笑)。いっぱい遊んで、いっぱい失敗して、もちろんちゃんと勉強もして、悔いの残らない大学生活を過ごして欲しいなと思います。

明学は環境も整っていて、先生方も素敵な人がたくさんいるし、先輩たちも凄いとされる人がたくさんいると思います。その先輩たちの後に続く…先輩たちも超えて行くんだというくらいの気持ちで楽しく過ごしてもらいたいです。

学校に行けず、人と会えなくて大変な時期ではありますが、この経験が無駄じゃなかったと思えるように過ごして欲しいですね。

また、たくさん本を読んで言葉を知って欲しいです。社会人になると時間がなくなってゆっくり本を読むことが難しくなります。活字を読んでい

ろいろな世界に触れて欲しいなと思います。

本を読む、挑戦する、楽しく過ごす、自分と向き合う…好奇心をもって次のステージへの準備期間にして欲しいです。そして、胸を張って社会へと大きく羽ばたいてください。

いつかテレビの世界で後輩と一緒に仕事ができる日を楽しみにしています。

プロフィール (重信友里)

2014年4月 明治学院大学社会学部社会学科 入学
2018年3月 明治学院大学社会学部社会学科 卒業
2018年4月 株式会社東日本放送 入社

自分たちを通して社会全体を良くしていく

——障害を持つ当事者として勤務される白井誠一朗さんにお話を伺う——



面談者

白井 誠一朗

(2006年社会福祉学科卒業) [写真下段]

※プロフィールは本文後ろに記載

取材・構成・編集

木島 夏海 (社会学科3年)

石岡 里佳子 (社会学科3年)

インタビュー日時：

2020年7月27日 (月)

16時～17時

今回インタビューさせていただいたのは、認定NPO法人DPI日本会議に勤務されている、白井誠一朗さんです。現在のお仕事や学生時代についてなど、様々なお話を伺いました。

一本日はインタビューにご協力いただきましてありがとうございます。まずは、現在どのようなお仕事をされているのか教えていただけますか。

はい。私はDPI日本会議 (Disabled Peoples' International) という障害者団体でスタッフとして働いています。DPIというのは全国の94の加盟団体からなる障害者団体の組織なんですけれども、特徴としては障害者本人が集まる組織であるということ。うちの役員や理事は全員何らかの障害を持つ当事者がなっています。事務局のスタッフもほとんど障害を持っていて、一見元気そうに見えても実は難病だったり、あまり健常者がいない職場で働いています。また、DPIは身体障害

だけでなく知的や精神や難病など、いろんな障害種別を超えた団体として、障害者全体が関わる課題について取り組んでいます。そして、障害者の問題は福祉の問題だと捉われがちだと思いますが、福祉という狭い範囲だけではなく大きく社会全体の問題、人権の問題として捉えて活動しています。直接、個人に対して相談支援やヘルパー派遣をするような職場ではなくて、いろんな地域の団体から声を聴きながら、国などに対してこういう政策をやってくださいと提案するような、政策提言活動を中心に行っています。それもバリアフリーの問題だとか障害者の介助制度の問題だとか、教育など、障害者にかかわる様々な分野の多岐に渡る課題について取り組んでいる団体です。

ーメールでは事前に事務局のスタッフとしてお仕事をされているとお伺いしたんですが、具体的にどういうお仕事をされているかお伺いしたいです。

僕自身は色んな提案づくり、政策提言をする時に例えば厚生労働省に対してこういうことをやってほしいという要望書を作ったり、要望書を書くにもきちんと実態を知らないといけないので、そういった実態を把握するための勉強会を開いたり、実態を調査したり、といったことを中心にしています。例えばタクシーに関しても、最近だと少し背の高いタクシーが増えている。実はあのタクシーには車椅子のまま乗れるんですよ。車の中にはスロープがついていたりして、座席を動かして車椅子が乗れるスペースが作れるんです。ユニバーサルデザインタクシーなんていう風と呼ばれたりして国交省も車両を導入する際の助成金を出しているんですけど、そういうタクシーがあるにも関わらず、車椅子が乗れるようにするためには座席を動かしたりスロープを用意したりという手間がかかるので、タクシーの運転手さんがなかなか(障害者を)乗せてくれない。それを乗せてもらえるようにタクシーの事業者に話に行ったり国交省に話に行ったり、あと車椅子のままタクシーに乗ろうというキャンペーンをやって、この間やった時はオリパラ300日前くらいだったかな、それくらいのタイミングで全国で一斉にタクシーに車椅子のまま乗ろうという取り組みをやって、その時は180人くらい集まったと思います。実際に乗ろうとしてみたけども乗れなかったとか、乗せてもらえただけどちょっと時間がかかったとか、運転手さんの対応はどうだったかなど、そういう実態をデータとして集めて資料にまとめて国交省に持っていき、こういう問題があるからこう改善してくださいとか、そのようにデータを取って提案をするという活動をメインでやっています。

―バリアフリーのタクシーに関するプロジェクトに、白井さんはどういう部分で関わられたんですか？

データ取って要望書を出すとかはもちろんなんですけど、広く社会全体にアピールをしたいので、新聞記者に連絡を取ってぜひ取材に来てくださいというお願いをしたり、それも記事にしやすい

ように例えばオリパラ300日前とか見出しになるような企画を考えたり、やるときはこういうことに注意してやろうとか、取り組みの企画から実施を含めて関わりました。

―ありがとうございます。今お仕事について大まかにお話をお伺いしたんですが、次はそのお仕事を選んだ理由に関してお伺いしてもよろしいですか？

僕はもともと難病を持って生まれたんです。それでも中学3年生くらいまでは車椅子にも乗らず、少し体力のない子どもという感じで学校に通いプールに入ったり体育も参加していたんですけど、中学に入って難病が一気に進行して、それから夜寝るときだけ人工呼吸器を使って呼吸の補助をしてもらったり、外出時には車椅子を使って出かけるようになりました。ただ、僕が車椅子に乗るようになった当時は駅にエレベーターが全然なかったんですよ。今は東京都内だとほとんどの駅にエレベーターがあって車椅子で移動出来るようになっていますが、僕が車椅子に乗り始めた2000年前後は全然エレベーターが付いていなくて移動が不自由でした。乗りたくて車椅子に乗るようになった訳ではないのになんでこんな自由に動けないんだと、やっぱり理不尽に思うんですよ。なんでなんだろうなっていう体験をしてみると、素直に何とかしたいなと思うんですね。でも、あと半分くらいは成り行きですかね。僕が大学に進学するかしないかって時に住んでいた家が割と明学に近かったんです。戸塚のキャンパスは遠いんですけど、白金のキャンパスはとても近かったんです。体力が無かったので、どうにか4年間できちんと卒業したいというのもあって、それにはなるべく家から近い大学しかないなと思ったんです。当時は電動車椅子を使っていなかったんで、家から歩いて行ける距離ということになって候補になったのが、慶応大学と明学でした。慶応はまあ偏差値的に無理だろうということで明学になって、でも4年間白金キャンパスに通うためには、当時社会福祉学科には昼夜開講制とい

て、主に社会人の人が通うためのコースがあったんですね。夜間中心に取って卒業出来るというような。そのコースだと4年間白金キャンパスに通えるのでそれしかないだろうと。色んな学科がある中で一番興味があったのが社会福祉だったんです。社会福祉を選んだ理由も、誰かの支援をしたいという立派な理由があった訳ではなくて、福祉のことを学んでおけば自分にとって例えば障害年金だとか、障害者の手当てだとか自分が知っていて得することを学べるんじゃないかなと。そういう少し不純な理由で福祉の分野に入りました。そこに通っている学生の皆さんは社会人の方が多くて、例えばOLをやりながらだとか、看護師をやられていて社会福祉の資格を取りたいからとか、既に介護などの現場で働いているけど社会福祉士の受験資格がないから大学で学ぼうという方とか。割とモチベーションの高い人がたくさんいたので、そういう人といろんな話をする中で、ちゃんと勉強して何らかの形で福祉に関わりたいいなと思うようになっていきました。それでも福祉の現場って結構厳しいじゃないですか。ただ利用者の相談に応じていけばいいという訳ではなくて、当たり前にも介助も出来ないとかだめだし、アウトリーチしたりだとか、様々な関係者や機関と繋がったりだとかもしなくてはいけない。当時の私にはハードな仕事だということが次第に分かりました。どうやって福祉と関わっていけばいいだろうかと迷いながら、たまたま夜間生向けにあったゼミのうちの1つが障害者福祉が専門のゼミでした。それが茨木ゼミでした。茨木先生は障害者福祉が専門の先生の中でも、とりわけ障害を持つ当事者の人達と広い繋がりをもっている先生なんですね。障害者をはじめとする当事者活動を研究対象とされている先生なので、当然先生からは当事者の活動を見てくるように言われたりだとか、シンポジウムに参加するように言われたりだとか、そういう形で茨木先生と出会うまでは全然知らなかった当事者運動などの活動を知ることが出来ました。それまでは障害者の制度というものは国が良かれと思って色々やってくれているんだろなと思っていました。しかし茨木先生と出会って

初めて学んだのが、国が全てやっているのではなくて、当事者が自分達にはこういう課題があるからこうして欲しいという要望であるとか提案とか、そういったやり取りの中で支援の仕組みが整ってきているということでした。そういうことを全然知らなかったので単純に興味深かったし、そのようなシンポジウムなどの集まりに参加していく中で、徐々にそういう活動に興味を持ち参加したいと思うようになっていて、最終的にDPIにいきたいという感じです。

—今お仕事されている場所は自分で見つけられたんですか？それとも何かきっかけがあって見つけられたのでしょうか？

そうですね、もともとDPIという団体は茨木先生の「社会福祉運営論」という講義の時に「DPIっていう団体があって」という話は聞いていて、それがきっかけでホームページを見るようになったんです。色んな集会に行ったりする中でDPIの役員の方と顔見知りにはなっていたんですけども、一番のきっかけはDPIに加盟している障害者団体のある方に声を掛けられたことです。うちと一緒に活動しませんかという感じで。それで誘われるままにその団体のメンバーになって、1年くらい経ったところに「白井さん、DPIの理事に立候補してみてください。」と推薦されました。それで立候補させてもらって、DPIの理事に選ばれたというのが最初のきっかけですね。その時はただ理事という肩書きだけだったのですが、たまたまその加盟団体がDPIの事務所の一角を借りて活動している団体だったので、活動しているときには常にDPIの人がいるという環境でした。それでDPIで何かプロジェクトをやるときなどに「白井君は理事だから少し来て」みたいな感じで巻き込まれていった、という流れですね。

—色々な偶然が重なって今の状況が出来上がっていったんですね。

積極的に選んだということではなくて、流れて

いたという感じではあるんですけど、もともと障害者になる前から曲がったことが嫌いだとか、理不尽なことが嫌いなタイプでした。なので、自分の性分には合っていたのかなと今になってみれば思います。そういう感じでズルズルと、理事なんだし、こういう集まりあるから参加してみないかと誘われることを繰り返しているうちにある時点でアルバイトになって、それから就職に至ったというような感じですね。

—ありがとうございます。次の質問です。今のお仕事に対して感じているやりのがいがあれば教えてください。

僕らの仕事というのは障害者の色々な課題に対して色々な提案をして、現状を少しでも良くしていくことなんですけど、ただ障害者のことをやっていると自ずと障害の無い人にとっても住みやすい社会になっていくと思っています。なので、障害者だけではなく社会全体を良くしていく活動だと思ってやっています。ただ、色々提案をしても8割9割は検討します、で終わってしまいます。検討するというのは要するに今すぐにはやりませんということなんですけども、大体はどんなに素晴らしい提案をしてもすぐに実現はしません。それでも言い続けているとある時点でどんと前に進むことがある。やっぱりその瞬間はやったなって思うんですね。そして、実際に自分の生活レベルで社会が良くなっているということが実感出来るんですよ。さっきのタクシーの件もそうですけど、それまでは大きい車椅子だと折り畳んでも全然乗せられないとか、折り畳めなくて物理的にどうしても乗れない場合もあるんです。なので終電を逃すと歩いて帰るしかなくなってしまいます。しかしそういう新しいタクシーが出来て車椅子のままでも乗れるようになると、終電を気にしなくて済むんですよ。それまではどこかで何かの打ち上げで飲んでいても、常に終電の時間を気にしながら行動しないとイケなかったのが、それを気にしなくても良くなったんです。皆さんはどうか分からないですけど、終電を逃してもタクシーがあると思

えるようになったのはすごい大きなことなんです。そういう瞬間がたまにあるので、それを一回経験してしまうと抜け出せないという感じですね。さらにそうやって一歩進んだのは自分がやったからではなくて、同じようなことを何十年も言い続けてきた人たちがいたからで、例えば僕が今ここで提案したことは今すぐには出来ない。でも10年20年と言い続けていると、いつの間にか叶っているんですよ。そうやって受け継がれていくものでもあるので、やったなっていう気持ちと、これまでずっとやってきた人の思いも感じられたりします。いろんな人の思いがあって社会を変えていける仕事だと思うので、人との繋がりもすごく大事ですし、そういう全ての面でやりのいを感じる仕事ですね。社会を変えるというのは一人だけで頑張っても出来ないことなので色々な人達と関わりを持たないとイケないし、関わることでこれまで自分が知らなかったことを知っていくことも出来る。皆さんはもしかしたら障害者のことは障害者に聞けば誰でも何でも分かると思っているかもしれないですけど、例えば僕は自分の障害以外のことはよく分からない。そういうのも例えば精神障害なら、精神障害を持つ人達と一緒に活動をして色々な提案を作っていく中で相互理解を深めていくこともあるので、そういうところも大きなやりのいの一つですね。なかなか普通に過ごしていたら見れない世界を見れているので、それもとてもしやすいです。

—提案をして検討中になったもので、また期間を置いて違う方向から提案したりすることはあるんですか？

同じ方向から繰り返し提案するパターンもありますし、いま仰られたように少し違う角度から言ってみたりもします。例えば教育のことで言うと、DPIとしては障害のある子どもも、無い子どもと同じ場所同じ時間に学ぶことが大事だと思っています。特別支援学校とか今はすごく増えてますけど、普通の学校で同じように学べるのが一番いいなと思って活動しているんです。でもそれは今

の仕組みの中ではなかなか難しいことでもあるので、それをやりながら別の角度から、例えば防災の時や災害の時に学校って避難所になるじゃないですか。それで学校をバリアフリーにしましょうと。つまり災害が起きて学校が避難所になった時に高齢の方とか障害を持つ方が避難できるように学校をバリアフリーにしてくださいということを提案しているんです。これはバリアフリーのことを言いながら、実はその裏には障害がある子どもたちも同じように学校で学べようにするための環境整備にもなる、そういう方法もあると思ってやっていたりします。あとは調査して事例を集めて、こういう実態があるので対応をくださいと伝えること。実際に事例があると相手も考えてくれるので、そういう感じで検討が早く進むようなアプローチを様々な角度から考えて取り組んでいます。

—ありがとうございます。これまでは白井さんのお仕事に関してお伺いしてきたんですが、ここからは大学時代のことにしてお伺いしたいと思います。まず大学時代は授業や課外活動を含め、どのような学生だったのでしょうか？

さっきも少しお話したんですけど、社会人の人が多いクラスでした。同世代の友達もいたんですけど、基本年上の人に囲まれた生活でした。仕事終わりに学校に来る人と一緒に勉強していて、現場を知っている学生さんも多かったんです。大学の授業は初めて学ぶ分野だったので、基本的に先生たちの話は「はあ、そうなんだなあ」と思って素直に聞いていました。ただ授業が終わって友達と話す時、「あれは全然違うよ」「現場はこうなんだよ」みたいな話を聞かされたりして、「ほおそうなんだ」というためになる話も聞いて学んでいました。しょっちゅう飲み会がある訳ではなかったんですけど、半期に一回くらいは仲のいいメンバーで飲みに行ったりはしていました。基本的に車椅子で当時は大学3年の途中までは手動車椅子を使っていたので、大学に行って授業を受けるだけといった感じの生活がメインでした。どうし

ても集まるときは友達に頼んで車椅子を押してもらったりしたんですけど、大体社会人の方ばかりのクラスだったので授業が中心でしたね。大学3年になった時に、手話サークルじゃないですけど、ろうの学生さんが作った同好会のような小さい集まりには参加していました。手話サークルって手話を勉強する場所だと思うんですけど、それよりもろう者の文化を学ぶという趣旨で活動していて、たまにイベントを開いたりもしていました。ろう者の卒業生の先輩でろう学校の先生をしている方を呼んで講演してもらったり、デフマジシャンというろうのマジシャンの方を呼んでマジックを見せてもらったりするようなイベントもやりました。当時は声が出せなかったので手話が出来たらいいなという動機もあって参加したんですけど、結構楽しかったですね。手話は使ってないと忘れてしまうので当時覚えていたやつはほとんど忘れているんですけど。やっぱりろうの文化って色々おもしろいなと思って。乾杯の仕方とか拍手の仕方とか、そういうのを学べたのはとてもいい経験でした。

—実習を行ったというのを拝見したんですけど、具体的にどのような実習を行いましたか？

社会福祉士の受験資格を得るための4週間の実習でした。そのうち2週間は都内にある地域の方が集まるセンターへ伺わせてもらって、当時は今よりも体力が無かったので、通勤時間を短くするためにそのセンターを運営している団体が持っているグループホームの部屋を借りて通いました。実習をやるにあたっては、私は気管切開といって気道の部分に穴をあけて生活しているので、毎日その消毒をしないとイケないんです。当時は自分で消毒などのケアをすることが難しかったので、同じ学科の社会人で看護師をしている友達に頼んで、その2週間の泊まり込み実習の期間中、実習が終わって宿泊しているグループホームに戻る時間に来てもらって、消毒やガーゼを取り換えてもらいました。それは頼めばボランティアでやってくれたと思うんですけども、ゼミの先生と

も相談をして、次に呼吸器を使った学生が明学に来た時にきちんと実習に行けるようにするために学校からお金を出してもらってやりました。こういう根拠でこの金額をケアしてくれた人への謝金として大学の方から出してください、というお願いをして認めてもらってという感じでした。実習自体は泊まり込みの2週間と、残りの2週間は社協から色々な所を転々として3~4か所で実習させてもらいましたが、結構大変でした。9時から働いても職員さんは5時以降も残業で働いているわけですよ。そういうのを見ると体力的に将来しんどいなと思って。無事に実習出来て良かったという気持ちがあった反面、福祉現場で働くときの体力面での不安から卒業後どうしようということを悩み始めたのが、ちょうどその実習の時でした。

—ありがとうございます。在学中に自分がこういうことをしておけばよかったなと思ったことや、今在学中の学生にこういうことをやっていた方が良い等のアドバイスがあれば教えてください。

全部“たれば”の話になりますが、やはり大学入学当初から電動車椅子を使っていればよかったなと思いました。自分で自由に動ける環境にないことで出来ないことがたくさんあったので、早く自分で自由に動けるような環境を作っていればよかったなと思います。とはいっても体力面で今に比べると劣っていて、しょっちゅう風邪をひいて熱を出していたので限界はあったとは思っています。それでももう少し大学の授業以外の時間を有意義に使えたらよかったという気持ちはありますね。今の学生さんたちに関していうと、僕は数年前まで社会学部附属研究所でアルバイトをしていたので、実は最近の学生さんの様子も少しは知っています。最近の学生さんは学校の学び以外のこともいろいろやっている印象を持っているんですけど、大学の学びと共に学生だからできることをどんどんやっていってほしいですね。やっぱり今のうちですからね、自由にできるの

て。どうしても就職してしまうと自由な時間が無くなるというか、もちろん仕事の忙しさもあるでしょうし、会社に属しているということでも出てくる制約もあると思うので。学生って割と気楽なポジションだと思うので、いろいろなことにチャレンジしていくのにはいい期間かなと思います。なかなか今はコロナ禍で難しいと思いますけど。あとおすすめしたいのは、是非これまで関わったことのない人と関わってほしいですね。どうしても同世代の人達でとか、自分の興味あるところにかたまったりするじゃないですか。でも全然知らないところに行ってみたり、違う年代の人と関わってみることで、気づきとかおもしろいなと思うことってあると思うんですよ。同じような人たちだけでかたまってる楽しいことをやってるだけでなく、なんかこの人面倒臭そうだなみたいな人とも関わってみる。最初は少し嫌だと思ってしまうんですけど、関わっていく中で面白いなと思うこともたくさんあると思うんですね。苦手なことも含めて知らない世界にも手を伸ばしてもらえたら思わぬ出会いや発見があると思うので、ぜひおすすめしたいです。

—では最後になるんですけども、今在籍している社会学部の学生に向けて、一言メッセージをお願い致します。

明学の社会学部の学生さんたちは先生に恵まれた環境にいると思うので、例えだるいなあと思って根気強く先生の講義を聞いて興味を持って質問すれば、様々なことを教えてくださいます。なにかあれば先生を頼ってほしいですね。社会福祉も他の大学では各分野に専任の先生がいることがなかなかない環境なので、是非先生の話をよく聞きながら、ただそれを全て鵜呑みにするのではなくて、自分たちなりにうまく咀嚼しながら、今後の社会人生活にうまく結び付けていって欲しいなと思います。本当に今しかない貴重な4年間だと思いますので、明学という素晴らしい環境の中でそれをちゃんと活かして、大学を卒業してもらえればいいなと思います。

—ありがとうございます。

こんな感じで大丈夫ですか？他に何か質問ありますか？

—事前に頂いた資料の中に修士論文を「制度の谷間」というタイトルで書かれたというのを拝見したのですが、それがどのような内容の論文なのか気になりました。お教えいただいてもよろしいでしょうか？

ありがとうございます。日本の難病の人達の中には、車椅子に乗ってないし元気そうに見えるけど実は難病だという方が結構たくさんいらっしゃるんです。見た目元気そうで障害者手帳を取りにくかったりする方も多いんですが、手帳が取れないとホームヘルパーさんの支援が受けられないとか、手帳が無いことで必要な支援が受けられないという構造があるんです。歩いているし元気そうに見えるんだけど実は疲れやすいとか体力が無いってことで、普通の人だったら週5日フルタイムで働けるところを、パートや週3日で働かざるを得ないとか。あとは働くだけで精一杯で身の回りのことが出来ない、例えば家に帰って家事とかする余裕がないとか。頑張ってるけど、どんどん疲れが溜まって体調を壊してしまったり、もともと持っている難病の症状が悪化して仕事をやめざるを得ないという方もたくさんいるんです。でも制度の仕組み上そういう方が支援を受けにくいとか受けられないとか、そういう状況がある。その方を「制度の谷間」と呼んで、実際に障害者手帳を所持せず社会的には健常者扱いされるような人の生活の様子などをインタビューしました。そのインタビューのデータをもとにそういう状況があるということ、したがってそういう人たちを含めた制度を作らないといけないということを中心に書いた論文です。難病の人たちの中には外出の際は体調を整えてから出てくる人も多いと思います。だから会っている最中はとても元気に見えるんです。でも家に帰るとソファにバンキューになる感じの生活なので、見た目に関

ている状況が分からない人たちの支援もちゃんとやっておかないといけないよねと、そういうことを中心に書きました。

—コロナでお仕事に影響はありましたか？

今はスタッフ全員週2日出勤で、週3日は在宅ワークという形で勤務しています。ただ自粛中は全部リモートでやっていました。うちの団体は政策とかを提案したり、色々なシンポジウムとか集会を開いたりしています。大勢の人が入れる会場を借りて100人200人を集めてシンポジウムをやって、それを進めていくことの必要性をアピールするようなこともやるんですが、ただそういうのは人が集まってなんぼなので、人が集まれないというのはなかなか大きな痛手になっています。密はダメだと言われているので何かイベントをやるにしてもZoomを使ってやると。例年だと団体の総会と併せて全国各地で集会を開催するんですけど、今年は茨城県のつくばでやる予定でしたが中止になり、総会だけZoomでやることになりました。Zoomでやるにしても50人くらいの参加者で、その50人もいろいろな障害を持つ人たちが集まっていたので、事前の準備が大変でした。情報保障もしないといけないので、PC文字通訳をZoomの画面上に表示するためにはどうしたらいいとか、障害を持つ人たちがちゃんと参加出来るZoom会議の持ち方や事前申し込みを受け付けるにあたっての準備も結構あったので、それは結構大変でした。対面で実際に集まるときの情報保障は色々なイベントの際にいつもやっていたので、やり方や手順はある程度分かっていますがZoom上でやるのは初めてだったので、画面に総会の議題を映しながら文字通訳はどこに映すとか、そういう難題を解決していくのが大変でした。年末にもそのような集会をやる予定で、例年と同じ時間に3つくらいの分科会を同時並行でやるんですけど、それもZoomだと難しそうなのでやり方を変えなきゃいけないなみたいなこともあります。結構これまでのやり方と違う方法でやったりしているんで、その対応を考えないといけないところ

は大変ですね。

—ありがとうございます。予定していた時間を超えたので、これでインタビューを終了したいと思います。本日はお忙しい中本当にありがとうございました。

—プロフィール(白井誠一郎)—

2002年 4月	明治学院大学社会学部社会福祉学科 入学
2006年 3月	明治学院大学社会学部社会福祉学科 卒業
2009年 4月	明治学院大学社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程 入学
2012年 3月	明治学院大学社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程 修了
2016年 7月	認定NPO法人DPI日本会議 事務局次長 就任



講演会

特集 コロナ禍における変化

エッセイ

卒業生インタビュー

社会学部
卒業論文タイトル一覧

社会学部研究科
修士論文・博士論文タイトル一覧

2020年度 社会学部卒業論文 タイトル一覧

2020年度 社会学科

東日本大震災の被災地における漁業コミュニティと伝統文化コミュニティの意義 ——岩手県大槌町を事例に——

戦後日本における「特攻」表象の変容 ——小説を中心に——

在日ベトナム人留学生の現況と生活状況に関する考察 ——数的データとインタビュー調査を中心に——

学校におけるTV教材・デジタル教材の活用状況 ——小中学校でのNHK教材利用を中心に——

就業からみるセクシュアルマイノリティが抱える問題

ジェンダーレスファッションから見る社会的性差

マスメディアにおける性的マイノリティ表象と寛容性の関連性について

古着の社会学 ——なぜ若者は古着を求めるようになったのか——

LGBTQツーリズムがもたらす影響と今後の課題 ——インタビュー記事とテルアビブ論文からの分析——

「いいね」ボタンによるコミュニケーションの分析

「日本」を形づくるのは“創られた伝統 (Invention of Tradition)”か

哲学的視点から考える「笑い」 ——ラーメンズのコントを考察——

人工知能を人間と見做せるか ——ハンナ・アーレントの「人間の条件」の観点から——

郊外住宅地の可能性 ——多摩ニュータウンを例にして——

『82年生まれ、キム・ジョン』はなぜ支持されるのか ——フェミニズムの歴史と現在——

現代の「カフェ」という空間における社会性について

ジェネレーションZによるサステナビリティの可能性

日本社会におけるスポーツ社会学 ——チアリーディングというスポーツ経験から——

若者はなぜフィルムカメラにハマるのか

SNS時代のブランディング戦略

なぜ今、ラジオを聴くのか？

オンライン上での抗議活動が活発化しているのはなぜか

女性同士の対立を生み出す原因と構造

メディアコンテンツにおける女性像の表象と女性が加担するジェンダーステレオタイプの再生産との関連性について

日本のロリコン問題

現代日本における、社会の周縁化された役割を引き受ける女性たち

ホモソーシャルであり続けながら「草食化」している男性の現状 ——男子校を例に——

ジェンダーレスファッション・メイクからみる「男らしさ」「女らしさ」

人の絵画に対する好みや 評価は何によって決まるのか

発言を抑制する「空気」はなぜ維持されるのか ——発言抑制の多元的無知に関する検討——

逆転学習における社会的サポートの効果について

住民のための道の駅 ——地域愛着をはぐくむ場——

災害大国日本におけるペット避難の課題 ——東京都におけるペット避難の現状と課題を考察する——

脱インバウンドによる観光政策で地域活性化は可能か

商業施設PARCOにおける公共空間の在り方

商店街の衰退から再生とこれから ——歴史から紐解く社会的機能としての役割——

緑と水のオープンスペースは誰に対してもオープンなのか？

——二子玉川ライズのルーフガーデンが失敗したもの——

お笑いコンテンツの多様性 ——バラエティー番組と東海オンエアから考察する——

おたくが作り出す現代社会 ——おたくは経済を回すのか——

メディアと人間の関係

根拠なき嫌悪 ——性表現規制論は正当なのか——

戦後日本における天皇の存在とその変遷

情報社会におけるテレビの存在価値 ——若者のテレビ離れから探る必要性とは？——

韓流ブームの矛盾 ——なぜ韓国の文化は日本で受容されるのか——

ロックフェスティバルに関わる人々の意識の変容

人が応援するという心理 ——ジャニーズファン——

SNS時代における大学生をはじめとする若者ファッション文化の変化と可能性

ジャニーズファンが情報化社会にもたらす影響 ——ファンはどのように進化していくのか——

5Gの創る未来

「君の名は。」の大ヒット要因の背景には

K-POPの分析 ——韓流ブームは廃れないのか——

Instagramの影響力からみる広告コミュニケーション

ストックホルム症候群とリマ症候群をスタンダールの恋愛の発生段階に当てはめて考察する

犯罪報道とプライバシーの付き合い方

転落 ——悲劇的顛末に関する一考察——

グリーン・ツーリズムが持続可能な観光になるための取り組み

少女漫画より少年漫画読者が多いのはなぜか

統計から分析する男らしさと趣味の関係

地方に求められるインバウンド観光の対策 ——岐阜県高山市を事例に——

新幹線は地域をどう変えるか ——北海道新幹線開業による函館エリアの変化——

観光における食の真正性構築について

バーチャルYouTuberブームは、どのようにして起きたか

御朱印ブームはなぜ起こったか？

ライブ・エンタテインメントビジネスの需要と人気持続のための要因

人々はなぜ暗い過去をもつ観光地を訪れるのか

プラスチックごみ削減に向けた取り組みと協力関係 ——企業・行政・消費者の三視点から——

行政問題に市民団体が介入することの意義とは ——浜松市のコンセッション方式導入問題を事例に——
地方都市の在り方を考察する ——紀南地方を例に——
性別役割分業規範の現在と女性の葛藤 ——女子大学生のインタビュー調査から——
中国の教育熱と学歴社会はいかにして誕生したか？ ——教育政策・家族戦略・子ども観——
起立性調節障害及び心身症の児童生徒が抱える「しんどさ」 ——不登校との混同と教育支援の実態把握——
学習塾へのまなざし ——アンケート調査からみる「学習塾」と「学校」の関係——
東日本大震災からの復興 ——福島県と楢葉町——
リニア中央新幹線が与える影響 ——長野県飯田市を例に——
選択的中絶をめぐる妊婦の決定とそれに影響を与えた人々 ——夫と医師を中心に——
多方面からみた臓器移植について ——移植医療推進の検討——
犯罪と貧困について
不妊がスティグマになる理由 ——男性不妊と男性の役割——
時短勤務制度の利用による女性のワーク・ライフ・バランス実現
外国にルーツを持つ子どもたちの生きづらさと学習支援教室

2020年度 社会福祉学科

男性の家事・育児への参加とワーク・ライフ・バランス

韓国・朝鮮系オールドカマーに対する差別的な制度や風習

中途障害者におけるリハビリテーション支援 ——リハビリテーション施設の役割——

聴覚障害者の就労支援をもとに考える教育の重要性

高次脳機能障害者の今後の支援のあり方

障害のある方の望む地域生活

障害者雇用における職場定着を高めるための企業在籍型ジョブコーチの必要性

地方在住高齢者の生活環境とこれから

寿町の医療と福祉

高齢者の退院調整におけるソーシャルワーカーの役割を再考する ——在宅療養は患者本人の意向なのか——

食品ロスの現状と今から私たちができる取り組み

経済的豊かさと主観的幸福感の関係性

30年後の日本社会

なぜ人々は禁酒、禁煙が出来ないのか

中東諸国の社会保障に転機をもたらした1990年代の社会の変化

スポーツがもたらす社会福祉への効果について

「家族」の変遷

キャッシュレスの可能性

コロナ禍で変化した社会におけるSDGs目標達成に向けて

社会保障の民営化の功罪

多様性を活かす日本の職場環境への発展について ——ダイバーシティとユニバーサルデザインの視点からみて——

若者の人口流出における地方創生のあり方

地域住民が関わる子育て支援 ——親の働き方に合った支援と支援者へのサポート——

高齢化問題に企業はどう向き合うべきか ——SDGsという新スタンダード——

日本人の幸福観 ——北欧から学ぶ——

これからの動物愛護 ——猫殺処分問題から考える——

健康寿命と健康格差

SNSの誹謗中傷問題をどう乗り越えるか

困りごとに寄り添う学習支援教室の構築

ラジオ×福祉 ——脳の老化を防ぐ——

事例から考察するひとり親家庭の虐待

虐待を受けた子ども達へのソーシャルワーク支援と社会福祉専門職としての役割 ——施設養護の過程から考える——

施設養護における自立支援 ——ソーシャルワークとの関連を手掛かりに——

愛着障害に伴う課題の背景理解と支援方法について ——ネグレクトを手がかりに——

児童養護施設における家族支援のあり方 ——ファミリーソーシャルワークの視点——

子どもたちの抱える問題と専門職支援の課題 ——子どもを取り巻く環境との関係から——

高齢者虐待の現状と防止に向けた支援

高齢者の孤立死をめぐる実態と対策について ——なぜ孤立死は生まれるのか——

地域に暮らす高齢者の現状と課題

高齢者介護施設の介護福祉従事者のストレスマネジメントについて

高齢者の食事のあり方について

ターミナルケアの実態および連携のあり方 ——先行研究の分析を中心に——

有料老人ホームにおける看取りの実態について

自己責任論が生み出す孤立の現状と課題

若年女性における貧困問題からソーシャルワークを見つめ直す

生活保護と就労支援

犯罪の背景にある貧困とその支援

住居喪失者に対する居住支援のあり方

コロナ禍における生活困窮者の現状と支援のあり方について

生活保護を受給する精神障害者の現状及び制度のあり方について

生活保護受給者に対する就労支援のあり方について

相対的貧困世帯の高齢者への支援のあり方について

在日中国人の育児ニーズ ——家庭類型別の視点から——

障害のある外国人児童生徒の教育的支援 ——保護者の抱える困難に焦点をあてて——

オランダとアジア諸国から学ぶ 日本の英語教育のこれからの必要なこと

障害者とエンタテインメント ——誰もがエンタテインメントを楽しむことができる社会に向けて——

韓国の精神保健福祉について ——精神科病院での動向を中心として——

療育センターにおける家族支援の必要性 ——緊急事態にも対応できる支援の確立に向けて——

自閉症を重複する知的障害児の母親への「子育て支援」に関する一考察 ——療育の果たすべき役割とは——

知的障害者の就労 ——知的障害者と就労をつなげるための支援とは——

重症心身障害児(者)の社会参加の必要性 ——社会福祉法人訪問の家「朋」の実践活動から——

福祉型障害児入所施設が果たすべき役割とは ——施設の「児童養護化」についての考察——

緊急時における障害者施設の対策 ——新型コロナウイルスによる知的障害者支援への影響とは——

知的障害者にとっての就労継続支援B型のあり方について

——工賃の向上とソーシャルワーク支援のどちらを優先すべきなのか——

発達障害を持つ子どもを育てる母親の苦悩と周囲の人に求められること

——自閉症スペクトラム障害を中心に、乳幼児期と学童期について——

一人で暮らす知的障害がある人への支援についての一考察 ——8050問題、その後——
知的障害者の「居場所」を考える ——就労継続支援B型事業所を中心として——
地域と繋げる就労継続支援のあり方 ——ストレングスを活かす支援とは——
家庭養護における「家庭」と「透明性の確保」に関する考察
虐待死が減少しないのはなぜか
なぜ親は育児に向かえなくなるのか ——その要因と親への支援——
母子生活支援施設において施設内で「生活支援」を行う意義
発達障害児の親は発達障害児にどう向き合っていくべきか
児童虐待防止において、子育てひろばはどのような役割を果たしているのか
日本の子どもアドボカシーはどう変わるべきか ——カナダ・オンタリオ州のアドボカシー事務所を参考に——
母子生活支援施設における母親の自己効力感を高める支援の重要性と実践の考察
ひとり親家庭のテレワークの推進のために求められるものは何か
シングルファーザーの抱える悩みとその対策
沖縄の子どもの貧困の現状と取り組み ——イギリスの取り組みからみる対応策——
日本人が幸福になるためには ——主観的幸福度と客観的幸福度の観点から——
知的障害者の「自立」とは ——地域共生社会の実現に向けて——
障がい者雇用におけるこれからとすれ違い問題の解消について ——それぞれ求められる今後の取り組みとは——
総合型地域スポーツクラブと子どもの教育
学校外教育における教育格差問題 ——民間企業やNPOなどの団体からみる支援の形——
身のまわりのメンタルヘルス
子ども達を取り巻く諸問題と多方向からの支援の重要性
歴史から読み取るカンボジアサッカーの展望 ——カンボジアにおけるサッカー大国になるための鍵——
人とAI 技術 ——AI 技術が人々の生活にどのような影響を与え、人々はどのようになって行くべきなのか——
多様性の受容 ——「ごちゃまぜ」がもたらす可能性——
管理職に占める女性の割合を拡大するために企業が取り組むべき施策
コロナ禍における地域福祉活動の在り方
学童保育事業の現状と支援員育成の重要性 ——横浜市の放課後児童健全育成事業を通じて——
空き家の利活用から始まる地域福祉活動
地域包括支援センターの認知度向上対策
地域を基盤としたひとり親家庭の子育て支援のあり方
災害ボランティアの役割と可能性 ——期待される大学生の役割・活動——
知的障害者の地域移行を進める一考察 ——グループホームへ移行し暮らし続けるために——
ひきこもりと地域福祉
家族の多様性について
親亡き後の障害者ときょうだい児

幼少期におけるジェンダー形成要因について

障害児の未来について

不登校支援の居場所 ——不登校支援の居場所の有効性とこれからの支援について——

女性を取り巻く社会環境から考える性役割観の個別的要因について

身体障害者の恋愛事情 ——いつかはただのありふれたラブストーリーにするために——

日本の子どもの貧困について

ジェンダー規範を乗り越えるために ——性教育のあり方から考える——

プロスポーツチームによる地域貢献活動

現代における女性福祉問題と女性の社会的孤立

DV被害者支援における民間シェルターの役割の検討

『アダルトチルドレン』である女性に対する回復支援 ——生きづらさを抱える女性が幸福に生きていくために——



講演会

特集 コロナ禍における変化

エッセイ

卒業生インタビュー

社会学部
卒業論文タイトル一覧

社会学研究科
修士論文・博士論文タイトル一覧

2019年度 社会学研究科 修士論文・博士論文 タイトル一覧

2019年度 修士論文

ステップファミリーにおける親と子どもの利益の潜在的対立

——初婚継続家族を標準モデルとする社会制度の批判的検討——

人権を具現化する生活保護実践の視点 ——生存権に実践の座標軸をさぐる——

寿地区の簡易宿泊所を住居とする患者への医療継続のあり方についての一考察

生活困窮者自立支援制度の就労準備支援事業に関するメゾレベル研究 ——事業の現状と展開過程に関する分析——

児童養護施設におけるソーシャルワークの展開可能性に関する研究

——グループを媒介とした専門職支援のあり方——

社会福祉法人制度改革に関する一考察 ——二つの法人への聞き取り調査を通して——

2019年度 博士論文

在宅医療が「生活を支える」とは何か

——在宅医療および「まちづくり」の経験が在宅医にもたらした新たな医療観とその可能性——

日本の高齢者福祉における措置施設としての養護老人ホームの意義

——東京都内の調査に基づく役割及び機能の検討を中心として——

〈編集後記〉

リモートやオンライン、テレワークといった言葉が一部の人々に限定されず、あらゆる世代の生活に浸透し、我がこととして定着しつつある。災厄は社会の急激な変化を促し、その影響は『Socially』編集部にも深く影を落とすこととなった。座談会はすべてオンライン会議アプリで行われ、卒業生インタビューも従来ならば電話で連絡を取り、直接会って取材するのが慣例だったが、それらの原稿すべてが今号ではリモート取材に切り替えられ、写真もみなオンライン動画から採られている。

全世界がコロナ禍という特異な環境に身を置き、忍耐と変化を余儀なくされている中、その状況を特集としないわけにはいかなかった。今、何が起きているのか、今後どうなるのかを俯瞰的に展望することももちろん大事だが、現在進行形でコロナ禍を生きているわたしたち当事者の現実視線を落とし、現在形の言葉を記録しておくことが大事だと考えたからである。

本号に収録した計三本の座談会は、どれも大学生の「声」を具に拾い上げたものになっている。日々の暮らしが変化の連続なのだから、災厄が去ってから述懐するとその時点のバイアスが入ってしまうのを避けられそうにない。その種の変形を蒙る前の段階でリアルタイムの言葉を記録できていればよいのだが、判断は本号を読まれた皆さまに委ねたい。

座談会のボリュームが増えてくる分だけ、ほかの記事を削ってもよさそうなものだったが、学生委員たちは負担増を厭わず仕事に奔走してくれた。実際、文字起こしから編集、校正作業に至るまで彼女たちは存分に力を尽くしてくれた。授業がオンラインになったからといって、決して課題が減ったわけではなく、むしろ学生たちの負担は増えていると聞く。なので、学生たちの努力には頭が下がる思いである。おかげでまれに見る盛りだくさんな雑誌に仕上がった。最初の顔合わせのとき以来、一度も会っていないけど、みんな、エ

ラかったぞ！

また、このような息苦しい状況のなか、快く取材に応じてくださった卒業生のみなさん、あとで述懐したときに未来の目にどう映るのかわからないなかで原稿を投稿してくださった先生方にも心より感謝いたします。学生と一緒に編集作業に関わり、原稿の並びや校正に至るまで「読ませる」観点から心を砕いてくださった学内学会の坂口和容さんにもお礼を言わせてください。坂口さんの働きなしに本号の達成はありえなかった。どうもありがとう。

澤野雅樹(社会学部教員)

今回のSociallyはコロナウイルス流行の影響により、例年通りの進行では進まず苦労がありましたが、編集委員で企画や取材方法を話し合い、無事完成することができて嬉しく思います。今年度は計3回の座談会を開催し、コロナ禍だからこそ聞くことができた学生の声を記録しました。卒業生インタビューは、大学生活の過ごし方や進路を考える際にぜひ参考にさせていただきたいです。この度Socially29号にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

石岡里佳子(社会学科3年/編集委員長)

Sociallyに関わってくださった皆様にお礼申し上げます。作業が遅いために、編集委員の皆様と事務局には、大変なご迷惑をおかけしました。

今号でのインタビュー・企画はコロナ禍の中で取材を行っており、載っている写真の様子も前号までとはがらりと変わって見えると思います。2020年の記録として今号が残り、読まれていったら嬉しいです。

伊藤小春(社会学科3年)

最後までお読みいただきありがとうございます。私は、昨年度から続投で編集委員を務めさせていただきました。しかしコロナウイルスの流行

により、昨年通りに作成が進まず苦勞した部分も多くございます。そのため、無事に完成しましたことをとても嬉しく思います。最後に重ねてお礼申し上げます。この度はSocially29号にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

木島夏海(社会学科3年)

今回初めてSociallyの編集に携わらせていただきました。初めてということもあり、また、コロナの影響によって例年とは異なったやり方だったということもあり、戸惑うことも多々ありましたが、皆様のサポートのおかげで無事に原稿を完成させることができました。多くの方に読んでいただき、何か感じるものがあればと思います。最後に、Socially29号にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

高橋美衣(社会学科2年)

私は今回、初めて編集の仕事を務めさせていただきました。卒業生へのインタビューや、座談会、文字起こしなど、今までやったことのない事がたくさんあり、とても貴重な経験となりました。特に、卒業生インタビューでは、この機会がなければ聞くことが出来ない貴重な経験談をうかがうことができ、とても印象に残りました。ぜひ多くの方に読んでいただきたいです。そして、来年度も今回の経験を活かして頑張っていきたいです。

東野好花(社会学科2年)

拝啓、読者の皆様。お元気ですか。コロナ禍のおさまりが見えない現在、今回初めて本誌を手に取りするという方も、創刊号から読んでいるよという方

も、コロナ禍の影響は仕事や日常において大なり小なりの影響があるであろうとお察しいたします。

本誌の編集活動におきましても例年とは異なる変化がありました。まず、定期的に行われる教員・学生・卒業生の担当者による編集会議はすべてオンラインにて行いました。そして今回掲載いたしました座談会・卒業生インタビューもオンラインにて行いました。また、今年行われた各種企画も同様にオンラインでの実施となりました。10月開催の卒業生部会主催による「社福卒業生とのオンライン座談会」と、今号に内容を収録いたしました11月開催の学生部会主催による講演会「New normal時代の仕事を考える～これからの『社会』、これからの『働く』ということ～」の二つの企画が開催されました。これらは今年の学会活動を象徴するような内容だと感じております。

今回ご参加いただきました卒業生の皆様、「ゼミ紹介」の先生方・ゼミ生の皆様にはオンラインの接続や写真の撮影・ご提供等を頂き、例年と比べて皆様のご負担の部分が多い取材だったかもしれません。これにつきましては感謝としか言いようがありません。ありがとうございます。そして今号のSociallyでは、多くの先生方にもご寄稿をいただきました。

今号も様々な皆様の言葉を投稿論文やエッセイとともにお届けいたしました。それゆえに今回、学内学会の“たくましさ”のようなものを感じました。その原動力とも云えます今年度の学生部会すべての委員と事務方に感謝するとともに、今号も最後までお読みいただいた皆様にも感謝いたします。ありがとうございました。

(和田淳一郎 2006年社会学科卒業)

~~~~~

〈論文・研究ノートの投稿規定〉

1. 資格：原則として明治学院大学社会学部学生（院生等含む）、卒業生、教員及び賛助会員とする。
2. 内容：社会学・社会福祉学及びそれらの関連分野に関するもので原則として未発表のもの。
3. 枚数：400字詰原稿用紙換算で40枚以下
4. 応募方法：執筆を希望する方は住所、氏名（フリガナ）、電話番号、メールアドレス、所属、内容を下記のいずれかの方法で事務局に連絡する。
  - ①メール  
送信先アドレス：shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp
  - ②郵送  
送付先住所：〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
明治学院大学社会学部附属研究所内学内学会事務局
5. 執筆希望応募締切：9月末日
6. 原稿締切：11月末日
7. その他：本誌に掲載された論文については、明治学院大学機関リポジトリに掲載され公開されるものとする。ただし、事情により執筆者が公開を希望しない場合は、この限りではない。



---

## 編 集 委 員

澤 野 雅 樹    石 岡 里 佳 子    伊 藤 小 春  
木 島 夏 海    高 橋 美 衣    東 野 好 花  
和 田 淳 一 郎

---

2021年3月1日 印刷

2021年3月16日 発行

東京都港区白金台1-2-37  
明治学院大学社会学部附属研究所内

編 集 者 明治学院大学社会学・社会福祉学会  
代 表 澤 野 雅 樹  
電 話 03(5421)2957

東京都港区白金台1-2-37  
明治学院大学社会学部附属研究所内

発 行 者 明治学院大学社会学・社会福祉学会  
会 長 大 瀧 敦 子  
電 話 03(5421)2957

印刷会社 相 和 印 刷 株 式 会 社  
電 話 03(3631)0044

---

# Socially

No. 29 March 2021

## 〈巻頭言〉

コロナ禍は、将来どのように語られるのか……………大瀧 敦子

## 〈講演会〉

New normal時代の仕事を考える

～これからの「社会」、これからの「働く」ということ～……………柏村 美生

## 〈特集 コロナ禍における変化〉

コロナ禍における「監禁状態」を考える……………石原 英樹

コロナを経て「祭り」をとりもどすのか……………金子 充

**プレ座談会**……………石岡里佳子／石川 真衣／伊藤 小春／  
木島 夏海／池田 希帆／高橋 美衣／  
東野 好花

認知症家族介護者が抱える課題とポストコロナ時代への展望……………金 圓景

ささやかな「奇跡の年」のために……………澤野 雅樹

**第1回座談会**……………井村 知貴／栗原 瑞生／生澤 美結／

学校とは何するところであったか……………明角 優花／伊藤 小春／高橋 美衣

—コロナ禍における教育社会学オンデマンド講義から—……………元森絵里子

**第2回座談会**……………石川さやね／鈴木 菜々／鈴木穂乃花／  
山田 梨穂／石岡里佳子／東野 好花／  
澤野 雅樹

コロナ禍における医療ソーシャルワーカーの相談援助の変化……………下田 尚子

働きかた、働く場所の変容を考察する……………沼田 元明

「フィルターX」とは何か

—身体性向としての社会的距離に関する一考察—……………岩永 真治

## 〈エッセイ〉

明治学院大学社会学部機関誌の歩み……………丸山 義王

## 〈卒業生インタビュー〉

ITを活用して問題解決へ

—ICT(情報通信技術)アウトソーシング事業に従事する宇佐美果乃さんに

お話を伺う—……………東野 好花／石川 真衣

自分なりにコツコツと頑張り、ベストを尽くす

—東京オリンピック・パラリンピックに携わる小日向藍菜さんにお話を伺う—……………石岡里佳子／伊藤 小春

言葉を人に届けるお仕事

—テレビ局員・アナウンサーとしてお仕事される重信友里さんにお話を伺う—……………伊藤 小春／石岡里佳子

自分たちを通して社会全体を良くしていく

—障害を持つ当事者として勤務される白井誠一朗さんにお話を伺う—……………木島 夏海／石岡里佳子

2020年度 社会学部 卒業論文 タイトル一覧

2019年度 社会学研究科 修士論文・博士論文 タイトル一覧

Sociology  
and  
Social Work